昭和八年七月七日 第三種郵便物認可
昭和十年六月廿五日印刷納本 隔月一回一日發行
昭和十年七月一日發行

精神分析

第三卷第四號

同性愛と異性愛

昭和十年七月・八月

研究

――(裏面へ續く)――

東京精神分析學研究所出版部

RADCLYFFE HALL

本研究所關係者名簿（いろは順）

●印……客員
*印……特別誌友
△印……雜誌委員

△東京濟生會 法學士　岩倉具榮
*東京澁谷區　岩倉良子
*奈良縣　茨木基忠
*大連　伊藤梅吉
*京城帝大　伊東高麗夫
東京本郷區　伊東豊夫
*東京日暮里　伊東八重子
*東京淀橋區　入江敏夫
*神戸 第一中學校　池田多助
新潟縣　磯野信司
東京本郷 英語通信社　今井信之
東京本郷區　今福山江
●人生創造社　石丸梧平
*滿洲國吉林　石橋園穠
*愛媛縣　石川學位
*大阪北濱 華陽堂病院　井尻辰之助

△早稻田大學　長谷川誠也
●東北帝大醫博　早坂長一郎
*愛知縣　本田了惠
●名古屋醫大 醫學士　堀要
*北海道函館　堀濱吉雄
東京　朴永鎭
東京日本橋　時平佐喜雄
駒澤大學　富田義介
*東京荒川區　遠山四郎
滿洲國新京 農學士　千葉廣洋
*新嘉坡　林獨步
京都、醫學士　和田節雄
*南洋パラオ　横田仁治
●警視廳技師 醫學士　金子準二
東京牛込　狩野儀三郎
●東洋大學　高島平三郎

東京下谷區　高橋鐵
東京淺草區　高橋春子
*西の宮市　田中雅子
*大阪天王寺　田中金之祐
東京杉並區　田内長太郎
*宮崎縣　竹之下學山
阿佐谷幼稚園　高崎能樹
*東京本郷區　高村光太郎
本研究所内　高水力太郎
慈惠醫大 文學士　武田忠哉
横濱鶴見　立川玄一郎
*京都中京區　津田九郎
山梨縣　辻修
●廣島文理大 文博　塚原政次
東京神田區　土屋喜一
北海道札幌　浪越春夫

＊京都府 中野正一
東京本郷區 中山太郎
＊帝大在學 中村浩
＊金澤市 南雲義男
△東京杉並區 長崎文治
＊東京品川區 長松美代子
東京蒲田區 生形要
●早稲田大學文學士 内田勇三郎
司法省 内山淑彦
＊山形縣 梅木米吉
●東京能率研究所 上野陽一
＊北海道小樽 井上千秋
＊朝鮮群山府 井川徹二
東京麻布區 小野田幸雄
東京本郷區 小柳津邦太
成城學園前 奥村博史
＊京都府舞鶴 奥本島田
＊横濱神奈川區 太田繁子

△本研究所内 大槻憲二
右同 大槻岐美
＊奉天 大橋正二
東京杉並區 大久保眞太郎
＊宇治山田市 大山浩
＊東京荏原區 尾形孝治郎
●廣島文理大文博 久保良英
甲府母の友社 窪田甲子郎
東京淀橋 倉橋久雄
精神分析學會 矢部八重吉
●東北帝大醫學士 山村道雄
＊神戸精神衞生相談所 山田一郎
東京赤坂區 山本鎮雄
＊京都左右區 米原浩
●東北帝大醫博 丸井清泰
＊山形縣 松田啓治
＊東京大塚 松平定光
東京麹町區 松居桃多郎

＊佐世保 松尾乙二
●東京四谷區 慶大神經科教室
＊東京本郷區 福間光
＊獨立美術協會 福澤一郎
＊札幌 福原久二郎
＊福島縣 藤田由美
＊東京麹町區 藤井和子
＊東京中野區 藤木義輔
臺灣阿里山測候所 近藤石象
江戸橋病院醫博 小山良修
＊長野縣 小林忠藏
東京麻布區 小林五郎
東京府砧村 小林正
東京板橋區 小松徳
東京麻布區 小杉長平
●精神分析學診療所、醫博 古澤平作
東京下谷 古城美一
東京豐島區 江戸川亂歩

●東京、醫博　雨宮保衛
*神戸市須磨　麻生信道
*奈良縣　佐藤政宕
*東京府　佐々木龍治
●東北帝大醫學士　木村廉吉
●日語文化學校　北垣隆一
早大在學　北垣照雄
*京城府　三井慶次郎
●成女學校　宮田修
右同　宮田齊
*長野縣　三輪輔
英語通信社　皆川郁夫
*東京、醫學士　芝川又太郎
*栃木縣　島崎勝次郎
*沖繩　島袋常雄
●靜岡腦病院醫博　式場隆三郎
*東京　清水桃子
トモヱ幼稚園　霜田靜志

*熊本五高　澁田見勝亮
大阪　廣井重一
*「雲雀」誌主幹　廣瀬操吉
*東京牛込　平野市郎
*橫濱中區　平野良太郎
東京　平塚雷鳥
早大演博內文學士　平塚義角
●東京、醫博　諸岡存
*朝鮮平安北道　森永醇
*東京府　森下雨村
*栃木縣　鈴木武四郎
●東京、醫博　鈴木雄平
*ハワイドクトル　菅村芳弘
*東京淀橋區　須田勇
●名古屋醫大醫博　杉田直樹

讀者諸氏はなるべく特別誌友又は研究會員となつて. 我等の事業に直接參加せられむことを希ふ。その規定に就いては卷末の〔研究所事業案内〕を參照ありたし。

同性愛及び異性愛の心理

大槻憲二

一、同性愛の生物學的及び心理學的意義

同性愛とは、男女何れにもせよ、その性對象として同性者を選ぶ如き性的傾向を云ふ。然るに、性對象としては異性者を選ぶのが普通（即ち常態）と見なされてゐるから、同性愛は一種の變態性慾と見なさなければならない。ところで、フロイドは變態性慾を對象に即しての變態と、目的（仕方）に即しての變態とに分けて研究してゐるが、同性愛は云ふまでもなく、前者に屬するものである。對象に即しての常態とは、年齢差のあまり甚しくない男女の結合を云ふのであるが、變態の內には同性間のものゝみならず、人獸間のもの、人間と人形との間のもの、又は幼童を對象とするもの、又は對象を單に空想中に描くものなどがある。

併し、同性愛は確に變態ではあるが、これを果して病的と云ふことが出來るかどうかは、なほ疑問である。性慾は元來、生物學的には、種族保存又は持續のための手段として發生したものと認められるが故に、その手段を果すために何の意義も價値もない同性愛の如きは、生物學的には確に病的、又は變質と呼ばれ得べきものであらうが、心理學的には病的又は變質と呼ぶことは出來ない。何となれば、同性愛者はその心理的機能に於いて常態性慾者に比して必ずしも劣らず、否寧ろ却つて、時には遙に優秀な個人が屢々その間に發見せられるからである。同性愛の心理的意義

は何であるか。それは漸次に研究して行くことゝし、こゝにはまづその種別から研究して見なければならない。

二、同性愛の種別

同性愛者は種々な方面に於いて種々な態度をとるものであるが、フロイドに依ればその種別は次の三者とせられる。但し、これ等は結果から見た區別であつて、原因から見たものではないと云ふことを注意せられたい。

（イ）完全同性愛者――これは同性者だけが性的對象となり得、異性は決してその性的憧憬の相手とはならず、或は時にいやな感じさへ起す如き場合である。

（ロ）心理上の兩性具有――これは、同性異性の二つが性的對象となり得るものである。それ故、何れか一方の性のみを目的とする特性は、この程度の同性愛には缺けてゐる。

（ハ）偶然的同性愛者――これは或る一定の外的條件から起るもので、殊に戰時や寄宿生活の場合に於ける如き、常態的性對象の不自由から、或はその模倣から、屢々起るものである。彼等は同性を性的相手として、滿足を得ることが出來るものである。

このフロイドの分類は如何にも自明の事のやうに思はれるが、これを他の學者の分類と比較して見ると、その優秀で徹底してゐることが首肯せられる。クラフト・エービングは同性愛者を三分して次の如くしてゐる。（守田有秋氏著『同性感の研究』に依る。）

（A）同性色情者――これは我々が普通に同性愛者と稱してゐるもので、同性にのみその愛慾の對象を見出すものである。

（B）女性的男子――これは男子でありながら其の感情、其の感覺が女性的であるがために、同性の中に愛慾の對象を求めなければならない人物である。

（C）男性的女子――これは感情的にも、性感的にも、女性といふよりはむしろ男性的である。のみならず、その

肉體的の一部も普通の女性より多少異る點が發見せられる。

と云つた調子である。併し結局、BとCとはAの内に包含せられてゐるのではないだらうか。私はかゝる分類の意義を理解することが出來ない。これに比すると、ヒルシュフェルドの説明（分類ではないが）は、遙に肯綮に當つてゐるものがある。曰く――

「男子が女性的であればあるほど、益々男性的の型を愛する。又、男性的の特徴が優越であればあるほど、その人は益々女性的の外貌性格を持つた個人、卽ち少年を愛する。これと對蹠的に、女性同性愛者は、自分が女性的であればあるほど、男性的なものを持つた精力的な婦人、女流美術家、女流文學者を愛する。そして、自分が男性的婦人であればあるほど、純粋な、可憐な少女に愛を感ずる。」と。

併しこれ等の説明も、精神分析學が與へた明白な命題に遠く及ぶものではない。曰く、――如何なる同性愛者も、同性の内に於ける異性を愛してゐるのである。故にその意味に於いて、如何なる同性愛も、形式上はともかく、内容上では異性愛である、と。から云ふ考へ方に當然關係あるものはフェレンチの種別である。彼は「主體的同性色情者」と「對象的同性色情者」とを區別し、前者は自分を女と感じ且つ振舞ふものであり、後者は全然男であつて、たゞ女性的對象を以て同性者に代へてゐるだけであると云ふ。前者はマグヌス・ヒルシュフェルドの所謂「性的中間級」と同じものであり、後者は「强迫神經症者」と同じであると云ふのであるが、私にはこの種別はまだ再考の餘地があると思ふ。

三、先天的か後天的か

同性愛がもし先天的なものとなれば、それは種別の内の第一のものにのみ該當するわけである。彼等の内には、生涯まだ一度も異性に對して愛情を覺えたことがないと云ふものがある。第二、第三のものは、併し、先天的とは云ひ難い。故に、同性愛の或るものは先天的、或るものは後天的と考へるのが、妥當のやうに思はれる。

一切の同性愛を後天的であると云ふ考への人々もゐる。その根柢は何かと云ふに――

（一）多くの同性愛者（並びに完全同性愛者）に於いて、幼兒期に一つの强い性的印象を受けてゐることが證明せられ、この性的印象の連續の結果として、この同性愛の傾向が現れてゐること。

（二）他の多くの同性愛者に於いて、その人の早期に於いて、或は後期に於いて、同性愛の定着へと導いたのである。（それ等二種の影響とは、例へば、同性と專ら關係を持つてゐたこと、戰時に同性等と共に生活してゐたこと、獄舍中に禁錮せられてゐたこと、異性交際の危險、獨身、性的無力などである。

（三）催眠術をかけて暗示を與へることに依つて、これを取除くことが出來る。この事實は、同性愛が先天的なものとなれば、頗る不思議とせられねばならない。

これ等の諸見地から考へて見ると、先天的同性愛なるものゝ存在は確に疑はしい。これに對しては、ハヴロック・エリスの如きは次のやうに反對することが出來ると云つてゐる。卽ち、先天的同性愛者とされてをる人間をもつと正確に調べて見ると、彼のリビドー方向は早期幼兒時代の經驗に依つて決定されてをるらしく、その經驗は意識には保留されてゐないが、適當な影響を加へれば記憶に呼醒ますことが出來るのだと。同性愛とはつまり、性本能が種々な外的事情に決定せられて屢々變化を生ずるに過ぎないのだと云ふのがエリス說である。これは如何にも尤らしく見えるが、併し、少年時代に種々な同性愛的誘惑を受けたり、同性者との相互自慰的な性的影響を受けたりしてをりながら、同性愛者とはならず、或は一時的に同性愛者となつてもそれに終始しなかつたりする人々が明かに澤山あると云ふ多くの事實があるところを見ると、それが反證となつてエリス說は覆されるわけである。そこで、先天的か後天的かの何れかにこの問題を片付けようとするのが抑々無理であるか、或はかう云ふ考へ方だけではこの問題を解決することが出來ないか、何れかであらうと云ふ風に考へざるを得ないのである。

では、同性愛の起源は何であらうか。同性愛の本性は、それを先天的（生得的）と考へても、後天的（經驗的）で

あると考へても、解決はつかない。先天的なものとすれば、人は或る特定の性對象と結び付くべき先天的な性本能を持つて生れるのだとでも云ふのだらうか。これはあまりに粗雜極まる考へ方である。このやうな說明には我々は滿足出來ないで、先天的同性愛の本性中に何があるかを明かにしなければならない。もし後天的とすれば、種々な偶然的な影響だけでさう云ふ變態性の獲得を說明し得に足るものかどうかと云ふことが問題だ。始めに（先天的に）さう云ふ影響に內應すべき何物かゞ既存しなかつたと云へるだらうか。この先天的な何物かを否定することは、多くの事實がそれを許さない。

四、先天的要素とは何か

同性愛は先天的か後天的か、何かに片付けねばならないやうに考へたのが、一つの根本的な誤りで、その何れでもあると考へるべきである。これに氣付くことの遲かつたのは、從來の學問の仕方がとかく形式論理學的（意識心理的）であつたからだと思ふ。一つのものを理解すると云ふことは、そのものを他の類似のものと區別すると云ふ事に外ならないが、併しその逆にたゞ區別しさへすれば理解したことになるとは云へない。相異るものゝ間に共通點を發見することも亦、その眞相を理解する上に必要であることを、十分に氣付かねばならない。如何なる點が共通し、如何なる點が共通してゐないかをありのまゝに知ることこそ、一つの物と他の類似の物との關係を正しく知ることになるのだ。

そのやうな形式論理的錯誤は、また男女の區別の場合にも適用せられてあつた。卽ち、各々の個人は男女の何れかであつて、男であるか女であるかを截然區別せらるべきものと考へられてゐた。併し科學の硏究するところに依ると、このやうな區別は、最も嚴格な意味に於いては（常識的な意味に於いてはともかく）成り立たないのである。男女の區別は、肉體に於いても精神に於いても嚴格に科學的に與へる事が不可能であると云ふことになつてゐる。卽ち、人間は總てその外形の如何を問はず、實質上兩性具有的である。解剖的兩性具有は、實際或る程度に於いて、常

態者に存してゐるのだ。常態的の形態を具へた如何なる男女に於いても、異性の器官の痕跡を殘してゐないものはない。これ等の痕跡は不熟の器官として機能なく存續してゐるか、或は他の機能を引受けるために形が變つてゐるのである。この解剖的事實は既に早くから知られてゐたことで、この事實からして人々は、兩性具有が本來先天的であると云ふことを認めるやうになつたのである。

この考へ方を心理的方面に移して、變態としての同性愛を精神的兩性具有の現れと考へるやうになつたのは自然である。併しこの問題が解決するためには、他の事情が一つ必要である。即ち、精神的並びに肉體的の兩性具有の存するところ、常に必ず同性愛が存すると云ふことであつた。然るに、第二の期待は外れたのである。精神的に兩性具有の者が常に必ずしも肉體的に兩性具有であるとは限らないのである。ハヴロック・エリスに依れば、同性愛者には性慾衝動は弱つてゐるさうであるし、また器官が多少鈍くなつてゐると云ふ學者もあるが、併し常に必ずさうだとは云へないとフロイドは云つてゐる。要するに、同性愛と肉體的兩性具有との間には必然的の關係がないと云ふことを、我々は認めざるを得ない。たゞ同性愛は心理的兩性具有と云ふことゝは、必然的の關係があるが、心理的男性又は心理的女性とは何であるか。それは分析學の力を以てしても今日のところ、能働性と受動性と云ふ言葉を以て置換へ得るに過ぎないやうである。即ち、同性愛に先天的要素がありとすれば、それは心理的兩性具有としてである。併し心理的兩性具有に非ざる人間は存在しないわけであるから、一切の人間は同性愛者となるべき可能性を持つて生れて來てゐるわけである。併し一切の人間が同性愛者となるわけではないから、或る特定の個人を同性愛者とならしめるものは、その個人の先天的要素が特別に强烈なためか、或はその人の後天的經驗に依る定着が强烈なためか、何れかである。さうして恐らくはこれ等兩者が相助け合つて、同性愛的傾向を存立せしめるのであらうと思はれる。

五、後天的要素とは何か

精神的に兩性具有であるものが、同性愛者となると云ふことは、極めて自明の事のやうに思はれるが、併し考へて

見ると一向自明でないのである。こゝに一人の男があるとする。その男は兩性具有者として男性的精神と共に女性的精神をも相當多量に持合せてゐるとする。その相當多量なる女性的心理のために同性者なる他の男性に愛着を持つとすると、彼はその限りに於いて（形式上はともかく）實質上異性愛者であつて同性愛者ではない。（勿論、普通に云ふ同性愛とは形式上のことである。）またその場合、彼が別に持合せてゐるその男性的心理はその場合どうなつてゐるのであらうか。全然抑壓されてゐるのであらうか。全然抑壓されてゐる場合もあるかも知れないが（併しその場合には如何にして？　と云ふ事の問題が殘つてゐる）、抑壓されない場合もあるだらう。その場合にはその男性的心理は他の一半（女性的心理の働き）に對して如何なる働きをなすか。以上は男性同性愛者の場合に就いての考察であるが、女性同性愛者の場合に就いても、その逆が同樣の方途に於いて考へられねばならない。

併し同性愛は、非常に異性的な心理を多量に持つた男又は女に於いてのみ見られる現象ではない。非常に男性的な男にして同性愛者となり、非常に女性的な女にして同性愛者となる場合もある。また實際さうでなければ、女性的な同性愛男性、又は男性的な同性愛女性はその對象を獲得し得べき機會がないわけである。卽ち、こゝで一つの中途の結論を與へて見るならば、男性的な男性は同性異性の別なく、非常に女性的な對象に愛着する傾向があり、その反對に、女性的な女性は同性異性の別なく非常に男性的な對象に愛着する傾向が（もしそこに他の傾向が加はらない限り）生ずると云ふわけである。

併し、大抵の人間はみな男女兩性的であるのだから、大抵の人間は同性愛者及び異性愛者となり得べき二つの傾向を具へてゐるわけである。それが特別に同性愛となるべく强迫的に驅り立てられるとするならば、そこに何か後天的な經驗に依る定着が神經症的に働いてゐるためであると認めないわけには行かない。ではその經驗に依る定着とは何であるか。それは、從來の分析研究の結果を總覽して、大體三つに區別することが出來るやうである。

一、ナルチスムス――ナルチスムス（對象纒綿以前のリビドー卽ち自我本能）を後天的要素に數へることはどうかと思はれるが、對象から引揚げられた以後のものを主とし、廣義に於けるナルチスムスを意味するとしておく。その

やうなナルチスムスが同性愛的傾向發生への契機となることは勿論である。何となれば、同性者は異性者よりも自分に近く、從つて同性者を愛することは異性者を愛するよりも自己愛（ナルチスムス）に滿足を與へるからである。また現に年齢から云つても、ナルチスムスが最も盛んである時期に於けるほど、同性愛は盛んであるからである。幼兒期は最も純粹な形に於けるナルチスムス（自我本能）が盛んな時であるが、この時期に於いてはまだ性感は性器に統裁せられてゐないから、その同性愛ぶりは性器的でなく、性心理的であるが、人々の眼に判然してゐる。それが思春期になると、既に性器の統裁を見てゐるので、その發現は非常に露骨になつて來る。それが年齢の進むに從つて衰退して行く傾向は一般的であると云ひ得る。種族發達史上に於ける幼兒は野蠻人であるが、彼等に於いても同性愛は意外に多く見られるのである。少くとも文明人としての個人に於いては、同性愛傾向の消長はナルチスムスのそれと正比例すると概論することが出來るであらう。

二、促進的幼時定着――幼兒時代に於ける或る種の經驗が同性愛を促進する。卽ち、幼兒時代に專ら同性者に依つて世話せられたものが、異性に依つて世話せられたものよりも、同性愛者になり易い傾向あることを云ふ。この事については併し私は多くの實例を持たないし、先哲の報告に就いても多くを知らない。また男子に於けるよりも婦人に於いて同性愛者の多いのは、婦人もまた幼時に於いて主として同性なる母に依つて世話せられる者が大多數であると云ふ事實と必然的な關係がありさうに思はれる。併しもしこれが事實とすれば、その心理的意味は何であらうか。兩性具有者としての當該幼兒が、自分を世話してくれた同性的對象と同一化するためであるとする。さうすると、その同一化とはどう云ふ意味かと云ふに、それは本人の內なる男性ならば男性が、相手の男性に依つて量的に强調せられると云ふ事であるとする。すると、その强調せられたる男性が、本人の生長後に彼をして同性をその性對象に選ばしめるとすれば、その心理的意味は結局ナルチスムスと同樣なものとなる。

他方、フロイドはまた（恐らくは、男子同性愛について）「幼年時代に强い父の亡くなることは、同性愛の誘因となることが一再でない」と云つてゐるが、この言葉も二樣に解釋され得る。本人の內なる男性がその同一化的憧憬の

對象たる父の失はれたゝめにその補償としての同性を生長後に求めると云ふ意味にも解釋されるし、父の亡くなつたゝめに、必然的に異性者なる母にのみ專ら世話せられ、從つて自分の內なる女性が量的に多く養成せられ、即ち女性的となり（母親に同一化し）、かくして男でありながら女として男性を對象に選ぶやうになると云ふ意味か、そこの關係がなほ未だ判然しない。これ等の諸關係に就いては、なほ研究すべき問題が甚だ多く殘されてゐる。

併し何れにもせよ、幼兒時代の經驗に依つて、生長後の同性愛的傾向が促進せられることがあると云ふ一般的命題だけは、確實に下すことが出來るであらう。

三、禁制的幼兒定着――フロイドは「札付の同性愛者と雖も女の魅惑に對して決して不感なのではなく、婦人の惹起す亢奮を常に男性對象に轉嫁するのだと云ふことを屢々發見したのである。かくて彼等は生涯の間、自分の同性愛の起源となつた機制を繰返すのである。彼等が强迫的に男子を求めるのは、彼等が不斷に婦人から遁れようとしてゐるためであることが分るのである。」と云つてゐる。（原書全集第五卷、「性說に關する三論文」一八頁脚註。春陽堂版全集第五卷、二三頁）

そこに强迫的な要素が加はつてゐる點に於いて、このやうな場合は、以上三種の內で、最も病的な機制であると云ふことが出來る。これに類似の機制として、フロイドはまた次のやうな場合を擧げてゐる。「後年に同性愛者となるものは、その幼年時代に婦人（大抵は母）に對して非常に激しい、併し短時期の定着を起し、さうしてその定着を克服した後に彼等は自分自身を婦人に同一化し、さうして彼等自身を性對象とするのである。つまり彼等は、ナルチスス的根據から進んで彼等自身に似た若者を求め、それを彼等は彼等の母が自分等を愛したやうに愛さうとするのである。」（右同個所）さうしてその好個の實例をルネサンスの巨匠レオナルド・ダ・ギンチに求めて、かの一代の名論『レオナルド・ダギンチの幼兒期記憶』を書いたのである。この場合に於いても、その同性愛的傾向に病的、强迫的機制が多少は働いてゐないとは云へないが、併しその「定着」は完全に「克服」せられて、その同性愛は純粹に「昇華」せられてゐる。その點に相違があるのであらう。但しこの場合、ナルチスティッシュな男は自分に似た若者を愛

し、超自我の强い男は父親型の同性者を愛すると云ふこともあり得るであらう。

何れにもせよ、そこにエディポス的な禁制が働き、その禁制のためにその人が同性愛へと追ひやられてゐる點に於いては、變りはない。

六、結　語

以上、縷述して來た考究に依つて、同性愛の本質が、精神分析の研究に依つても未だ不十分にしか分つてゐない（從前の精神病學などの研究に比較すれば、非常な進步ではあるが）と云ふことを認めざるを得ない。併し同性愛の問題を研究することに依つて、直接に同性愛問題以外に、或は以上に、重大な問題への示唆を得たとフロイドは說いてゐる。それは、現代の文明人一般が性對象と性本能との間の關係をあまり密接に考へ過ぎてゐると云ふことに氣付いたことである。普通に變態と云はれてゐる場合を研究して見ると、性本能と性對象との間に聯結のあることが分るのであるが、所謂常態の場合であると、そこに一定の本能には一定の對象が伴うてゐるので（そこに誰の場合でも同じやうな統一があるので）そこにもやはり聯結があるのだと云ふことを見失ふやうになる危險がある。卽ち、常態者と雖も、誰でも同じではなく、そこに個々の區別があるわけである。それ故に、衝動は衝動、對象は對象として別々に考へて見ることが必要である。性衝動は多分その對象から全然獨立したもので、對象からの刺戟がなくとも自然に勃發して來るのである。

また、同性愛にはその性目的（仕方）に就いて別に統一がないと云ふことを注意せねばならない。男が肛門に依つて性交したからとて、それで同性愛と云ふことにならぬとフロイドは云つてゐるが、尤であると思ふ。自慰を專らその目的（仕方）とする同性愛者もゐる。さうして性目的が單に感情の發露（所謂プラトニック・ラヴ）だけにあるものと認めねばならないことは、この場合に於いて異性愛の場合よりももつと屢々起る。換言すれば、同性愛の場合の方が昇華（純化）され勝ちなのである。（完）

同性愛の悲劇『淋しさの泉』に就いて

宮田齊

歐洲大戰は西歐の文化を混沌狀態に導き入れ、そのかみの平和なロマン的夢を打ち摧いて、不易不變と信じられてゐた諸々の既存の理想を奪ひ去つた。人々は據るべき所を知らずして、不安な精神的其の日暮しを始めざるを得なくなつた。此の混沌と不安とは、所謂「戰後の悲劇」(post-War tragedy)と稱する種々の偏向を產み出した。と云ふより、此の混沌と不安の爲に、人間精神の深奧の一角に潛んでゐた諸々の偏向が行動となつて表面に現れ初めたのである。就中、性を中心とする人間行動の一切は、多くの怪奇な傾向を示した。此の大戰と云ふパンドーラの箱が播き散した惡の一つは、性の忘失である。戰後の歐羅巴は、如何ばかり多くの「性を失つた」女性をつくりあげた事か！それは彼女等の服裝を通じて、短く刈りあげた頭髮、言葉遣ひ、彼女等の生活の一切を通じて我々に示された。そして今それは彼女等の魂の貧困と不安とによつて、より深酷に示されつゝある。我國の文化を指導する立場に在る人々も、勿論その姿に驚かされ、その波が自國の女性達の間にまで押寄せ來るのを憂へた。併し彼等の多くは、單にその外面的表現を見て之を擯斥し、アメリカ風のフラッパーとして顰蹙するに止まつた。だが、此の自然に悖る傾向は排斥される事によつて、決して消滅しはしなかつた。否それは一層酷烈な姿を示しつゝ現在我々の眼前に展開されてゐるのである。而して人は將してその據つて來る因由を詳に考究してゐるであらうか。

「男裝の麗人」を公正なる立場から觀察してゐるであらうか。下劣な興味、既成道德觀に基く非難、それ以外、それ

以上の何事がなされてゐるであらうか。

最近の新聞紙が一齊に「男裝の麗人」事件を報導した時、私は嘗て英國の讀者層を震駭せしめたラドクリフ・ホール(Radclyffe Hall) 女史の小說『淋しさの泉』を想起し、その作品を產み出した偏向が我國の女性の間に悼ましくも現實の事實として存在してゐる事を今更らしく痛感したのであつた。

『淋しさの泉』(The Well of Loneliness) は新作ではない。初版が發行されてから少くも七・八年は經つてゐる。そればかりではなく嘗て一、二の紹介さへ行はれた事がある。然し、此の作品が當然與へらるべき考慮を與へられるまでに問題となつてゐないのは、寔に遺憾と云はざるを得ない。殊に、「男裝の麗人」的事件が一再ならず報導せられ、通り一遍の感想的批判では濟ませない事態になつてゐる今日、一入その感を深くする。私は一日も早くその全譯が上梓されて、眞劍に考慮される事を切に望むものであるが、その期を待つ間、やゝ詳細にその內容を敍べて、大方の參考に供したいと思ふ。

『淋しさの泉』は女性の同性愛を主題とした長篇小說である。と云つても、我國で屢々行はれる感傷一點張りの少女小說でもなく、英國の法官が卑猥として斥けた好色的作品でもない。英國の法廷は、此の作品を禁止した。それは英國の社會が之を憎んだからである。否、英國の社會は之を恐れたのである。我々は我々自身の全貌を如實に辛辣に描き出した作品を恐れる。保守的な英國の社會は尙更さうであつた。然らば『淋しさの泉』は抑々何事をしかく痛烈に語つたのであらうか? 以下に全篇の略筋を敍べよう。

× × × ×

「都塵を厭ふてモートン・ホールの宏壯な邸宅で、愛妻アンナと共に其の日を送つてゐるフィリップ・ゴードン卿はやがて此の世の光を見るべき世嗣を待ち設けてゐる。卿の期待は悉く未だ生れない子の上にかゝつてゐた。と云ふのは、その子が行く行くは此の豪壯なモートンの財產を繼承すべき男兒であると云ふ信念に近い豫想が卿の心を支配してゐたからである。卿は一子に命名すべきスティーヴンと云ふ立派な名まで豫定して、誕生の日を待ち焦れてゐた。

然るに兩親の期待と確信とを裏切つて、生れ落ちたのは女の兒だつた。卿の失望落膽は言ふも更なり、母親アンナの如きは、誕生の其の日から娘に對して名狀し難い反撥を感じた程であつた。

斯樣な事情の下に生を享けた娘は、女性でありながら豫定通りのスティーヴン（Stephen）と云ふ男名前に、メアリ・ガートルードと云ふ女名前を與へられ、「スティーヴン」と呼ばれる事によつて、辛うじて兩親の幻想を滿足させねばならなかつた。否、ゴードン卿の氣紛れはそこに止まらず、スティーヴンは全然男としての教育を授けられる事になつた。幼い彼女が乘馬服に身を固めて父に從つて遠騎りする姿や、專門の教師と劍術を練習する姿が屢〻見うけられた。かうして彼女は、身體も心も「男の子のやうなお孃さん」として發育して行つたのである。

スティーヴンが七歲の頃、彼女の胸の中には「熱烈な愛の欲求」が萠芽して來た。その對象となつたのは、コリンズと呼ぶ大柄の小間使で、スティーヴンは崇拜に近い氣持で彼女を愛した。毎日の拭き掃除を代つてしたいとか、彼女が怪我をすれば自分が身代りになつてやりたいと云ふ眞實な熱愛がスティーヴンの心を躍らせた。コリンズは此の「男のやうな御孃さん」の態度があまりに眞劍なので、しまひには薄氣味わるくさへ思ひ出した。さうするうち、スティーヴンは、はしなくも愛するコリンズがその戀人の馭者と密會してゐる現場を見付け、嫉妬と憤激に驅られて思はず草花の鉢をとつて二人に投げつける。こんな具合で幼ない彼女の戀は終を告げて了つた。

スティーヴンは物心ついた頃から、自分の尋常ならぬ立場を洞察してゐた。「お父さん、わたし一生懸命にさう思つたら――それともお祈りしたら男になれるかしら?」（'Do you think that I *could* be a man, supposing I thought very hard—or prayed, Father?'）こんな質問が屢〻ゴードン卿を苦しめるのだつた。さうして彼女の愛は常に積極的であり、征服的であつた。

彼女は年とともにその「男性的」な特徴を增して來、十七・八の頃にはスポーツで鍛えあげた立派な體格の持主となり、父親の指導で紳士として恥しからぬ學問を修めるが、ゴードン卿も、忠實な家庭教師のパッドルトン女史（Miss Puddleton）も、何故か彼女が男として育つて行くのを矯めてやらうとはしない。一方母親の方では、彼女が生

れ落ちた頃から彼女に對して感じてゐた本能的な反撥が募つて行くばかりだつた。

そこへ單純で、原始人のやうな強い生活力をもつたマーティンと云ふ青年が現れて、スティーヴンの愛を求める。此の事件はスティーヴン自身は素より、父親やパッドル先生をも少からず喜ばせた。「此の戀愛が成就すれば、スティーヴンは女になれる。」から皆して考へたのである。併し時はすでに遲かつた。此のロマン的な戀も、いざと云ふ土壇場まで行きながら、彼女のうちに頭を擡げた理由のない反撥の爲に、唐突な終局をつげて了ふ。スティーヴンは遂に女の戀が出來なくなつてゐたのである。

とかくするうち、父親のゴードン卿はフトした怪我がもとで急に世を去つて了ひ、彼女は何時も渝らぬ親切をもつて、自分を庇つてくれるパッドル先生の外は、世に頼るべき味方もない孤獨な生活を始めなければならなくなつた。そこへアンジェラ・クロスビイ（Angella Crosby）が登場する。これは極端に神經の尖つた、疑ひ深いラルフ・クロスビイと云ふ男の細君で、以前は寄席の女優をした事もある經歷のはつきりしない女である。スティーヴンはまたしても此のアンジェラに心を惹かれ、終には全靈をあげて彼女に戀するやうになつた。然しアンジェラはスティーヴンと異つて、單に普通の女に過ぎなかつた。彼女はスティーヴンの戀があまりに強烈になつて來るので、猜疑心の強い夫の思惑を恐れ、剩つさへ偶然モートンに現れたスティーヴンの幼友達のローヂヤに心を移して、つひにはスティーヴンの眞劍な愛を裏切り、凡てを夫に告白して了ふ。ラルフは激怒して彼女の母ゴードン卿夫人に脅迫的な聲明書を送る。

元來、娘を愛さない母親は、自分の人生觀を根本から覆すやうな此の「醜聞（スキャンダル）」を知つて、スティーヴンをモートンの邸から放逐する事に決する。スティーヴンは、自分が今の今まで純潔なものとばかり信じ切つてゐた愛が、醜汚の名を以て呼ばるべきものである事を知つたのだつた。斯くして彼女はモートンを去つて行く。友としてはパッドル先生と愛馬ラフタリ（Raftery）のみであつた。

それから彼女の倫敦生活が始まる。彼女は幼い頃から好きだつた文學によつて、心の苦惱から救はれようと考へ、—

只管制作に精進して一篇の小說をものし、一躍文壇に登場するが、心の忙しさは決して慰められなかつた。第一作を出したばかりで、彼女は忽ちスランプに陷つて了ひ、やがて氣分の轉換を求めて巴里に移り住むが、筆は依然遲々として進まない。

其の時、歐洲全土を一握みにして投げつけるやうな大戰が勃發した。彼女の周圍の人々は我も我もと戰線に赴いた。スティーヴン自身も歸國して看護隊の一員となり、西部戰線に立つて活躍するうち、ウェイルズ出身の田舍娘メアリ・リェウェリンと相識つた。メアリは彼女の生涯の舞臺に登場した三番目の、而して最も決定的な力をもつた女性だつた。戰終つて、スティーヴンとメアリは相携へて巴里の舊居に歸つた。スティーヴンの魂は、今や再び新しい熱と輝きとに燃えた。彼女はメアリに全心全靈を捧げ、唯彼女の爲にのみ生活し、制作する。

だが、神はスティーヴンの幸福を欲しなかつた。その昔、彼女を惹きつけたマーティンが突然巴里に姿を現はしたのである。彼は嘗ての日の戀心を忘れかねて、再びスティーヴンに接近し、彼女のうちに眠つてゐた「女」もひそやかに覺めて、彼に傾いて行つたが、何たる宿命の業か、メアリとマーティンとの間には、いつしか正常な男性と女性の健康な戀愛が成立したのであつた。

戀人として、保護者として、自分を愛してくれたスティーヴンの恩義に對するメアリの愛執、それにもまして彼女を苛むマーティンへの戀心——スティーヴンは兩人の間を割いて自分を生かさうとする試みの成就すべからざるを知つた。嘗て、モートンを去つた日、亡き父の書齋で見たクラフト・エビングの書物から知つた自分の「戀態性」(Inversion)——その自覺が彼女を弱くして了つた。

スティーヴンは破れた。マーティンとメアリが相携へて彼女に感謝しつゝ去つて行く姿を眺めつゝ、彼女は身を悶えて神に祈るのであつた。『神樣、全世界に向つて私達をお認め下さい。私達にもまた生きて行く權利をお與へ下さい!』'Acknowledge us, oh God, before the whole w orld. Give us also the right to our existence!' それは悼しい宿命を擔ふた幾百萬、幾千萬の人達の抗議と嘆願の叫びであつた。

これが『淋しさの泉』の梗概である。全編約五百頁の大冊を要約したものであるから、極めて荒筋であるのは已むを得ないが、讀者は此の小説が何を描いてゐるかを大體に於て了解された事と思ふ。

×　　×　　×　　×

偖て前にも述べた通り、英國の社會は、此の小説を悪み、法廷は之を禁止した（我々の手に入る書物は巴里か米國で出版されたものである）。何故だらう？　私にはそれが淫猥だと云ふ理由に基くものとはどうしても考へられない。凡そ心ある人にして、異常の戰慄なしには通讀できない此の書物には、終始一個所の卑猥な言句も見當らぬ。『淋しさの泉』は「女性の同性愛的傾向に對して、寛大な態度を要請する眞摯な・正しい主張である」と云ふクレーグ氏(Alec Craig : Sex and Revolution) の言葉は正しい。然し既成道德観が萬事を決定する英國社會は、之に「淫猥の書」の烙印を刻して、國外に放逐した。思へば此の作は英國の、否、世界の既成道德に對して書かるべき必然を擔つて書かれたのである。我々は「男裝の麗人」を如何に處置してゐるか。彼女等の言分を正しく聞き入れる雅量を將して示したらうか。彼女等の行くべき道は示されてゐるか。

神は世に數々の惡の存在する事を許し給ふた。だが、その惡が常に卑まれ、惡まれ、虐げられてゐる事をも許し給ふたらうか。

『淋しさの泉』はその酷烈な眞實相の描寫によつて、我々に多くのものを訓へる。生來異常な娘をもつゴードン夫妻の教育は、果して正當のものであつたらうか。彼等は娘の不幸なコムプレクスを助長こそすれ、取除いてやらうとはしなかつたではないか。これは將して、親の態度が子女に及ぼす深い深い影響を考へた上の教育法であつたらうか。言はゞスティーヴンは父親の我儘と母親の無理解の犧牲となつた女性である。

巨萬の富をもつてするも、終に救濟を購ひ得ないスティーヴンの魂を虐げ、苛んで彼女の宿命を嘲笑し、彼女の生きる道を阻んだ社會は、正當な批判を誇り得るであらうか。此等二つの問題は我々の反省を促す主張として絶大な迫眞力をもつて提出されてゐる。スティーヴンは自己の異常性を覺つて、常に惱み苦しんでゐた。然も周圍の社會は決

して彼女を容れなかつたのである。

斯く敍べ來る時、或は問ふ者もあらう。「男裝の麗人は特殊な場合である。同性の愛は病的偏向であつて、醫學の問題ではないか。」と。果して然りであらうか？　ハヴロック・エリスも說いた如く「變態性とは萬人が具へてゐる傾向の一つが、特異な發達を遂げ、終に正常性に取つて代つた場合を云ふ」(Ellis: Psychology of Sex) のである。して見れば、同性の愛も人間の本性に根差す偏向であらう。その發達が正常に遂げられるか、或は異常の域に到達するかは、正常に發達すれば拳鬪に打ち興ずる程度に止まる人間の鬪爭本能が、異常に發達したものが殘忍性である。教育と社會の態度とに由らないと誰が言ひ得ようか。作中のスティーヴンは理性と教養とを具へた女性であつた。彼女は自己の偏向を自覺してゐた。斯る偏向の恐しさを覺らなかつたのは、外ならぬ彼女の兩親であり、彼女の友とする人々であつたのだ。

今や、我々は此の問題を新しい視角から見直すべき立場に立つてゐる。淺薄な獵奇心を棄て、「醫者や心理學者の問題だから」とばかりに考慮を避けようとする日和見的態度を清算して、親として、教育者として、また社會の幸福と向上とに關心を持つ指導者として、公正な批判と、對策とを考究する基ともなる正當な認識を獲得すべき立場に立つてゐる。

ホール女史は此の作の卷頭に、沙翁の言葉を引用した、「聊かも庇ふことなく、又聊かも誣る事なく、只有のまゝにお傳へ下され。」(Othello, V: ii) と。然もそれに續く簡單な但書に於て、彼女は作中の人物が悉く空想の所產である事を言明してゐる。これほど眞劍な作者に斯樣な言をなさしめた現代社會の重壓の下にこそ『淋しさの泉』が產まれ出づべき必然の契機が在つたのである。

『淋しさの泉』は「只有のまゝを」傳へた。藝術の仕事は終つた。スティーヴンは其後に來るものを待つてゐる。

× × × ×

――筆者は『淋しさの泉』を一讀して以來、作者ホール女史に少からぬ關心を持ちつゞけてゐるものである。機を

得て其の傳を調べて見たいとも思つてゐるが、未だ適當な材料を持たないので玆に彼女を語る事は遺憾ながら不可能である、たゞ、手許にある彼女の小影を見ると、作中のスティーヴンが、彼女自身の體驗から描かれてゐるのではないかと思はれる節もある。然し彼女自身は極めて女性らしい印象を與へる人物だと云ふ事である。『淋しさの泉』以後にも數冊の優秀な作があり、今日尙盛んに制作してゐるらしい。【『點されぬ燈』(The Unlit Lamp) と云ふ作品にも女性の同性愛が取扱はれてゐる。】讀者と共に女史の健闘を祈つておきたいと思ふ。

× × × ×

私は此の稿を主として教育者の立場から書いた。從つてそのうちに論ぜられた諸々の問題を、夫々の心理的機構に立戻つて原因的に考究するよりも、寧ろ將來を慮つて、斯かる問題に對する一般の反省を慫慂する事に專ら力を注いだ。併しながら、分析心理學者の觀點をもつてすれば、『淋しさの泉』は實に多種多様な問題の寳庫とも云ふ事が出來よう。五月の研究會の席上で諸先輩の討論を拜聽してゐるうちに、嘗て讀んだ當時の印象をこゝかしこ想起して、其時迄漠然と考へてゐた節々が明瞭に分析し去られて行く如く感じた。作中のスティーヴンが『眞劍に祈つたら男になれるか』と父に聞くあたりや、進んで西部戰線に赴くところなどはたしかに Penisneid のあらはれであらうし、父親ゴードン卿に對するエディポス・コムプレクスも隨處に見受けられる。女性の劣等感と云ふ事もスティーヴンの從軍などに端的に表現されてゐる。また作の大半を通じてスティーヴンの愛の對象となる愛馬の如きも何かの代償的轉嫁對象ではないであらうか。

私は機を得て此等の示唆に富む諸點を詳にしたいと思つてゐるが、これは自分の分析學的素養が現在の數倍、否數十倍深まつて行つた後の話である。玆には唯評判の高い此の書物の内容を紹介して、同性愛問題の藝術化に關心を持たれる諸氏の今後の御研究に對するさゝやかな契機ともしたいと思ふばかりである。(完)

(一九三五―五―二五)

同性愛抉剔録

——附、現代同性愛の社會分析——

高橋鐵

『ヰタ・セクスアリス』

これは僕の推賞措くあたはざる森鷗外先生の小説である。（明治四十二年六七月號の「スバル」に掲載されて發禁を喰つたり批難の雨を浴びたりした問題の作品である。）そしてこれ程ハッキリと人間の性的開花を回顧した文學は少いと思はれる。流石醫學者で進歩的な思想を抱いた文藝家だけに性的心理の洞窟をまざまざと覗かせてくれる。だから殆んど一行一句が精神分析學徒にとつて有難い。

六つの時、近所の小母さんに春本を見せられて、男性器の表現に驚き「足ぢやらうがの」と云ふと傍にゐた「をばさんも娘も一しよに大聲で笑つた。」……しかも「何故か知らないが此出來事をお母様に問ふことを憚つた。」

それから始つて段々性器と性行爲について疑問が湧いてくるのを年齢順に書き綴つてゐる。讀まない人は讀む必要がある。

その中に、寄宿舍で猛烈な男色家につけねらはれるところが描かれてゐる。

「君一寸だから此中へ這入つて一しよに寢給へ」等とやられる。それらの渦の中でかう云ふ會話が交された。
「どうだい逸見なんざあ雪隱へはひつて下の方を覗いたら僕なんぞが裾の間から緋縮緬のちらつくのを見たときのやうな心持がするだらうな。」
「そりやあお情所（なさけどころ）から出たものぢやと思うて見ることもあるたい。」
かうなると同性愛は解剖學的違反だとばかりも云はれなくなる。つまり性殖行爲に屬さない性行爲は總て「變態」だと云はなくてはならない。
そして、ふと筆者は自分のギタ・セクスアリスを思ひ浮べる。「解剖學的違反」に抵抗する無意識の「倫理」を自己分析してみたくなる。
中學の一年生になつた時、三つも年上の同級生がゐて每時間の樣に態々隣の席へ進出して來た。隣の席の者をおどかして席を交換しては迫つて來た。筆者はそれが本能的に怖くて、いつも机の下から迫つてくる大きな手をはねのけてやつた。そしてまるで雌犬の樣に遠く椅子の端へ離れて縮こまつた。
すると今度は休み時間に角力をとらうと云ひ出して、相撲部の選手でありながら、ウンウンもみあつた末、態と皆の前で私に負けてくれるのだつた。他の級友が私を負かすと彼はいきなり立つてその相手をいやといふ程投げつけて仇を討つてくれる。しまひには私をねらうもう一人の上級生を血だらけになつてやつつけて了つた事がある。その時私は彼の鼻血を見ながら汚らはしい樣な賴もしい樣な妙な氣持で鼻紙をやつた。そして其の後で自分がスッカリ女になつたやうな嫌な氣がして情無かつた。――その氣持が何時迄も續いて私は半年ばかりも鬪ひつゞけた擧句、遂々自分の本能的な「男の貞操」をまもつたのである。
今考へれば私は結局パッシヴに出るやうに扱はれるのが（意識的に）口惜しかつたのと、意識的な汚染忌避を同性愛に對して感じてゐたのであるらしいが、兎に角、私は同性愛といふものに當時全然興味をもたなかつた。（現在までも殆んど變りない。）

これは私が所謂「獨り息子」だつたので幼少の頃から母錯綜をそれ程禁斷されなかつたこと、及び概して男性禁斷的教育を受けなかつたせゐであらう。それだけに母と同一化することも甚だしかつたらしく、(ホモ的少年群につけねらはれた事を考へれば)女性的にみえたかと思はれる。そればかりでなく、これでも當時は「紅顔可憐」だつた樣である。

かういふ、私のギタ・セクスアリスに於て一度だけ、同性愛に興味を寄せたことがあつた。それは十八の時だつと思ふ。夜十一時頃の電車の內で三十四五の美髭の紳士に露骨な誘惑を受けた時で、詳しくは發表出來ないが、私の前へすり寄つて來て、「怪しき擧動」をし乍し、「君、僕の家へ一緒に來ない?」

等と囁き續けた。その男は立派な裝をしてゐたが、妙にその態度といひ聲といひ女性的な優しさを持つてゐた。私は、居並ぶ乘客達に羞しくて逃げ步くと彼はしつこく追駈けてくる。私はひそかに興味を感じて一緒に行つてみやうと決心して少し彼の自由にさせとくと、彼はつけ上つて、私がカーツとのぼせる位ゐ大膽な事をし初めた。それで私は急に自分に羞しくなつていきなり出入口へ駈け出して飛び降りして了つた。(思ふに、人目の關が無かつたら、ついて行つたであらう。勿論、私の氣持は、この變な體驗を究めてやれと云ふ冷靜さが六分ぐらゐだつたが。)

この經驗で、よくきくかういふ場合の女性の狼狽がハッキリ分つたのが唯一の恩惠だつたに違ひない。

×

「ギタ・セクスアリス」を紹介してこゝ迄浮かぶがまゝに書きつらねた筆者の頭は、次のことを求めること劇しくなつた。

本研究所關係者諸賢——殊に客員の金子、內田、丸井、久保、古澤、式場、諸岡、杉田等の諸先生、心理學、生理學の造詣深き方々の敢然たる「ギタ・セクスアリス」御起稿が精神文化をどれ程高揚せしめる事であらうか。

女形漫考

同性愛研究の世界的權威マグヌス・ヒルシュフエルド博士のコレクション中には日本の女形が皆第一級のホモとして陳列されてあると云ふ。

なる程、江戸期には戰國時代の後を受けて若衆歌舞伎と男色は切つても切れない關係になり、又その後期には女形は確かに第一級の蔭間的生活をした事は否めない事實である。が、時には若衆方、二枚目のみがその對象であつた事もすくなくない。例令、「若殿になつたを和尙貰ふ氣なり」とか「女房のうなされてゐる女形」（女形役者が餘り美しいので女房たるもの心配で堪らないといふ次第）のやうに女形が女性にもてはやされ男形が男に愛される場合もある。

併し大概の場合には女形は同性たる男に魅力を感じさせ、又その樣に努めてゐたらしい。

「睾丸(きんたま)のあるのが路考不足なり」、「をかしさは（女性達が）女形には惚れぬなり」で、女形達も殆んど女性として暮してゐたのである。

「疝氣をも癪にしておく女形」、「汐干狩さすが見てゐる女形」、「女形夫婦別なき帶をしめ」、「離魂病ほどに添寢の女形」――

尾上菊花(きくじらう)は家にゐる時は針仕事をしてゐたさうだし、初代芳澤あやめはとろゝ汁を出された時頰を赤めて箸を取り兼ねたさうである。又、有名な瀨川路考(きくのじよう)は、死ぬ時髮を結ひ直してお化粧し振袖に着かへ紫帽子を掛けて、眠るやうに逝つたのだといふ。

だから女形の心得として「凡そ女形たるものは女中衆に惚れられるやうではいけず、兎角女には同性と思はるゝやうにするのが上手なり、あのやうな女があらばと男の人に思はるやうに心得おくべし、云々」（文化十五年板芝翫「歌舞伎雜誌」）等と云はれて、專ら、女形の兩性的性狀が强調されたらしい。

その一つの證據には、女形の象徵として「紫の鷄冠(とさか)」といふ言葉があるが、これは意識的には紫帽子（男色防止(ソドミー)の爲に前髮を剃り落し所謂野郞頭にさせられた時その剃り跡をかくすべく考案されたもの）を見立てたに過ぎないが、その成語の心理過程をたぐつてみると仲々面白い。そこに鷄姦の暗示あることは勿論、なほまた鷄冠といふのはしば

〱女性のクリトリスと同一語に使用されるアムビヴレンツ的形容詞で、それが赤でなく紫になつたものこそは確かに兩性具有的な女性の最もいゝシムボルに違ひないではないか。

この様な女形の風俗心理は現在までも傳承し來つて、例へば、尾上多賀之亟は洋裁の名人で子供の服などは皆自分で製つたのださうであるし、曾我廼家桃蝶、若宮里路等を初め多くの女形はてよだわ言葉を常用し、ボーイッシュブと男の長髪の中間の頭髪で妙に派手な装でしやなしやな歩いてゐる。又、大正年代の名女形尾上菊次郎などは、亭主役の菊五郎が冷い手の女でないと情が出ないのを知つてゐて、寒中でも掌に氷を握りしめて好かれる様に心掛けたと云ふ。

同性愛好者（ソドマイト）列傳

その時その時の禁斷風習によつて異性愛と同性愛の主潮は一進一退するが、人間に兩性具有的性狀が（生物學的にも心理學的にも）ある以上、ソドマイトは一部に蟠居するのも止むを得ないであらう。殊に戰國時代だとかミリタリスチック帝國主義段階には必然的に男性性格が强調されるらしい。從つて女性たちにはクッキリと女性々格の鑄型が天降りしてくる。その一變形として、强烈な希臘文化の中心プラトンなんかは盛んに同性愛によつて人性を動物性的覊絆から解放しやうとし、我が國の群雄は（武田、上杉、大河內、織田氏等の傳說の如く）女性を遠ざける事によつて武道の礎を固めた。つまり、社會全體が兵營化し牢獄化すれば必ずや、なんらかの形式で（殊に便宜的な妥協形成で）同性愛を採用する様になる譯である。

併し、それと反對に一社會の崩壞期の様な頽廢的時代には、いはゞあらゆる原則に違反せんとする變態欲望の一顯現として、同性愛が盛んになるのではなからうか。その好適な例が江戶泰平逸民のかげま熱で、又現在の淺草**淚橋**、**芝烏森**、新宿**大久保**等々に散在する男娼窟である。併し、この様な異性愛をさほど禁斷されもせぬ人々の同性愛については筆者は詳記を避けたい。たゞ次の如く結語しておかう。社會は種屬保存の生物學的目的の無意識心理傾向の故

か、同性愛に對して眉をひそめる。それについては風俗詩「川柳」が一番ハッキリしてゐていゝ。曰く「よつぽどない、い、たわけ蔭間を連れて逃げ」、「生醉ひになつて蔭間を一度買ひ」——。

最後に、職業的ソドマイト、風習的ソドマイト以外に——性的擬似乃至眞正ブルジョアデー（山宣全集參照）の癖に同性愛に耽つた人として傳へられる「芳名簿」を御參考に供しやう。第一が前述した希臘文化の哲學的男色主義者ソクラテス、プラトー、アリストテレスの一系列。日本に於ては、當時唐より新歸朝した弘法大師がこの開祖と傳へられてゐる。

藝術家としてはミケルアンジェロ、シェイクスピア、ワイルド、ヴェルレーヌ、ラムボウなどが數へられ、又芭蕉さへ自ら「衆道好」と書いて後世の問題の種をまいた。

その他、足利義滿、德川家光などの如きお歴々がゐる。又、筆者の愛慕してやまざる風來山人平賀源內の男色讃美は世上屢々論じられるところであつて、彼の「江戸男色細兒」には左の如き一文を投じてゐる。

「餅好酒中の趣をしらず上戸は又羊羹の旨きを惜む……ヤイ餅好の衆生ともみだりに是を笑ふをなかれ、ナント一番誤てその粕を食ふに至らは漸にして酒中の趣をしらん」と書き、水虎散人（かつぱさんじん）と署名してゐる。

男色に關する言葉について

河童で思ひ出したが、誰であつたか河童の研究中に於て此の肛門性感的空想獸が、どうも男色の行はれる地方に多いから、これは或ひは男色の戒しめかも知れないと喝破してゐたが、これは確かに卓見だと思ふ。

さて、ソドミーを言ひ現す言葉にはカハツルミ、衆道、鶏姦、若衆道、シンマク、ケツマク等々の外、ご存じの如く菊座、稚兒、かげま、男娼などと稱す祕語があつて、この成語を研究するだけでも面白い。

又女性同性愛（サッフイヒス）には69（シクスティナイン）といふ性行爲體位から出來た言葉の外、オメ、デヤ、ヲデヤ、お熱、オハカライ、エス、お親友、シスター、トイチハイチ等が使はれてゐる。

同じく同性愛といつても、異性愛禁斷から發生する便宜的同性愛と、異性愛に元々興味がなかつたり又は飽滿した擧句の果うまれる不感症的同性愛とを區別しなければならない。トラピスト、寄宿舍、牢獄、江戸時分のお局生活などで行はれたサッフィズムは前者の例であり、賣笑婦や特殊の性的眞正ブルジョア（假令、詩人サッフォー、トリバス、ハインリッヒ八世妃、カザリナホワルド、カザリナ第二世、クリスチナ女帝、エリザベス女王、近くは增田某孃の如き）は後者に屬するのであらう。實際、後者の中異性愛に飽滿した末のものは豫想外多いらしく種々な統計等である。モールによると巴里の娼婦中二割五分、巴里花柳病院内の女患者中七割五分、ウルリッヒによると女子二百名中の一名、クラフトエビングによると六萬人の人口中八十八名のサッフィズム耽樂者を算へてゐる。大阪難波病院（娼妓病院）等には「僅か三巾の蒲團の中でトイチハイチの種を播く」といふ哀歌（？）があるさうだが、これらの中には、同衾者がないと眠れぬやうな心理も多いと云ふし、變つた性感を求めやうとの欲望も多いであらうけれども、その他に、筆者は必ずや賣買取引されぬ純粹の性生活を獲得しやうと望む無意識欲求があると考へる。

そしてこれは女性の自己戀愛(ナルチスムス)から起る當然の欲求を含んでゐる。（岩倉具榮氏「對象愛の種々相」――本誌第二卷七號參照。）このナルチスムスの對象纒綿は異性愛禁斷コムプレックスとして性的開花期には漠然たるリビドーの低徊を、よんどころなく同性にそゝぎ、幾多の少女小說（『制服の處女』を以て代表せられる曾ての令女界趣味）的ロマンスをつくり又少女歌劇乃至ナントカレビューに躍るナルチスムスの代償英雄を耽美させる。それ故にこのレヴェ愛好熱なんかは嚴密に云へば同性愛といふよりは單なるナルチスムスの社會的歪曲として解釋した方がハツキリしてゐるであらう。

ここに、サッフィズムとターキィズム（妙な新語かも知れないが水の江瀧子で代表される少女のレビュ熱は、筆者には同性愛とは見做し難い。たゞ無智濛昧な女性達の露出症的解放欲求と、奇蹟としての官能的英雄迎向主義に過

ぎない。そこで、此の資本主義第三期の變態現象をかう名付けてみた）の差違が生じる。尤も、ターキィストの中にも完全同性者がゐる事は頷けるが、それは甚だ僅少な例外で、大部分の少女は小學生がスタムプ蒐集に熱狂するやうなくだらない模倣的社會心理から、彼女等の虛榮とナルチスムスを滿足させてゐるに過ぎなからう。そして、それを煽るものこそは卽ち社會分析の對象である現社會機構である。誠に「吾々の現代社會は男性に於けるより以上に女性に於て一層大量のナルチスムスがあると考へてをるばかりでなく、あることを奬勵してゐる」（フリウゲルに依る岩倉具榮氏の「自己戀愛と超自我」――本誌第二卷六號）！

これが彼女等の陷るワナである。自由を獲得したといふ幻想によつて、實は彼女等は益々資本主義的男性支配の社會に隷屬し白奴隷化し、大資本の下に裸身を投げ込まれる。あゝ實に明朗なる安全瓣――「ターキィズム」！

×

レビユ孃と性的眞正ブルジョアヂー（山宣全集『現代の兩性問題』參照）との同性愛が、此の同性愛研究のシムポジウムの自由になつたかの如くなので、此の最後の一章に於て、敢て現代同性愛の催眠術的被害を分析しておく事にする。――一九三五・六・六・生計無閑の中に。

自殺情死に於ける死の詩化心理に就いて（2）

長崎文治

（三）死の決行時に於ける詩化心理

（1）最後を飾らうとする要求

心の上にも、形の上にも死に對する準備が出來れば、愈々自殺の決行に移るのであるが、こゝでは死を詩化しやうとする働らきは極めて顯著にあらわれて來る。この働らきは、最後を飾らうとする傾向であつて、死容とか死に場所とか死の方法に對する美化として働いてゐる。

　死容を美化しやうとする傾向は、死化粧とか、死出の晴れ着などを纏つて死の相貌を飾ると共に、更に自分の屍が醜い姿で曝される事の無い樣に心懸ける。特に女性は生前の習慣として特に愼重をきわめるもので、入水自殺に裾の亂れを防ぐ爲めに緊縛してゐる姿は屢々見られる。又、死化粧、死出の晴れ着等は多く禮裝であり、さうで無ければ最も個性向な裝束を用ひる。それは自殺者の好みや性格と總て一致し、彼にとつて一世一代の裝ほひであるが、決してけば〲しい、その個性を隱して了ふ樣な裝ほひは多くの人は行はないし、又反對に好んで襤褸を纏つて死ぬ者も正常な精神狀態には見當らない。死に臨んで、人間の審美的感情は最も公正に現はれて來るのが普通であつて、各人各樣の好みが、こゝでは正しく個性を生かすところの裝束にあらわれて來る。事實、生前虛飾に浮身をやつしてゐた婦人が、自殺の場合には意外な程あつさりとした姿で死んで行くといふ事を聞くが、これは當然有り得る事で、生前の生活が虛榮であつたと思へば、その償ひとして死を決意した者の平靜になつた心の中に浮び上つて來る本性的な要求が、眞實の自分の姿を呈露して吳れるのである。一般に、自殺情死の

心理を研究してゐる人達から「人の死なんとするやその聲良し」といふ言葉は、實際に於ては多くの誇張や虛飾が死者の中にも働いてゐるから、信ずる事は出來ないと云はれてゐるが、成る程、嚴密な意味では遺書などでは可成り事實が歪曲されてゐる場合も見える。併し常にさうだとは云へない。死化粧とか死出の晴れ着などには死の動機とか死の氣持を殊更らに說明する必要もなく、また自己の行爲を合理化しやうとする氣持も動いてゐないだけに、素直にその個性を表はしてゐる。生前最も愛好してゐた衣服調度を附けて自殺したといふ者に就いてみても、それ等が大して高價でなく、華美でなくとも、自分に一番よく合ふ柄であつたり、又平常の化粧の極めて念入りであつたに似ず、極くあつさりと顏を刷いたゞけで死の化粧を終る者が多い樣であるが、それでゐて充分に麗はしく死の姿を飾つてゐるのが見られる。これは個性的であるといふ意味に於て彼女には最上の裝ひである。

次に、死場所に就いても、多くの自殺者が一致して名所舊蹟とか、小說や詩歌などに綴りこまれて人々の感傷をそゝる樣な場所、又は嘗て（殊に幼時に）自分が強く感情を動かして、深く印象に殘つてゐる場所、更に家の中で自殺をする場合には、その中の最も上等な部屋とか、自分に緣の一番深い所が選ばれる。そして又、最後の場所は、自分の手によつて淸掃され、香華などが供へられる場合も少くない。自殺者が如何に自己の審美的感情を滿足させる爲めに自殺場所の選定を入念に行ふかといふ事は、自殺者の最も多い場所に就いて觀れば分る。華嚴の瀧や、近江の琵琶湖や、須磨、明石の海岸などは、景勝と自殺によつて多くの魂が觸れ合つてゐる所である。自殺名所と云はれる所については、一々擧げるに煩はしい程であるが、幸に山名正太郎氏の『自殺情死風土記があるからそれに依つて參照され度い（山名氏著『日本自殺情死紀』）。

最後を飾らうとする心理は、以上の樣な死容とか死場所について表はれる許りでは無く、寧ろそれは次に爲さるべき死の決行を詩化——寧ろ劇化と云ひ得べき——しやうとする場合の準備である。恰も後者が一切の裝束を整へ、舞臺の裝置も全部整つて幕の開くのを待つ時の狀態である。幕が開けば、自殺劇のクライマックスは直ちに觀衆を恍惚境に惹入れて、それと共に忽ち大圓團の幕が閉ぢられて了ふ。この最後の一瞬の爲めに何れ程多くの努力を費してゐたか。死の瞬間、最後の場面程、人間をして嚴肅ならしめるものは無い。「從容として死に就く」といふことは、古往今來、總ての人類を通じて最も

潔よい、且つ憬れの的であつて、この從容たる態度をとらうとして辭世を誦み、警句を吐いて死を決行する者、莞爾として最後の場に臨む者等は、悉く武士道の精華とされてゐる。又、感傷に滿ちた若人達は詩をうたひ、音樂を奏でながら死んで行く、山名氏に依れば「身投げのある夜は波の靜かな、そして凪の日、而も滿月の時に多い。時化の時は決して身を投げないといふことは、寒くなつて身投げが無いといふ事と共に面白い現象である。身投げでもしやうといふ人は一目みて直ぐ分るから大抵とり逃すやうな事はない。しかし身投げと一口に云つても、死を戀うて死ぬる、所謂憧憬の死につく者程救助し難い者は無いさうだ。ある婦人は眞夜中に甲板で讃美歌を聲高らかに歌ひつゝ投身した。又或青年は滿月の夜に尺八を吹き鳴らし、終つて先づ尺八を海に投げ入れ、續いて投身した」といふ關釜連絡船の事務長の話を引用し、更に「現に昭和元年夏、戀の三角關係に惱んで情人と共に關釜連絡船で情死した朝鮮一のソプラノの名手尹心德(三十)も、わざ〳〵波の靜かな星月夜を選んで船に乘り、甲板を歩いて、前日に日東蓄音器に吹込んだ『死の讃美歌』を唄つて投身した」と書いてゐる(山名氏著、日本自殺情死紀、三一四頁)。兎に角、人間は一般に、死を憧憬すると否とに拘らず、皆最後を美化しやうとする心理を持つてゐる。若し我々が、死の姿の一つ一つに就いて充分、靜かに觀察出來る位置におかれたならば、何れ程多くの、劇的な死の場面を摑む事が出來るであらうか。劇や小說などに仕組まれる最後の美はしい情景は、死を美化しやうとする人間の必然的な要求から、或はそれに應ずるために作り出されてゐる事が分るのである。そしてこゝに吾々は轉移機制の最も重大な役割を見るのであつて、生から死へ移行する瞬間が極めて滑らかに、少しの障害もなく、死の決意によつて平靜にならせられた感情を亂すことなく死ぬ事の出來る爲めには、死の決行が充分に信用を藉すに足るだけの力强さを持つものでなければならない。死の不安を想起させないだけのものでなければならない。

(2) 死期の安全を希求する心理

最後を飾らうとの要求を完全に滿す爲めには、自殺者に精神上の裕りがなければならない。絕えず何物かに脅やかされてゐる樣な狀態では、美はしい最後は得られない。尠くとも、最後の自殺劇を演じやうとする時だけは、何物にも煩らはされずに、純一に死に向く氣持となり度いのである。このために消極的には死期に於ける本人の心理の平安を希求するやうになり、積極的には死期に於ける本人の社會的關係の安全を保證されむことを求

めるやうになる。

死期の安泰なる心境とは、何等の障害もなく、自己の下す死の方法以外に生命を脅やかすところの惧れなく、尙ほ且自己の定めた筋書通りに滯りなく死を決行したいといふ希望である。時化の時の入水自殺者や、風雨雷霆の激しい日の自殺は少く、快晴の日に多いのも不安を避けやうとの要求に基いてゐる。どうせ死ぬのだから何處でもよい筈である。却つて時化の時とか、暴風雨の日の自殺の方が條件に惠まれてゐるのではないか。或は又、猛獸毒蛇の住む山林を選べば、若し自殺が不成功に終つたとしてもそれ等の生物が殺して吳れるから完全に死ねるではないかと考へられる。ところが多くの自殺者が、天候のために順延したり、危險な場所を避けて却つて靜かな處を好んだり、また或自殺決意者の如き自殺行の途中、白刄を持つた物盜りに逢つて腰を拔かせて、「命ばかりはお助け」を乞ふたりしたといふ如き滑稽な話のあるのも、皮肉である。情死行の途中犬に吠えられ、猛獸に追ひかけられて逃げたりする者もある。覺悟を定めて居りさへすれば何んなものに逢つても恐れない筈であるのに、自己の選んだ方法以外で命を失うことを避けるといふのも、これが自殺情死（狹い意味の）の特徵である。武士が死を覺悟した場合―― 戰死、切腹、殉死などの場合――は、それが社會的に肯定されるものであるから、その點に於いては不安の萠す所以もないが、自殺情死は社會的に否定されてをり、所謂風の音にも身を狹ばめる樣な不安定な境遇に置かれてあるのだから、その點では不自然さがある。始め定めた筋書通りに、死の決行が爲されなければいけない。それでなければ腰折れになつて了ふといふのは、彼の一途の死の氣持が一つの方法に固執してゐるのであるから、他の方法が現前して來ても、それを考慮に容れる餘地がない。始めの方法で行はれなければ、一時中止して出直さなければならない。突蹉に方法を轉換するといふ事は、到底出來ないし、又一度失敗した行爲を重ねて行ふといふ事は、普通の人には容易でない。自殺未遂者が同じ方法を繰返すことは、絕對になくはないが、少くとも多くはない。これは一度亂された死の決意とか方法には多くの不安な印象を殘すものであるからであらう。であるから、この樣な不安を來さない場所で決行されなければならない。――勿論、自殺者は悉邪突き入つた先の事迄考へてはゐない。唯、無意識的にである。

とに角、死に際して安全を希求する心理は、心を亂すものが無くて充分滿足に、自己の定めた筋書通りに自殺劇を遂行しやうとの心理に外ならない。心の亂れはあの

世への障りとなるといふ佛教信者の言葉は、充分にこゝの心理を盡してゐると云へやう。

（3）　死期に於ける社會性

最後を飾らうとする心理の他の方面として、死の間際に強く發露する社會性に就いても考究しなければならない。

一體、人間が社會を否定して自殺を決行するに當つて、最後迄社會的關心を把持してゐるといふことは如何にも矛盾の様に聞えるが、實際に於て人間が社會的關心を有するからこそ、そこに色々の不平不滿が生じ、色々な方法でこれを補はうとして失敗した結果、死を選ぶのであるから、自殺も人間の社會的關心に由つてゐると云ふ事が出來る。

人間は誰でも唯一人で死んで行くのは淋しい事である。この心理は個々の人が死を考へ始めた時からその人に働いて來たものであつて、昔時の殉死や殉葬の形式は人間性の必然から生れて來たのである。誰でも人間は出來る事なら成可く多くの道連れが欲しいのだ。往々情死と云はれるものゝ中にも眞正な情死ではなく、戀愛してゐない男女が、單に偶然的に死を共にするのがある。それが同情の末に死を共にしたと云ふならまだしも、死なうと思つてゐた所へ、同じ道を辿る赤の他人が偶然來合せて死を共にしたといふ様な場合は、嚴密な意味で情死といふ事は出來ない。情死には必ず、死の決意以前に戀愛（廣い意味に於ては同情）關係があり、これに色々の社會的の要素が條件として働いてゐることが必要であつて、結局これは自分達の感情をお互に生かす爲めである。ところが、死の決意の後に同じ道をとる者を求めて、これと死を共にするといふ事は、相互に自分だけの感情のために相手を利用してゐるのであつて、情死と云ふ事は出來ない。寧ろ、道連れとして、獨り旅の淋しさ、頼りなさを慰さめやう爲めの社會性に萠してゐるとみるべきである。最近有名になつた三原山へ死にゝ行く自殺者の中にも、船の中、旅館、又は途中等で道連れになつて死を共にする者や、又飛込み自殺者が、一人誰かゞ皮切りをする事によつてそれの追隨者が、恰も春の夜の夢を亂された蛙が先を競つて水の中へ飛びこむと同様に多いといふことも、これは單なる模倣とか暗示といふ常識的な言葉で片附け去らるべきものではない、そのもつと深い所に働いてゐる人間らしい感情、卽ち、死なうといふ氣持の働いてゐる者が、未だ道連れを見出す事が出來ないで躊躇してゐるところへ、勇敢な一人がトップを切つたので我が意を得たりとこれに續くといふ心理として解釋しなければならない。勿論、これは群集心理的傾向と

して暗示とか模倣といふ言葉を以て從來說明されるものゝ內に包括され得る一面を有してゐることは確かではあるが、併しそれのみではこの場合を盡すことは出來ない。この心理は芥川龍之介の遺書の中にもはつきりと書かれてある。「スプリング・ボードの役に立つものは何と云つても女人でなければならない」と。そしてこれは、その續きをを見ることによつて更にはつきりするであらう。「……クライストは彼の自殺する前に度々彼の友達に男の道連れとなる事を勸誘した、又ラシーヌもモリエールやボアローと一緒にセイヌ河に投身しやうとして居る。然し僕は不幸にもかういふ友達を持つてゐない。たゞ僕の知つた女人は僕と一緒に死なうとしたが、それは僕等の爲めには出來ない相談になつて終つた……」。彼は遂にスプリング・ボード無しに死を決行したけれ共、彼の自殺方法が最後の意識を昏迷の狀態に導くところの睡眠劑を服用した事と、彼自身が强度の神經衰弱症に惱まされてゐたことと、彼が數年も前から死に誘惑されてゐ、最後の覺悟を以て感想集や創作に精進して、充分に心の用意を爲してゐた事等によつて、彼の心理が尋常でなかつた事が想定されるのである。

次に、社會性のもう一つの現はれは、死の場面を賑やかにしたいといふ要求であつて、寧ろ「靜かにして淋しくない場面」といふ言葉を以てするのが、適切だと思はれる、總ての自殺者が求める死の場面は靜かな安全な所で、そこに自分に同情を寄せてゐる多くの人々が霞を隔てゝ見護つてくれてゐるといふ樣な狀態が好ましいといふ、ほのかな感情である。或る自殺未遂者は、この感情を次の樣な言葉で私に語つた。「自分が自殺を決行しやうとした時、唯一人といふ感じは少しもなく、自分の周圍に姿の無い自分の兩親や近親者や友達の影が、靜かに自分を見守つてゐて吳れ、自分を取かこむ木や草や山や野や、自分の今身を投げやうとする湖迄が、如何にも生きて自分の壯途を見送つて吳れてゐる樣に思へた」と。この心理に何れだけ普遍性があるかは未だ明かでないが少くとも人間がその最後の瞬間に一人ぼつちで逝くと考へることは堪えられないことであるやうだ。この境地は普通の人が臨終の時に自分を取圍む人々を眺めて安心して死んで行きたいといふ心持にあらわれてゐると思ふ。卽ち、看とられて死ぬといふことは決して最後の袂別をするといふだけの意味ではない樣だ。これは生殘つてゐる人の立場の說明であつて、死んで行く人に於いては見守られてゐるといふ氣持が主になつてゐる。臨終の枕邊は必ず靜肅である。併し寂寥を感ずる靜かさではない。近親緣者の呼吸の響きが立こめる靜かさである。見守る

人々の手を握り名を呼び乍ら、皆附添つてゐて哭れるのに満足して死んで行く死者の心理には、それだけに多くの社會性がひそんでゐる。

臨終の場合には死は必至の過程であるから何如にしても止める事は出來ない。總ての人は甘んじてこれを受け、成可く最後を亂すまいとして心を配つてくれる。ところが自殺は壽命では無く、自發的の死であり、非社會的の行動であるから、周圍の者に阻止される惧がある。そこで人氣の無い場所を選ぶ。併しほんとうの感情では矢張り近親縁者の看守る中で、臨終の時の様に同情と惜別とを受けて死んで行き度い。だからこそ多くの自殺者は死んだ親とか同朋及び戀人や師友などが待つてゐて哭れるとか、自然に抱かれて（自然の人格化）死んで行くとか、又は最も近しい人の寫眞や形身、又は人形や花束などを、恰かも嘗て行はれ殉死殉葬の意味に於て、固く抱いて死んで行く。事實、三原山投身自殺者が、持つて來た花束や、所持品や石などを投げ入れてから飛びこむといふ事は屢々聞くことであり、又廣漠たる野や洋々たる海での自殺者は案外少なく、自殺の場所は多く自分を蔽ひ圍つて哭れる様になつてゐる岩陰や山懐、森林の中や又は樹木の下とか入江などである。關釜連絡船によつて海に飛び込む者は、海洋の眞中へ出て飛び込む者が無く、必ず到着地に近づいてから飛び込むといふ例を中村古峡氏は躊躇逡巡の爲めに入港間際になつて飛込むのだと云つて居られるが（中村古峡著、自殺及情死の研究、一四九頁）、その躊躇逡巡は洋々として際限のない大海の眞中で死ぬといふ氣には何うしてもなれないといふ處にあると觀なければならない。或は航行者の話では、「海洋の眞只中へ出て、青疊を敷いた様な海を眺めてゐると、この中へ飛び下りてみたい様な衝動に驅られるが、併しふと眼を外らして四圍を見ると、涯しない海が取りつく術もなく廣がつてゐるので、飛び込まうといふ最初の氣持は忽ち吹飛んで了ふ」といふことであるが、成る程、この心理から思ひ合せれば、死なうとする者も一の據り所を求めてゐるのであるから、何處も掴まへどころの無い大洋の眞中では決行出來かねるであらうと思ふ。この何かに縋つて、又は圍まれて死に度いといふ要求が或る意味で社會性の閃めきである。

名所舊蹟とか、人口に膾炙してゐる所の自殺場所も、そこが最もよく人格化され、所謂娑婆の風が絶えず吹いてゐる所であるから憬がれの場所となるのである。この社會性が露骨に出ると、群集の前で自殺する様にさへなる。高田義一郎博士の蒐めた實例の中に、帝劇の開演中三階席から階下の一等席へ飛下り自殺を圖つた青年、デ

パートの屋上から人通の多い正面玄關の方へ向つて飛び下り無殘な屍を曝した者等がある(高田義一郎著、自殺學、九五—六〇頁)。又、昭和三年十二月卅日附の東京新聞は白晝上野公園下の共同便所わきの電柱に上つて行つて、通行人の見てゐる中で悠々と縊死した勞働者風の若い男があつた事を報じてゐるし、更に三原山自殺は此頃多く報道せられるが、それ等の者の中見物人を押し分けて飛込む者が多いと云はれてゐる。

昭和八年の春、一女學生が友達を死の保證人として、三原山に投身するのを見屆けさせたことから、「死の立會人」といふ言葉が有名になつて來たが、これも最も親愛なる人に見守られ乍ら死ぬといふ心境と同じである。假令、それが單なる死の決行の傍觀者といふ意味に於て爲されたしても——本人の心理は窺ふべくもないが——、自分がこゝで死んだといふ事を確認してもらひ度いといふ事は、自分の死の事實を兩親又は友達に傳達して欲しいといふ社會性に基づいてゐることを見逃してはならない。この死の立會人は必づ自分の親熟した者でなければならないし、又自分の期待を裏切らない、信頼するに足る人物でなければならない。出來るならば自分より色々の點に於て勝れて居り、充分に同情の涙をそゝいで吳れる人であることを要求する。我國で行はれた武士の切腹の場合の檢死者、又は介惜人が、單に一介の名の無い役人でなく、最も親熟し、素性が正しく、身分の高い者が任命せられ、その人が充分なる同情を以て武士の最後を見屆けるといふ事を武士の道とし最後の餞としたといふ事は自然の情誼であらう。又、切腹する方も、高名な人の檢死を希ひ、介惜人の身分名前を聞いて滿足の笑みを浮べて腹かき切るといふ事は正しく死の立會人の社會性を證明するものである。

又次の例は自殺に表はれた同一の要求である。これは「侯爵の坊ちやんに見護られ死を願ふ」といふ見出しで、昭和十年三月五日の新聞に載せられたものゝ拔萃である。

四日夜九時頃、新宿驛構內で人形と花束を抱いた若い女が、モダン青年とひそ〳〵語りをしてゐる樣子に不審を抱いた淀橋署員が調べると、女は懷中に自殺するといふ遺書を持てゐる。早速保護して男と一緒に本署へ連れて行つて調べると、女は某カフェーの女給、男は某とて「父は侯爵だ」といふのを嚴密に取調べると、これは眞赤な僞りで、實は某驛の驛手であつた。男は恐れ入つて頭を搔くし、女は男を睨むし、結局一ケ月に亘る愛の夢が見事破れた女は「侯爵の若樣と思つたからこそ、この人に見護られて死んで行かうと思つたのに、驛手と分つた

ら今更命が惜くなりました」と正直に白狀し、忽ち男の前で「死の解消」を宣言したといふのである。

この女給の心理はよく分る。一介の平民であり、しがない女給商賣の身には「侯爵様」といふ身分は矢張り憧れと尊敬の的である。況してその侯爵様の親愛なる御聲がかゝり、特別な思召を受けるに至つては最早この儘死んでも光榮であり、無上の幸福であるといふのは當然の考へである。加之、自分の死を見護つて呉れるどいふに至つては、彼女たる者隨喜の涙を流したであらう。彼女はもつと早く、樂しい旅の間に死ねば永遠に幸福であつたらうに、不粹な手は餘す所なく僞侯爵の正體を曝露して了つた。彼女の幻滅の度は、光榮の度と反比例し、而も自分は女學校出のインテリであるのに彼は自分より學歷も劣つてゐる一介の驛手である。彼は總ての點に於て、彼女の「死の立會者」たるの資格を缺き、却つて信賴を裏切られた腹立たしさが殘る許りである。

最後に、自殺が晝間に多く行はれる事に就いて、デュルケイムは種々の統計的觀察を行つた結果、次の如き結論を與へてゐるが、これにも人間の社會性の片鱗が見られて面白いと思ふ。尤も彼は自殺を社會學的に取扱つてゐるのである。

「晝が最も自殺の多い時であるのは、晝が社會生活の最も激しい時だからであるといふ事と總てが一致して證明する。かくして我々は何故日が長くなるに連れて、自殺數が多くなるかといふ理由が解る。それは日が長くなるといふ事だけで、謂はゞ集合生活の時間が長くなるからである。集合生活の休止時間は、遲く始まり且早く終つてしまふ。集合生活の行はれる時間は一層長くなる。從つて集合生活の生ずる結果も必然的に多くなるし、又自殺は、その結果の一つであるから亦必然的に增加する」(自殺論、一一四頁)と豫言的な詞を以て結び、更に寒い時候より、暖かい期節に自殺が多いといふのは、暑さの爲めに有機體が混亂させられる爲めだといふ心理學者の一方的結論を排して、暖かくなるに連れて社會生活が激しくなるからであると云つてゐる。

(4) 死の苦痛を回避する心理

誰であつたか忘れたが、死の恐怖といふ事に就いて、「死そのものに恐れを抱くものでなく、死に附隨して來る苦しみを豫想して、人は死を恐れるのである」といふ樣な事を云つた人があるが、この言葉は可成り肯綮にあたつてゐると思ふ。總ての人間は苦しくない樣に、寧ろ快く樂に死にたいと希求してゐ「眠つた樣に死んでゐる」とか、「死顏がよい」とか、大往生であつたなどゝ云つて、とに角樂に死ねた人を讃美してゐるが、この讃美は

寧ろ自分自身の欲求に向けられたものである。これと同樣に總ての自殺者も常態の傾向として、樂に快く自殺を遂行する事が出來、而も簡單な方法で、しくじることも無く確實に死ぬ事の出來るのを最大の條件として、種々の方法を選擇する。自殺者が一般に氣候の良い時期を選び、春から夏、殊に晩春から夏季にかけて多いが、唯六月の梅雨の時期に少しく減少し暖かい時期は屋外で、冬の寒い時は多くは屋内で行はれるといふ統計を示し、入水自殺――この方法が自殺者の好んで採る方法で、自殺率の上位にある――が七・八月の暑い候に多いといふ實例などから、如何に自殺者が苦痛なく死なうと心懸けてゐるかゞ分る。デュルケイムはその科學的な自殺論の中で明らかに、人は生活の最も樂な時に好んで自殺する。實際もし一年を二期に分ち、暑い六ケ月を含む半期(三月から九月まで)と、寒い六ケ月を含む半期とにするならば、自殺の多いのは常に前の半期である。この法則を例外となす國は一つもないといつてゐる。(デュルケイム、自殺論、九六頁)これも、彼は唯社會性に歸してゐるが、私は單にそれ許りではなく、心理的傾向――季節の轉換期に於ける精神的混亂と更にそれ以上に自殺者の要求する快樂への傾向としての死の苦痛回避の心理――も見落す事は出來ないと思ふ。寧ろ、この心理的要求が、自殺者の社會的傾向と一致した時、完全な遂行が出來るものであると考へられる。

又、最近は、睡眠藥の發達普及と共に服毒に依るものが多くなり、昭和九年度警視廳管下に於ける自殺者、及自殺未遂者の統計によると、その方法として中毒死が最多數を占め、全體の六割がこれに依つてゐるといふが、とに角最近の傾向は最も簡單に實行出來、樂に眠り乍ら死ねて、而もそれが容易に手に入るものである點に於て、カルモチンとかアダリンの如き睡眠劑、及日常生活に普遍化してゐる瓦斯に依る自殺が増えて來たのは、人間の死の苦痛回避的傾向からは當然である 更に支那に於ては既に早くから中毒死による自殺が多く、自殺率の第一位を占めてゐるのは斯國が最も醫藥に長けて居、藥物が日常生活の中に深く浸潤してゐる爲めで、それだけ彼等は死と生との懸隔を過大視してゐず、命に對して極めて淡泊になり得るのである。これは彼等に死に對する恐怖が、苦悶の中から生ずる事が無く、樂に「死は歸なり」といふ樣に死ぬ事が出來る境遇に育てられた爲めであると考へられる。

併し、死の苦痛回避の傾向として服毒自殺を例證する事に對しては、或る反駁が豫想される。卽ち、警視廳管下の自殺統計は、昭和三年度あたりにも中毒死は一番多

かつたが、その用ひられる藥品が猫いらずであつたし、又それ以前大正年代には腐蝕毒としての硫酸や鹽鹽による服毒自殺が多かつた。そして、猫いらずとか、硫酸や鹽酸は甚だしい苦悶の後に絶命するものであつて、若し苦痛回避といふ事が自殺方法の一要素であるならば、これは何と解するか。否、寧ろ自殺方法は苦痛回避といふ事を主なる目的としないでは無いかといふ樣な疑問が提出される。成る程死ねさへすれば何んな方法でも良いといふのが自殺の本旨であるかも知れないが、併し又死の苦しみを出來るだけ少くし度いといふ氣持を持たない者が無いと云ひ切るためには、(第一)に該方法決行者の精神狀態(精神的に異常が有りはしなかつたか何うかといふ事)にどうか、(第二)にこの方法に依つて生ずる苦悶を豫想してゐたか何うかといふ事、卽ち藥品の作用に對する智識が缺除してゐる爲めに、服用後の苦悶に考へ及ばなかつたといふ事が無かつたかどうか、(第三)にこれが當時では最も新らしい方法である事が一般の模倣慾をそゝり、そのために苦痛への介意を忘れさせ、寧ろ新方法に對する魅惑といふ事がこれをカモフラーヂュするに役立つたことが無かつたか、(第四)に、方法が簡單であり、——從來の方法程豫前感情や、準備行動を行はずして、單に服むだけで目的が達せられるのであるから——この簡單であるといふ事は、多くの人達には安樂といふ事と觀念的に結合され易い樣に生活樣式が出來上つてゐる。卽ち一般の生活で、簡單平易といふ事と煩らはしさの無いといふことゝ、安樂であるといふ事は最も多く連絡させて考へる樣に慣らされて來てゐることは吾々の日常生活に就いてみれば分るであるから、簡單に行ふ事が出來るために、後の苦痛への配慮を忘れさせる役目を果すのでは無いだらうか。といふこれ等四つの點に就いて尙ほ嚴密な研究をなすべき餘地がある。

入水自殺者が水の中で踠がいてゐる場合に、これを助けやうとして行くと必ず此方の身體にしがみついて來るので、自由を奪はれるといふ事をよく聞くが、これも苦しみが夢中に死を振り離さうとする行動となつてあらはれて來るのである。又、苦痛を味はしめなかつた自殺方法が再三同一人によつて繰り返へされる事もあるが、苦痛を經驗した者はその自殺方法を二度行はぬが通例である。苦痛の印象は、人間の審美的感情を甚しく損ふから苦痛を避けやうとする傾向も、矢張り廣義では死の美化的要素の一つである。(未完)

ゲーテとフロイド（ヴィッテルス）（3）

武田忠哉

ゲーテの進化の理念は正當であり、それはすでに久しい以前にこの地球を征服するにいたつた。しかしながら彼が彼自身の根本思想に導かれて到達した個々の觀察は不完全な斷片を免がれることが出來なかつた。その後、單に哺乳動物の頭蓋の後頭骨だけが一つの椎骨の變形であり、これに反して他の頭蓋骨はかやうに判定され得ないことが證明されたのであつた。勿論、植物――そして、動物――の變態は現在においても妥當性を持つてゐる。しかしながら、いまやそれの根原形態は葉でなしに細胞において求められ、ゲーテは、彼の時代における顯微鏡的知識の缺陷のために遂にその過程を發見し得なかつたのである。さらに、果してゲーテが長時間にわたつて顯微鏡を覗くに堪へる人間であつたか否かは一つの疑問であらねばならない。眞に彼は直接的に彼自身の蔽はれない手によつて自然に近づくことを最も悦んだのであつた。かやうにして、ゲーテの色彩論は特に最も多くの誤謬を含み、彼はこの側面において少くも一時全く不正に陥らねばならなかつた。すなはち、彼はこの物理的物質（色彩）の中へ彼自身の發展の思想を導入し、それは彼の眼にあまりに冷却したものとして映じ、ゲーテの形づくる手から碎け落ちるにいたつた。しかしながら、彼は彼の最も內奧において體驗された彼自身の根本思想にあまりに深く沈潛してゐたために、彼の色彩論に對する反駁を忍び得なかつたのである。一般に藝術家は彼の作品に烈しく魅惑され、それに對する批評を、いはば愛するものへ向けられた一つの攻撃のやうに感じるのである。したがつて、彼等はただ苦痛を味ひながら自然科學の研究を續けることが可能であり、むしろ、恐らく彼等

は最初からそれを斷念しなければならないのである。しかしながら、一方、もし時々眞正の藝術家が科學に從事することがないならば、それは果していかなる方向へ進んでゆくであらうか。眞に、科學者と藝術家の間には神によつて一つの柵が設けられ、それは絕えずくり返して跳び越されねばならないのである。彼等は、いはば同じ領土に住み、相互に攻擊し、それにもかかはらず互ひに對手なしに存續することの出來ない二つの國民に彷彿としてゐるのである。

ゲーテの研究方法における本質的特性は、彼が感覺的觀照性を拋棄しなかつた點に見いだされるのである。人々が觀照の根柢から遊離し、現象を數學的・象徵的・理論的に說明することを努力し始めるとき、すでに彼自身が自然の內部に認めた調和と形而上的意味が忽ち阻害されるやうにゲーテに映じたのであつた。さらに、彼が一つの理念を感覺と聯關させ得ないとき、かやうな理念は彼にとつて充分な觀照性を持つことが出來なかつた。眞にわれわれがすでにシラーに對する彼の會話において見たやうに、ゲーテは彼自身の理念を直觀（觀照）と命名してゐるのである。したがつて、自然の生々した「鑄られた形式」を個々の死滅した部分へ分解する無味乾燥な實驗は、ゲーテの全く憎惡するものでなければならなかつた。彼は、狹い裂目とプリズムを通して光線を「苦しめた」ニュートンを侮蔑すると同時に、われわれが明るい日光を浴びつつ露天の下に試み得る實驗を推奬し、そこでは、孜々として努力する物理學者に對して、一人の詩人が反駁を加へてゐるのである。それにもかかはらず、近代化學にとつて實驗を缺除することは不可能であり、——それは近代心理學に關しても同樣である——、むしろ、そこでは部分へ、絕えず繰返して部分にまで分解されねばならないのである。しかしながら、ゲーテはかやうな方法を回避し、彼のメフィストーはつぎのやうに云ふのである、「ここでは汝らは自分の手の中に部分を持つてゐる。しかしながら、不幸にもただ精神的な絆が缺けてゐるのだ。」かうして、ゲーテは「白い日光は、最早それ以上分解され得ない虹の色彩から構成されてゐる」といふニュートンの主張に堪へることが出來なかつた。「白は正に白であり、私がそれを見て感じるのだ。それは一つの根原現象に他ならない。それは全く白とは別に見える虹の色彩はけつして白くなり得ないのである。」

しかしながら、ニュートンの、反駁され得ない實驗的證明によつて、ゲーテのこの頑强な主張はすでに彼自身の同時代の人々にもきわめて背理的に映じ、したがつて、われわれは一人の偉大な人間の明瞭な愚昧に對して一つ

の說明を求めねばならないのである。一般に、精神分析によれば、各人は可也の程度まで彼の意慾通りに怜悧あるひは愚昧に規定され、例へば、われわれの情緒の影響によつてしばしばわれわれの悟性は一つの曇りを帶びることになるのである。畢竟、自然はゲーテにとつて一つの藝術品、一人の調和的な愛人を意味し、われわらはそれ（自然）を愛撫の眼をもつて敍述することは許されるにしても、それを一つの時計の機構のやうに分解してはならない、といふのがゲーテの立場を形づくつてゐたのであつた。その限りにおいて、精神分析もやはり彼の批判によつて危險に陷るかもしれないことが理解されるのである。何故なら、精神分析は愛のエネルギーを個々の部分衝動――（それらの集合によつて標準的な愛の生活が作りいだされるところの）――に分解し、恐らくかやうな分解はニュートンのプリズムと同樣にゲーテによつて容認され得なかつたからである。しかしながら、精神分析は、常にすべての精神現象を隈なく照明する生命的な快不快原則に面接し、一見無意味なもの「エーロスあるひは自然」にかやうな意味を賦與することによつてあらゆる藝術家を感激させなければならないのである。

すでに久しい以前から自然研究者たちは、彼等が自然の固有の本質を論述し得ないことを肯定してゐるやうに、眞に、彼等の器械はその目的のために充分であり得ないのである。例へば、神と自然を同じ地位に置くことは自然研究者によつて行はれずにスピノーザに由來したのであつた。

「彼（スピノーザ）はすべての人間の中で最も近く眼のあたり神を視たのであつた。」（ルナン）

しかしながら、これに比して自然研究者は遙かに謙遜であり、單に知覺され得る形態にのみ卽しつつ、事物の本質に關して形而上的な問を發することを止めるのである。彼がかやうな謙遜に到達し得るに及んで彼は始めて彼自身の領域において偉大になつたのであつた。例へば十八世紀初頭におけるスィスの醫者アルブレヒト・フォン・ハラー――一人の注目すべき自然研究者かつ詩人――は彼自身の自然に對する謙虛な態度を一つの詩によつて表明し（一七三〇）、それはその後長く極めてしばしば引用されたのである。

すべて創られた精神は
自然の內部へ迫り入ることができない。
もし人がただ自然の外皮を示されるならば、
その幸福はいかに深いことであらうか！

ゲーテはこの詩の節によつて一つの憤怒の爆破、一つ

のオリンピックな守備にまで導かれ、彼自身の、自然と自然科學に對する全く別の立場を發表し、つぎの崇高な言葉――しかしながら、公正な實驗者の觀點から甚しい誤謬を含むところの――を示してゐるのである。

「すべて創られた精神は」――
「自然の內部へ迫り入ることができない。」
おお、汝、俗人（フィリスター）よ！――
私とわが同胞にかやうな言葉を
どうか思ひ起させないで呉れ！
われわれは到るところに
われわれ自身が內部に居るやうに考へてゐる。
「もし人がただ自然の外皮を示されるならば、
その幸福はいかに深いことであらうか！」
私は六十年間それが繰り返されるのを聞き、
ひそかにそれを呪つてゐるのだ。
何回も何回も私に云つて呉れ、
自然はすべてのものを豐富に、悅んで與へるといふこ
　とを
自然は核も外皮も持つてゐない。
それは同時にすべてのものであるのだ。
汝が核と外皮の何れであるか、
試みに汝自身を最も綿密に吟味するがよい！

ゲーテがこの詩を記したときすでに彼は七十歳を過ぎてゐた。かつて彼がイギリスの哲學者シャフツベリ伯の影響の下に『自然に關する無比に美しい斷片』を發表したとき彼は三十三歳であつた。――約一世紀後、青年フロイドは、彼自身の言葉によれば、この斷片によつて自然科學の研究へ導かれるに到つたのである――。かうしてゲーテは彼の生涯の後期においても彼自身の見解を變更しなかつた。一方、フロイドは、彼の自我の最も深き內奧を支持する熱狂を自然研究者の苦行として判定し、彼によれば、自然研究者は最も微小なものを凝視しながら殆んど上方を仰ぐ機會を持たないのである。

自然に關する斷片

「自然！　われわれは自然によつて圍まれ絡みつかれ、そこから歩み出ることもより深くその內部へ歩み入ることも出來ない。自然は招かれずに何らの警告なしにわれわれをそれ自身の舞踊の旋回の中へ受け入れ、われわれと共に進みつづけ、やがてわれわれは倦み疲れてその腕から滑り落ちるのである。

　自然は永遠に新しい形態を創造する。今ここにあるものは以前に存在したことがなく、かつて存在したものは再び到來することがない。すべては新しく、しかも常に

古きものなのである。

われわれは自然の中央に住み、しかも、それ（自然）に親しまれずにゐるのである。それは絶えずわれわれと共に語りながら、われわれに對してそれ自身の秘密を打明けようとしない。われわれは間斷なくそれに作用を及ぼし、それにもかかはらず、自然に對して何らの支配力を持たないのである。

自然は個性を唯一の目的としてゐるやうに思はれ、しかも、現實の個人に對して無關心である。それは常に建設し、常に破壞し、それ自身の作業場は近づくことが困難である。

自然はただ子供らの內部にのみ住んでゐる。そして、母は何處にゐるのであらうか。――自然は無比の藝術家であり、最も單純な材料から最も偉大な對照を編み出し、何らの努力を示すことなしに最も偉大な完成に到達し、常に何らかの柔軟なものに蔽はれながら最も精密な確實性を獲得するのである。自然の作物のあらゆるものは一つの固有の本質を持ち、それ（自然）の現象のあらゆるものは最も孤立した概念を含み、しかもすべては一つのものを構成してゐるのである。

自然は一つの劇を演出する。われわれはその演出者自身がこの劇を見るかどうかを知らない。それにもかかはらず、自然は片隅に立つわれわれのためにそれを演出するのである。

自然の內部には一つの永遠の生活・生成・運動が行はれしかも、それ自らは前進を示さない。それは永遠に變化し、そこにはいかなる瞬間にも靜止を認めることができない。自然は停止に對して理解を持たず、靜止に呪ひをかけてゐるのである。自然は鞏固であり、その步調は正確に、その例外は稀れであり、その法則は不變である。

自然は不斷に思惟し、絕えず熟慮しつづけてゆく。しかしながら、それは一つの人間としてではなくに、自然として行ふのである、それはすべてを包括する固有の意味を留保し、人もこの意味を看取することが出來ない。

すべての人間は自然の內部にあり、自然はすべての人間の中に橫つてゐる。それはすべての人間と共にレースを試み、われわれがそれに優勝するにしたがつて一層深く悅ぶのである。自然は多くの人間たちと共に隱れて競技し、彼等の氣づかない間にレースを閉ぢてしまふ。

最も不自然なものさへも自然である。到るところに自然を見ない人は何處でもそれを正しく見ないのである

自然はそれ自身を愛し、永遠に無數の眼と心をそれ自身に固着してゐる。自然はそれ自身を享受するためにそれ自身を說明したのであつた。そして、飽くことなしに

それ自身を告げ知らすために、自然は常に新しい享受者を生長させるのである。

自然は幻想を悦ぶ。もし人が彼自身の、そして他人の內部におけるこの幻想を破壞するならば、自然は最も峻嚴な獨裁君主として彼を所罰する。そして、もし人が信賴の念をもつてそれ自身に從ふならば、自然は彼を子供のやうにそれ自身の胸へ押しつけるのである。

自然の子供らは無數である。それは何人に對しても、いかなる場合にも物吝みをしない。しかしながら、自然は愛兒らを持ち、彼等に對して多くを浪費し、多くのものを犧牲に供する。自然は偉大なものへそれ自身の保護を結びつけてゐるのである。

自然はそれの創造物を無から迸り出させ、彼等に對して、彼等が何處から來たか、そして何處へ行くのかを語らない。彼等はただ走らねばならない。自然が軌道を知つてゐるのである。

自然の發條は少ない。しかしながら、それらはけつして磨滅することなしに、常に活動し常に多樣である。

自然の劇は常に新しい。何故なら、それは常に新しい觀客を作るからである。生命は自然の最も美しい發明であり、死は多くの生命を得るための自然の技巧である。

自然は人間を陰鬱の中へ包みながら、永遠に彼を光へ激勵しつづける。自然は彼を無氣力の重苦しい大地へ隷屬させ、絕えず再び彼を搖り起すのである。

自然は欲求を與へる。何故なら、それは運動を愛するからである。自然がすべてこれらの運動をきわめて容易に達成することは驚異であらねばならない。すべての欲求は慈善であり、速かに充足され再び速かに發生する。自然がより多く一つの欲求を與へれば、そこには一つの新しい悅びの泉が溢れ、しかしながら、それはやがて平衡に歸してしまふ。

自然は各瞬間に最長距離のラニングのためにウォーミング・アップを續け、各瞬間にゴールに達してゐるのである。自然は空虛それ自身である。しかしながら、それはわれわれに對しては空虛でない。眞に、自然はわれわれにとつて最も重要な地位を占めてゐるのである。

自然の意志によつてあらゆる子供はそれ（自然）に對して作爲を試み、あらゆる愚人はそれに就て判定し、多くの鈍い人間たちはそれを通り越しながら何物も見ることが出來ない。しかも、自然はすべての人間を悅び、すべての人間において利益を得るのである。

假令われわれが自然に抵抗するとしてもわれわれはそれの法則に從つてゐるのである。われわれが自然に背反しようとしてもわれわれは自然と協力してゐるに外なら

ないのである。
　自然はそれが與へるすべてのものを慈善に形づくる。何故なら、自然が始めてそれらを必要不可缺なものにするからである。自然はわれわれがそれ自身を望むやうに遲れ、われわれが飽かないやうに急ぐのである。
　自然は言葉も談話も持つてゐない。しかしながら、それは舌と心を創造し、それらによつて感じ、話すのである。
　自然の王冠は愛である。ただそれによつてのみわれわれは自然に近づくのである。自然はすべての存在の間に裂目を作り、すべてのものは縺れ合はうとする。それはすべてを集合させるためにあらゆるものを孤立させたのであつた。自然は愛の盃からの二三杯によつて、勞苦に充ちた一つの人生を賠償するのである。
　自然はすべてである。自然はそれ自身に對して報酬と所罰を與へ、自ら悅びかつ苦しむのである。自然は粗野でありながら柔和であり、愛らしいと共に恐しく、無力でありながら全能である。すべてのものは當に自然の内部に存在する。自然は過去と未來を知らむい。現在がそれの永遠である。自然は慈悲に富んでゐる。私は自然をそれの作物と共に賞讃する。自然は聰明であり靜寂である。單に自然が自發的に與へる説明をそれ（自然）から引き放し、同じやうな贈物をそれから奪取し得るにすぎない。自然は狡猾であるが、しかしながら、それは良い目的のためであり、われわれはその狡計に氣づかないのが最もよいのである。
　自然は全きものであるが、しかもそれは常に未完成である。それが今行ひつつあるやうに、それは常に行ひ得るのである。
　自然はあらゆる人間に對して一つの固有な形態において顯現する。それは多くの名と用語の中に隱れ、しかも常に同一のものとして持續するのである。
　自然は私を招き入れたが、またやがて私を導き出すであらう。私は自然に對してわが心を表明する。それは私を思ひ通りに處理することが出來る。自然はそれ自身の作物を憎惡しないであらう。私が自然について話したのではなかつた。いな、眞であり僞であるすべてのものが自然によつて話されたのであつた。すべてのものは自然の負債であり、すべてのものは自然の功績である。」

――ゲーテ――

夢の分析

長谷川誠也

夢の分析について、簡單にお話をいたします。昔から、聖人に夢なしと言ひ傳へてをりますが、果してさうでございませうか。『論語』に、孔子の言葉として「久しいかな、吾れ夢に周公を見ず」と言ふのが傳へてある所を見ますと、孔子も夢を見られたに相違ないと思ひます。思ふに、かやうな言ひ傳への意味は、聖人とも言はれる人は、俗な、卑しい夢、例へば、大金を拾つた、と言ふやうな夢を見ないといふことでございませう。ところで、聖人以外の人間になりますと、萬人が萬人まで、上品、下品、或ひは奇怪千萬の夢を見ます。世には全く夢を知らない、と言ふ人も無いではありませんが、さやうな人は、恐らく、夢を見るも、覺めると同時に、何時もこれを忘れてしまふのでせう。また、熟睡すれば、夢が無いと言ふ說もありますが、これも夢を忘れた人の言葉に基づいたものでございませう。若し眞に夢の無い人があるならば、その人は非常に幸福でございます。世の人が皆な多少に係らず、夢のために惱んでをりますのに、獨り泰平無事でゐらるるのですから、恰も夢の世といふ苦い經驗を知らない人と同樣、金では買へぬ福運に惠まれてゐるのが、この人でございませう。

申すまでもなく、夢は不思議な、奇怪なものでございます。夢を見る原因も、夢に現れる事柄の意味も、共に瞬昧不明でございますから、それらの解釋は實に雜然紛々、檢べて見れば、ますます分からなくなつて、遂には檢べてゐるのか、それとも夢を見てゐるのか、境界線が不明になつてしまふ位でございます。

かやうな雜然たる解釋を、大摑みに分類して見ますと、生理學的解釋と、神祕的なものとの二つがあります。生

理學的解釋は、主として夢の起こる原因を取扱ひ、神祕的なものは、夢の分析、卽ち夢に現れる事柄の意義の解說に重きを置きます。

佛敎の方に、名高い『大智度論』と言ふ本があります。これは今から約千七百年前に、龍樹菩薩といふ大宗敎家の書いたものでございます。この本の中に、かう言ふことが書いてあります。體の具合が調はないで、熱氣が多いと、夢に火や、黃色や、赤い色を見る。冷氣が多いと、水や、白色を見る。風の氣が多いと、飛ぶことや、黑色を見る。また、見聞したことを思ひ詰めてゐると、その事を夢に見る。最後に、天が未來の事を知らせるために夢を與へる、と言ふ說でございます。これが生理學的と神祕的との解釋を綜合したものゝ古い例の一つでございませう。

ところで、只今は、夢の分析が問題でありますから、生理學的解釋のことは省略することに致しまして、只これだけの事を申述べて置きます。今日の生理學的解釋は、綿密な實驗に基づいたもので、古への說明とは、比較にならぬほど進步してをります。その解釋中で、吾々が特に注意しなければならぬ事がございます。それは自分の氣付いてゐない病氣、殊に內臟器官の故障が夢に現れることでございます。勿論、病氣は明白な形と成つて現れるのではなく、全く異なつた姿と成つて現れるのが例であります。支那の古い夢判斷の本に、腹の中に短い蟲が多い時には、多數の人々が集まる夢を見るものだ、と書いてありますが、實際、腸內に寄生蟲がわいた場合には、無數の鼠や、蟻が自體に取付く、と言ふやうな夢を見ることがあります。また、昔から傳はつてゐる夢占ひに「龍が耳を咬む」といふ夢を見れば、聾になると言ふのがあります。これは「龍」といふ文字と「耳」といふ文字とを合せての判斷でありますが、今日から見れば、夢見る人が意識してゐない耳の病が龍といふ姿と成つて現れるものと言へませう。かやうに、夢の種類の內には、隱れてゐる病氣を告げるものもありますから、診斷學上に、夢の分析を應用した醫學者すらあるのでございます。それならば、なぜ病氣が假裝して夢に現れるのか、と言ふ疑問が起こります。これについては、後に申述べませう。

そこで、生理學は、夢の原因や、意義を、餘す所なく說明し得るかと申しますと、なかなかさう簡單にはまいりません。成程、自身の氣付いてゐない病氣とか、睡眠中の體の位置とか、手足の曲げ方とかに由つて、種々の夢の起ることもございますが、夢には、かやうな原因だけでは說明されないほど複雜奇怪なものが、多くございます。これは實例を擧げるまでもなく、皆樣が御自身の

夢を顧みられるならば、直ちにお分かりになりませう。こゝで口をきき出すのが神祕的解釋でございます。これは神靈とか、靈魂とか言はれるものを立てゝ夢を說明するものでありまして、その最も好い例は、昔から今日まで、いづれの國にも見られる夢判斷の專門家の解釋でございます。

天とか、神靈とか言はれる物のことは、姑く別問題と致しまして、靈魂の存在といふことについて一言いたします。魂魄の二字は、別々の意味でありますから、今はこの語を用ゐずに、「たましひ」と言ふ言葉を採ります。この「たましひ」の存在と言ふ考方の立てられましたのには、種々の理由がありまして、その一つは夢でございます。夢の中の出來事は、實に奇々怪々、常識では到底說明のつかぬものでございますから、ここに「たましひ」と言ふ靈妙不可思議なものが假定されます。この「たましひ」が、身體の休んでゐる時、卽ち睡眠中に、體から脫け出して、勝手な方角へ往來して種々の經驗をする、時には神靈にも接して未來の事までの暗示を受けるのだ、と解釋すれば、先づ都合の好い說明となります。夢は時間や、空間の制限を超越し、合理的法則を無視しますから、日常の心理では、不思議といふ外に形容して見ようもありませんが、若し、場所の上にも、時の上にも、飛行潛行、自由自在な「たましひ」を立てゝ考へれば、夢は不思議だと言ふ方が間違つた說に成りませう。しかし、科學の發達した今日の敎育を受けた者から見れば、神靈とか、「たましひ」とか言はれる得體の知れない物を假定して夢を說くことは、迷信的と考へられませう。たゞし、古來の夢判斷には、迷信的部分があるにしても、その內には、人類の貴い經驗に基づいた解釋も有りますから、これを一概に排斥せず、科學的に考へ直して見る必要があると思ひます。

とにかく、生理學的と神祕的との解釋には、多少に拘らず眞理が含まれてゐると致しましても、吾々を滿足させることはできません。ここで、改めて說明を試みるのが、所謂新心理學でございます。これは、今から約三十五年前に、學界へ提供されました無意識研究に基づく學說でございます。

無意識といふ言葉の一般の用法は、不用意、無心、或ひは正氣なしなどと言ふ意味でありますが、新心理學でいふ無意識とは、特別な意義を有つてをります。これは意識の範圍外に在つて、日常生活の心理作用では、決して知ることのできない心のことでございます。この心理學では、心と言ふものゝ範圍を非常に廣く解釋いたします。普通に言ふ心とは、覺めてゐる時の意識を意味しま

すが、新心理學では、その以外に不明朦朧な心理があると説きます。譬へば、暗い部屋に蠟燭をともしますと、光の屆く部分は明瞭になる、その部分が普通に言ふ意識であつて、光の屆かない部分が無意識と呼ばれるのでございます。

　譬へを改めて申しませう。心といふものは、地下室のある平屋造りの家のやうなものだとお考へ下されば、無意識の意味が明瞭になりませう。座敷や、居間に列べてある諸道具は、誰にも明瞭に見えます。これが普通に言ふ意識の部分でございます。さうして押入の中に仕舞つてある家具は、表にこそ出てはをりませんが、持主の承知してゐるもの、また、何時でも取出し得るものでございます。心理の記憶とか、空想とか、願望とか言ふものは、この押入内の諸道具に當るもので、意の如く囘想し得られます。これらは意識的のものではありませんが、何時でも意識的になり得ます。ところで、地下室には、財産目錄に載つてもゐず、また、この家の主人公自身すら知らないものがあるとお考へ下さい。この部分が無意識と呼ばれるのでございます。

　無意識の内容については、種々の説もありますが、それらを一々紹介しては煩雜になりますから、簡單に申上げます。その内容は、明瞭な意識が、表向きにしたくないと思つて、意識外に押し除けた心理であります。これを抑壓を受けた心理と申してをります。

　意識が抑壓を行ふ理由は樣々でございませう。道德的、論理的、審美的、功利的、或ひは情慾的、その他、種々の理由がありませうから、無意識の内容は雜然としてをります。その上、意識は、それらの内容が表向きにならぬやうに、極力押し隱します。先きの譬へを用ゐますれば、地下室の出入口に、嚴重な戶締りがあるとお考へ下されば宜しいのでございます。だから、無意識の内容は誰にも分りません。持主自身すら知つてゐません。しかし、睡眠の時になりますと、意識の監視が弛みます。この時、無意識の内容が、戶締りを破つて表面へ出てまゐります。それが夢となるのでございます。かやうなわけでありますから、吾が無意識の内容を知りたければ、自分の夢を見るのが近道でございます。或學者は、かう言つてをります。昔は、夢は神靈の傳令使であると言つたものだが、今日では、無意識に到る國道である、と言ふべきだと言ふのでございます。

　かやうに無意識の内容は、表面から排除された心理であると申しますと、それならば、その内容は、地下室の品物同樣、がらくたばかりであらう、とお考へになる方もありませう。勿論、がらくたもありますが、同時に立

派な物もあります。それらは一個人の生活の過去、現在、將來と密接な關係をもつてをりますから、がらくたとして一概に擯斥するわけにはまゐりません。とにかく、夢に現れます事柄は、水面に浮く油のやうなものではなく、夢見る人の生活とは、切り離し難い關係をもつてをります。たゞ、それらの現れ方が甚しく不合理また奇異でありますから、夢ほどばからしいものは無いとか、無意識の内容は、がらくたばかりだ、と判斷されるのでございます。

ここで、何故に夢は奇怪な、辻褄の合はない形となるのか、と言ふ疑問が起こります。これは無意識の働き方が、日常の心理とは全く異なつた方式を取るからでありますその働き方は、論理的でもなく、抽象的でもなく、主もに形體なる物を繋ぎ合はせて意義を表現いたします。しかも、その形體あるもの、即ち形象は、表現しようとする意義と多少の類似または連絡さへあれば、何んでも宜しいです。地下室の無意識の或物は、戸締りを破つて跳び出して、上の座敷や、押入にある道具で、自分に都合の好い物ならば、なんでも構はずに選び取つて意味を表はします。例へば、隱れてゐる欲望や、野心が現れる時には、鳥の翼とか、飛行機とかを借りて、空中飛行をやる夢となります。また、隱蔽してある難問題に惱んでゐて、しかも平生それを忘れやうと勉めてゐる時には、山坂を登るとか、谷間へ轉げ落ちるとか、川を渡るとか、渡り得ないとか云ふやうな夢が現れます。

支那の夢判斷の或本に、かう言ふ話があります。或人が、腹に松の樹が生えたと夢みました所、十八年目に三公の位に登つたと言ふのであります。これは松といふ文字の木偏を割つて十八の數となし、つくりの公を三公といふ高い位に見立てたのでせう。科學的に考へれば、かやうに夢の事柄を分析して豫言まで爲し得るかどうかは疑問でありますが、この人の無意識の慾望が、公と言ふつくりのある文字から、松といふ形象を借りて現れたことだけは了解されます。なほ、先刻、自身も氣付いてゐない病氣が假裝して夢に現れると申しましたのは、無意識的に感じてゐる病氣が、かやうな徑路を辿つて現れるからでございます。

から考へて見ますと、夢は、いかにだらしのないやうなものでありましても、實は皆な相當に重要な意意を持つてをります。ここで、夢の分析といふことが必要となるのでございます。要するに、夢には表面の意味と裏面の意味との二つがありまして、その表面的意義は支離滅裂でありましても、裏面即ち潜在的意義は條理整然としてをります。この裏面の意義を探ぐるのが、夢の分析と

いふ仕事でございます。分析は、夢の中の事物、即ち假裝してゐる物の眞相を探り當てることですが、このためには、分析する人に、立派な識見と經驗とがなければ、目的は遂げられません。また、分析には、數學にあるやうな公式といふやうなやうなものがございませんから、夢みる人の經歷や、現在の境遇や、希望などを十分に調査した上でなければ、的確な分析はできなからうと思ひます。

かやうに、夢は無意識の働きであるとすれば、それと意識との關係はどうか、と云ふ疑問があります。この關係は必然的とまでは申し切れませんが、多くの場合において、訂正もしくは補修關係であると見られます。即ち、夢は、日常生活の意識の働きの缺點または不正な所に警告を與へて反省を促す效力をもつてります。例へば、暴逆無道の人が、恐しい夢、窮迫した夢る見るのは、夢がこの人の日常生活の横暴を指摘するのでございます。また、古い夢判斷に、塵あくたの、うづ高く積つてゐる夢を見れば、金銀財寶を得る、と言ふのがあります。これは、金錢は貴い物であるに相違ないが、その一面は穢らはしい物であるから、そのために心身を勞するな、と言ふ無意識の警告であると判斷されます。また、かう言ふ例があります。年頃に成つても、母親の側から、どうしても離れ得ないお孃さんが、夢に母親が邪見な鬼となつて現れるのを、繰返し見たことがあるさうです。これは、既に年頃に成つたのですから、早く母親の下を去つて、獨立しなければならぬぞ、と言ふ無意識の警告であると判斷されます。

かやうに、夢が、日常生活の心理の缺點を補修する働きをもつてゐることから考へますと、無意識の內容は、必ずしもがらくたばかりではない、地下室の品物の中にも、立派な値打のある物の有ることが領かれませう。

今迄、お話いたしたことを總括いたします。夢は決して詰らないものではなく、表面上、秩序なく、筋道も亂れてゐるものを分析して、奧に潛んでゐる意義を知れば、一つには病源を知り得る便宜があり、そのほかに、心理上の不整頓、その極端な例はヒステリーでありまして、その原因を探ぐることができます。また、たとひヒステリー或ひは變態心理でないにしても、とにかく中庸を得てゐない心理で、しかも持主自身も氣付いてゐない心理作用を修正する所に、夢の分析の效能があります。常態心理の夢ならば、特に專門家を煩はして分析してもらうほどの必要はありますまい。各自が自身の心理の歷史を基として考察すれば、潛在的意義はおのづから現れませう。（六七頁下段へ續く）

ほゝゑみ（D・H・ロレンス作）

——“Smile”（D. H. Lawrence）——

岩倉具榮譯

彼は一種の刑罰として、夜の間ずつと起きてゐやうと決心したのであつた。電文には只「オフィーリア、危篤」とあつたゞけだ。が、事情この樣であるのに、寢臺車の中で寢るのは輕薄だと思つた。それで夜の帳りに掩はれたフランスの國土を走る一等車の車室に、彼はぐつたり疲れて腰掛けてゐた。

彼は勿論オフィーリアの寢臺の側につき添つてゐるべきだ。けれどもオフィーリアがそれを望まなかつたのだ。それで彼は列車の中で起きてゐたのだ。

彼の心の奧底深く黑い重苦しいものがのしかゝつてゐた。全くの暗黑に閉された何かのできものが彼の生命を壓迫するかの樣であつた。彼はいつも人生を眞劍に考へてゐた。眞劍さのために今や彼は壓倒されてゐた。彼の顏は淺黑く、美しく、綺麗に剃つてあつたが、その澤山の黑い眉毛は、意識を失ふばかりの苦痛のためにゆがめられて、十字架上のクリストの樣であつた。

列車の中の夜は地獄みたいであつた。この世の事とも思へぬばかりであつた。彼の向ひ側の二人の年取つたイギリス女は、ずつと前に死んで了つた。多分彼よりも前に死んでしまつてゐた。何故なら、勿論、彼自身も死んで了つて

ゐたのだから…。
ゆつくりと、灰色のあけぼのが前の方の山にやつて來た。そして、彼は見えない眼でそれを眺めてゐた。併し、彼の心はかう繰返した。
「かくて仄々と悲しげに、曙の來たりし時、また朝立を伴ひてうす寒の襲ひ來りし時、
彼女の瞼は靜かに閉ざゝれて、吾等の朝とは異る朝に、彼女は眼覺め行きぬ。」
そして、彼の顏は僧侶のやうに不變で、惱ましげであつたが、彼の批判的な心がこの修辭を判斷して感じた輕蔑、自嘲の跡はそこに見えてはゐなかつた。
彼はイタリーにゐた、彼は仄かな嫌惡を以てその國を見てゐた。彼はオリーヴと海を見た時にも、それ以上多くを感ずることが出來ないで、只一沫の嫌惡を懷いた。それは一種の詩的なまやかしであつた。
オフィーリアが退隱の所として選んだ「青い尼」の家に彼が着いた時は、次の夜であつた。彼はこの館の僧院長の部屋に案內された。彼女は立上つて、靜かに挨拶し、顏を仰向けて彼を見やり、それからフランス語で云つた。
「誠に申上げにくい事で御座いますが、あの方は今日の午後お亡くなりになりました。」
彼はぼんやりして立つてゐた、何の感情もあまり起きて來なかつた。その美しい、特徴の强い、僧侶の樣な顏から空（くう）を見つめてゐた。
僧院長はその白い、美しい手を彼の腕の上にやさしくおいて、彼の方に身をかがめ乍らその顏をのぞき込んだ。
「がつかりしないで下さい！」と彼女はやさしく云つた。「がつかりしないで下さい、駄目ですか。」
彼はあとずさつた。女の人からそんな風により添はれると、彼はいつも困つた。かさばつたスカートを身につけてゐる僧院長は、極めて女らしい感じであつた。
「全くです！」と彼は英語で答へた。「一寸會はせて頂けませうか。」
僧院長はベルを鳴らした、すると若い尼が現はれ。彼女はどつちかと云へば蒼白い顏色であつたが、その赤褐色の

眼には何か素朴な、いたづららしい所があつた。尼僧長が小さい聲で紹介すると、若い尼は愼ましげに輕く敬禮した。けれどもマッシウは最後のわらを摑む男の様に手を差出した。若い尼はその白い兩手を離して、恥しさうに一方の手を、眠つてゐる小鳥の様に受身に、彼の手にすべり込ませた。

然るに彼は深い暗黑の底にゐながら、何といふ美しい手だらう！と思つた。

彼等は美しいけれども冷い廊下をずつと歩いて行き、とある扉の前へ來てそれをたゝいた。マッシウは遙かな暗い底を歩いてゐる心持しながらも、なほ彼の前にやさしく、そはそはと急いで行く女の黑いスカートが、やわらかく、美しく、かさばつて見えるのを氣付いてゐた。

彼はその戸が開かれた時に恐ろしく感じた。蠟燭は高く、貴い部屋の中で、白いベッドの周りに燃えてゐるのが見えた。一人の尼が蠟燭の側に腰掛けてゐた、そして彼女が日課經から目を上げた時、白い頭巾の中の顏は淺黑く原始的であつた。と、彼女は立上つたが、巖丈な女であつた。一寸お辭儀をした。そして彼女が乳の様な、黑みがかつた手で、胸のあたりの豐かな、青い絹の上で、數珠をまさぐつてゐるのをマッシウは氣付いた。

三人の尼は靜かに、併しそはそはと大變女らしく、かさばつた絹の黑いスカートゆりつゝ、ベットの頭の方に集つた。

僧院長は身を屈め、そして極めてデリケートに死者の顏から白い寒冷紗のおほひを取上げた。

マッシウは自分の死んだ妻の顏が、美しく平靜であるのを見た。すると忽ち、彼の心の底深く何か哄笑の様なものがとびはねた。彼は一寸ブツブツ云つた、すると異常なほゝゑみが彼の顏に現れた。

三人の尼は、クリスマス・トリーの様に溫かくチラ〳〵する蠟燭の光りの中に立つて、彼等の頭巾のひもの下から、重々しい同情的な眼で彼を見つめてゐた。彼等は一つの鏡の様であつた。六つの眼は急に驚きの内に一寸恐怖を示し、それが變じて、面喰ひ、不思議さうであつた。そして蠟燭の光りの中に手持なく彼の方に對つてゐる三人の尼の顏には、奇妙な、吾知らぬほゝゑみが浮み始めた。三人の顏には、同じほゝゑみが、開き行く三つの微妙な花の様

に、大變違つて現れて行つた。蒼白い若い尼に於いては、それは殆ど苦痛であつたが、一寸いたづらしゝ無上の嬉しさを伴うてゐるやうであつた。併し死體の番をしてゐた尼は成熟した、額の平たい女であつたが、その黑い、リギウリア（古代イタリー北部住民）風の顏は、異敎的なほゝゑみで歪み、その古風なユーモアはゆるやかで、無限に微妙であつた。それはエトラスカ風のほゝゑみで、微妙で厚かましく、又相手になれないやうなものであつた。

何處かマッシウの樣な、道具建ての大きい顏をしてゐた僧院長は、笑はない樣にと一生懸命努めてゐた。けれども彼はユウモラスな、惡意のある顎を彼女の方に向けたまゝでゐると、やがて彼女はほゝゑみ出し、それが段々段々、廣がつて來たので顏を下げて了つた。

若い、蒼白い尼は身體を震はして突然袖で顏をおほつた。僧院長は腕をその若い女の肩におき、イタリア的な感動を以てつぶやいた。「可愛さうに、まアこの子は！　お泣き、さあ、可愛さうに、この子は！」けれども含み笑ひはなほその感動の下にひそんでゐた。巖丈な淺黑い尼はちやんとして、黑い數珠をまさぐりつゝ立つてゐたが、その靜かなほゝゑみは去らなかつた。

マッシウは彼の死んだ妻が彼の樣子を觀てゐたのではないかと思つて、急にベットの方に向いた。それは心配の動作であつた。

オフィーリアは大變可愛らしく、又大變傷ましい樣子で橫たはつて居た。その尖つた、死せる小さな鼻はとがり、そして强情な子供の樣な彼女の顏は最後の頑なさに凝固してゐた。ほゝゑみはマッシウから去り、その代りに殉敎者も及ばぬやうな顏付になつた。彼は泣かなかつた。彼は意味もなく、見つめるのみであつた。只、彼の顏に深く刻まれてゐたのは、このやうな殉敎者的な心持が私にも有つたことを知つた！　と云ふことであつた。

彼女はこのやうに可愛らしく、このやうに子供らしく、このやうに利巧で、このやうに强情で、このやうにやつれてゐた——そしてこの樣に死んで了つた！　彼は之等凡てを甚だ空虛に感じた。

彼等は結婚してから十年を過した。彼自身完全な夫ではなかつた——いや、いや、決して完全ではなかつた！　併

しオフィーリアはいつも彼女自身の意志を缺いてゐた。彼女は彼を愛してゐた。そして強情になり、彼を離れ、十二遍も意地惡くなり、彼を馬鹿にし、或ひは怒り、そして十二遍も彼の許に歸つて來た。

彼等には子供がなかつた。そして、彼は感傷的に、いつも子供を欲しがつてゐた。彼は限りなくその事を苦にしてゐた。

今度こそ、彼女は斷じて彼の所に歸つて來ようとしなかつた。之は十三遍目であつた。そして、彼女は永久に行つて了つた。

併し彼女は行つて了つたのだらうか。彼がさう考へた丁度その時、彼は自分をほゝゑませようと、何處か脇腹を彼女が銜つついてゐる樣に感じた。彼は一寸身悶えした。すると怒つたしかめ顏がその額に現れた。彼はほゝゑまうと云ふ氣はなかつた！ 彼は限りなく心をかき亂すこの死んだ女を見下しながら、その四角い、無髯の顎を出して、大きな齒を現はした。「それに對してもう一度！」——彼はディッケンズ作中の男の樣に、彼女に話し度く思つた。

彼自身は完全ではなかつた。彼は自分自身が如何に不完全であつたかを考へて見ようと思つてゐた。

彼は急に三人の女の方に向つた。彼等は蠟燭の向ふ側に、後ろの方に、かすかになり、そして今は彼と無何有の世界との間を、頭巾の白い縁に包まれて、さまようてゐた。彼の眼は輝いた、そして彼は齒を見せた。

「わが咎なり！ わが責めなり！」(Mea culpa, Mea culpa) と彼はうなつた。

「Macchè !」と驚いた僧院長は叫んだ。そして彼女の二つの手は、厚い袖の中で、パッと離れてから、雌雄の小鳥が巣にゐる樣に、又合さつた。

マッシウは頭をヒョイと下げて、何か云ひ出さうとして、あたりを見まはした。僧院長は、後ろの方でやさしく、「我等の父」を讀誦した。そして彼女の數珠はブラリと垂れた。蒼白い若い尼はずつと後ろの方にかすんで行つた。併し嚴丈な、皮膚の淺黑い尼の黑い眼は永久にユウモラスな星の樣に、彼の上にまたゝいてゐた。すると彼はほゝゑみが再びその脇腹を突つく樣に感じた。

「如何でせう！」と彼は注意を促すやうに尼さんたちに云つた。「私は恐ろしく氣持が轉倒してゐるのです。私はこゝを離れた方がいゝようです。」

彼等は如何にもやさしげに喫驚してうろうろしてゐた。彼は戸に向つてよろ〱歩いた。けれども彼が去つた丁度その時、ほゝゑみが彼の顏に浮び始めた。そしてそれを、巖丈な尼の不斷にまたゝく、黑い眼のはしに見つかつた。ところが彼は、番ひの小鳥の樣に合さつてゐた、彼女の脂ぎつた、淺黑い兩手を肆に握ることが出來たらと、ひそかに考へてゐた。

けれども彼は自分自身の不完全に就いて十分に考へねばならないと思つてゐた。わが咎なり！　彼は自分に向つて咆えた。ところが、彼がさう咆えると同時に、彼は何ものかゞ、ほゝゑめ！　と云つて、彼の脇腹を輕くつくのを感じた。

高い部屋の中に殘された三人の女はお互ひに顏を見合つた。彼女等の手は、六羽の小鳥が急に葉陰から飛立つ樣に、一瞬間とび上り、それから又落着いた。

「可愛さうな人です！」と僧院長は、氣の毒さうに云つた。

「えゝ！　えゝ！　可愛さうな人で御座います！」と若い尼は、素朴に、如何にも感動的に、云つた。

「Già！」皮膚の淺黑い尼は云つた。

僧院長は靜かにベッドの所へ行つて、死者の顏を覗き込んだ。

「この人は知つてゐるやうに見える。可愛さうな人！」と彼女はつぶやいた。「さう思ひませんか。」

頭巾をかぶつた三つの頭が一緒に覗き込んだ。そして彼等は始めて、オフィーリアの口の邊にかすかな皮肉のひきつりを見た。彼女等は不思議に心を戰かせてゐるやうに見えた。

「この人はあの方を見たんですね！」と、若い尼はぞつとしてさゝやいた。

僧院長は、綺麗に細工したおほひを冷い顏の上にやさしくかけた。それから彼女等は數珠をまさぐつて、靈への祈

りをつぶやいた。そして僧院長は二本の蠟燭をまつすぐに蠟燭臺の釘の上におき、太い蠟燭をしつかり、やわらかく握りしめて、それを下に押しやつた。

淺黑い顏の、巖丈な尼は再び彼女の小さい聖書を持つて腰を下した。他の二人は靜かに戸の方へ衣ずれの音を立てゝ歩み、それから大きな白い廊下に出て行つた。そこで、靜かに、音もなく、黑いスワンが河を下る樣に、すつかり黑い衣に包まれて歩きつゝ、彼等は急に歩みをためらつた。彼等は二人とも、廊下の端の寒々した遠い所を、陰氣な外套を着て、孤獨な男のよろめいてゐる姿を見たのであつた。僧院長は急に走る樣に歩を早めた。

マッシウは彼女等を重苦しく思つた。顏の周りを頭巾で被ひ、手を隱してゐるかさばつた姿がのしかゝるやうに思つた。若い尼は少し後ろからついて來た。

「失禮ですが、尼さん！」と彼はまるで街の中にゐるかの樣に云つた。「私は帽子をどこかにおき忘れて來ました：……」

彼は絕望的に、腕を一ふり動かした。そしてこの時の彼ほどに全くほゝゑみのない男はかつてなかつた。（完）

夫婦生活に於ける愛憎並存性（アムビヴレンツ）をよく描いてゐる作品である。マッシウの微笑につれて微笑する尼たちに於いてはまた人情一般のアムビヴレンツを描いてゐるのであらう。最後に於ける「帽子」はこの場合、妻の象徵となつてゐる。廊下の端に「陰氣な外套を着た孤獨の男」を綴出したところは、作家としての一種の技巧であるが、やはりよくきいてゐるやうだ。如何にもロレンスらしい圖太い、併し正直なものが出てゐる。

（R）

ウォルタア・ペイタアのギリシャ的愛

岩倉具榮

一

ウォルタア・ペイタア（Walter Horatio Pater, 1839—94）は十九世紀末に於るイギリス文壇の特異なる批評家兼詩人である。先に本誌上に於て江戸川亂歩氏が紹介されたジョン・アディントン・シモンズと同じく、ウォルタア・ペイタアも亦、一醫師の子として一八三九年八月四日に生れ、一八九四年七月卅日、五十五歳を以てその靜かな一生を終るまで、純粹な藝術研究の使徒としてその身を捧げたのであつた。從つてその外部生活には何等特記すべきものはないが、不朽の生命はその十冊程の著書となつて殘つてゐる。アーサー・シモンズも云つてゐる如く、ウォルタア・ペイタアの散文はイギリス文學中最も美しいものゝ一つである。

彼の最初の著書は『文藝復興』（The Renaissance）であつて、その文名を一代に高からしめたものである。それはペイタアの卅歳前後より七八年間に渡つて次々に發表した、文藝復興期の詩と藝術の研究を集めたもので、ペイタアを知るには最もよい代表作である。

ルネサンスの深園に分け入つた後、彼は次の五年間を更にその淵源であるギリシャ時代の研鑽に捧げた。ペイタアもJ・A・シモンズと共に、オクスフォード大學に於て、プラトオンの飜譯者であるギリシャ學者ジャウェット教授（Benjamin Jowett）の弟子であつた。J・A・シモンズが『ギリシャ詩人の研究』から『イタリア文藝復興の歴史的研究』に進んだのとは逆に、ペイタアは『文藝復興』から進んで『希臘研究』に及んだ。この二人の文學者の共通の興味はその著書の底に流れてゐるプラト

ニック・ラヴ(Ptatonic Love)即ちギリシヤ的愛である。

男性間の戀愛を讃美する言葉は、ペイタアの著書の處々にほの見えてゐるのであるが、私は初期の著述『文藝復興』について之を述べて見度いと思ふ。

ペイタアの『文藝復興』は唯美（感覺）派として一部の非難を買つたのであつたが、彼は之に抗議せんとして大作『享樂主義者メイリアス』を書いた。之れは純粹の創作であつて、ローマ時代に生きた主人公マリウスに假托してペイタア自身の主張を述べたものである。そこに宗教とも云ふべきものを見ることが出來る。ペイタアは生れ乍らにしてカトリック教の美に心ひかれてゐた。併し宗教を美しい病氣だと云つた彼は異教と基督教との結合を理想としたので、異教的の香りが色濃く現れ、彼の深き教養は更に之を昇華してゐる。ペイタアのその他の著書としては『想像上の肖像』、『雜纂』、評論、等があるが、晩年の作『プラトオとプラトオ哲學』はペイタアの最も最意の著作と云はれてゐる。そして最後にペイタアは未完成の『ガストン・ド・ラトウル』を殘して、パスカルに關する論文を書いてゐた時、かりそめの病に突然この世を去つたのであつた。

ペイタアの著述は概略以上の如くで、次に私はこの文の本論に入つて、彼のギリシヤ的愛について考へて見度い。彼の外部生活には何等變つた所はなかつたが、只、一生獨身であつたことは特記しておかねばならぬ。つゝましい性格のペイタアには、オスカー・ワイルドに見る如き實際の同性愛關係はなかつた樣である。

青年美に對するペイタアの深い關心は、その各種の著述によつて知る外はないのである。私は彼の代表作『文藝復興』中にそのギリシヤ的愛が如何に取扱はれてゐるかを次に述べよう。

二

ペイタアの『ルネサンス』は緒言と結論以外に九編から成つてゐる。今、私はその最後の章『ヴィンケルマン』について語る。之はペイタアの比較的初期の作で、この十八世紀のドイツ人を『ルネサンス』中に入れた理由については、ペエタア自ら緒言の中に次の如く云つてゐる。

「ヴィンケルマン（Johann Joachim Winckelmann）は十八世紀に生れた人ではあるが、その精神に於ては、實際、ずつと以前の時代に屬するからである。知的並びに想像的の事物を、それ自身の爲に好愛する熱情や、その希臘主義や、希臘精神に到達せんとするその一生の努力によつて、彼は以前の世紀のヒウマニスト(人文主義者)

と共鳴した人物である。卽ち彼はルネサンスの最後の果實であつた、この運動の動機と傾向とを、最も明瞭に吾等に說明するのである。」と。（以下引用は凡て佐久間政一氏譯に依る）

ヴィンケルマンは有名な『古代藝術史』を書いた人物であつて、大らかなる古代ギリシヤの美術に對してゲエテの眼を開かせたのもこの人であつた。ヴィンケルマンの同性愛的友情をペイタアは次の如く記してゐるのである。

「彼とヘレニズムとの親しい關係は、單に知的であるばかりではなかつた事、この關係のうちには氣質のより微妙な絲が織り込ませてゐた事は、ヴィンケルマンと青年たちとの間のロマンティックな熱烈な友情によつて立證される。彼はグィドウ・レニ（Guido Reni 1575―1642）の描いた大天使よりも、もつと美しい多くの青年達を知つた、と彼自ら云ふ。これらの友情は、人體の誇りとヴィンケルマンとを接觸させ、思想を人體の花で染め、希臘の彫刻の精神と彼との一致を完全ならしめた。」

彼の友情の記錄の特徵的のものとして、ペイタアは次の文章を引用してゐる。

「人間の美といふものは、一個の一般的概念の下に考へらるべきものであることが明らかである如く、美を單に婦人に於てのみ認め、男性の美によつては、殆ど動かされず、或は全く動かされない人にして、藝術に於る美に對して、公平な、力强い、生得的の本能を持てることは稀有である。」（圈點は岩倉之れを附す）

「かゝる人物には、希臘藝術の美はいつも不足せるものゝ樣に見えるであらう。何となればそれの最上の美は女性的よりもむしろ男性的だからである。併し藝術美は自然美よりも、より高い感受性のあることを要求する。何となれば、藝術美は、演劇を見て流す淚の樣に、如何なる苦痛をも與へず、生命がなく、敎養によつて喚び起され且修正されなければならないからである。さて、敎養の精神は、成年時代に於るよりも、青春時代に於て、ずつと熱烈であるから、私が話してゐるところの本能、卽ち美的本能は、人がこの本能に對して何等の趣味をも持たずと自白するのを恐れる時代（卽ち老年時代）に達する前に美なるもの（藝術品）に向けられなければならない。」

かゝる思想の中には、ヴィンケルマンの年若き青年の花の如き肉體美に對する云はれ知らぬ憧れが滿ち充ちてゐると共に、之れに共鳴同感したペイタアも亦、青年の美に對して生れ乍らの敏感を持つてゐた人の一人であつたことが知られる。

美に對する希臘人の崇拜に關するヴィンケルマンの言葉を引いてから、ペイタアは更にかく云ふ。

「神々の崇拜者達は、神々そのものゝやうに、迅速に且つ麗はしくなることによつて、また白く、赤くなることによつて、神々に自己を推擧しなければならない。體育の美と、藝術家の工房の美とは、相互に働きかけるものである。青年は神々と競爭すべく試みる。彼の增加せる美は、また神々の方へ立ち戻つた。――「私は神々を證人にして云ふが、私は王冠よりも、むしろ美しい肉體がほしい。」これは、世界の一時代が、それに於て一層高い生活を選んだ形式である。――若し神々が、永久に迅速鮮麗で且つ白く又赤くあるやうに見えることが出來さへしたら、一個の完全な世界であつたらうに！ 併し人類の此困惑なき青春が、それ自らの幻影によつて滿足させられてゐて、然るべき時機に於て、悲しい生熟に移り行つたことを、われらは遺憾としまいと思ふ。何となれば、當時既に、墳墓のなかに居ながら生きてゐて、なほ紅の色を呈しつゝある青春の理想を、（ルネサンスの曉に於て）見出すといふ深い喜びが人間の精神に對して、貯藏されて居たからである。」

三

ペイタアはギリシャの美術に對する同性愛的情熱を以て、かく云つてゐる。

「希臘の彫刻は、ほとんで專門的に、青年を取扱つて居る。この場合、肉體的器官の肉附きは、なほ生長しつゝあつて、まだ完成しない時期の間で、一寸せきとめられたかの觀を呈し、それは示されてはゐるが、强調されては居ない。またこの場合、曲線から曲線への推移は、甚だ微妙でまた捕捉しがたいので、ヴィンケルマンは、これを靜かな海に比較した。われらは、靜かな海を、動いて居るとは知りつゝも、なほ且つこれを、休らひの一つの面影だと考へるのである。從つて青年の肉體の發達の精確なる程度を理解するのは、甚しく困難である。」（中略）

「すべてこれらの效果が、一個の例證に結合してゐるのは、ベルリンの博物館にある『祈れる人』と稱するもので、それは角鬪者の賞を得た一人の青年が、勝利を讚美して、手をあげて開いてゐるところを表はしたものである。それは生氣潑辣として、躊躇するところなく、恰も自然の眠りから、今初めて覺えて飛び上つた人の樣であつて、その白い光は、或一面的な經驗から、そのいかなる色彩をも取ることをしない。この人物は、若し『性格』といふ言葉にして、人生の偶發的な事件の影響の下に隨

従することを意味するならば、『無性格』と稱すべきものである。」

　ヴィンケルマンの友愛についてペイタアは更に言葉を續ける。

「彼は常に彼の思考を、一個の明確にして明白且つ客觀的な形式のうちに醇化しやうと、熱心に努めてゐた。彼は、この氣質を常に彼をして青年の精神と接觸せしめたる友情によつて撫育し、また激勵した。希臘の彫像の美は無性(セックスレス)の美である。神々の彫像は、性の痕跡を最少限度にしか持つてゐない。こゝに道德的の無性がある。こゝに自然の中性的完全態の一種がある。併し、それは又それ自らの眞の美と意味とを持つてゐる。」

　以上の如き言葉によつて明かに知られることは、ウォルタア・ペイタアが同性青年の美を愛した人間であつたことがある。かく云つてもペイタアを傷けることにはなるなどゝ考へる人は本誌の讀者の間にゐまい。特有の美的情熱を持ち、眞性の美に對する深い認識を懷いたことを證明するものである。

　ギリシヤ時代のプラトオ的愛については、J・A・シモンズが、その『ダンテとプラトオとの愛の理想』中に次の如く云つてゐるのである。

「各地方に於て、青年が一人の求愛者を持たないものは一般の尊敬を失つた。斯る友人關係に於て、年長者は『力附ける人(インスパイアラー)』とか『愛人(ラヴァア)』といふ名前を受け、年少者の方は『傾聽者(ヒアラー)』とか『嘆美される人(アドマイアード)』といふ名前を受けた。若者が成長して彼の仲間と戰爭に出た場合、彼は隊伍の中の傍觀者(バイスタンダー)といふ稱號で呼ばれた。私は今、ドオリス峰愛を支配してゐる詳細な法律や習慣を述べてゐる餘裕がない。唯、是等の法律、習慣等のあらゆるものゝ中には、民衆に尙武的精神を鼓推し、青年に對しては男性的な教育を獲得せしめ、國家の男性を凡て相互愛といふ鎖によつてお互に結び付けようといふ意圖が認められると言ふ位に止めておかう。少くとも早い時代に、忠誠とか自尊とか、是等の關係の永續といふやうな美德を獲得しようと云ふ點に注意が取られた。要するに男性愛は原始的ヘラスの騎士道となり、ヘラスの人間を力附け、鼓舞する熱情であつた。此男性愛は結婚を拒否するものでもなければ、婦人の社會的地位を低下せしめる樣な結果を惹起しもしなかつた。といふのは友達の愛が一つの制度となつたドオリスの國家に於ては、婦人達は何處の國よりもはるかに一般の尊敬を受け、所有權に對しても充分な自由と權利とを享けてゐたといふことが明かであるから。」（田部重治氏譯）

　之こそギリシヤ的愛の眞髓であつて、ペイタアは深く

ギリシヤ精神に味到してゐた。

四

ペイタアは又その著『ルネサンス』の最初の章に、古代のフランスの物語二篇を論じてゐる。その一つは『アミイとアミイルとの友愛』と稱するもので、十三世紀の物語である。之についてペイタアは次の如く云ふ。

「このうちに於ては、その要求をアベラアルが肯定したる人間の愛情の自由なる活動が、大なる友情の上の出來事のうちで强烈に感得される。それは至純な、廣大な友情で、一種の激情的高揚と云ふべき處まで進んで行き、そして死に至るまで互ひに非常な忠實であつたのである。かゝる友情は、その實例が至るところで發見されはするけれども、この小說のなかの友情の如きは特になほ古典的な動因を有するものである。」

「アミイとアミイルとの友情は、此二人の主人公が全くよく似て居るといふ浪漫的な事情によつて、なほ更に深くされる。この類似のために、各々とりちがへられた事が度々あり、この爲に多のく奇怪な事件に陷るのであつた。かの星辰の間では、ダイオスキユウライを以て始まるドッペル・ゲンゲルに就ての好奇的興味は、物語りの總ての出來事を通じて、織り出され、織り込まれて居る。それは恰も、彼等の內的類似をあらはす外的表徵であるかのやうに。」

之等の言葉の中に、私は自己戀愛と同性愛との關係が明かに示唆されてゐるのを見る。このアミイとアミイルとの友情の物語は、死に至るまで、極度に忠實であつた地上の友情の僧侶的奇蹟を以て終つた。ペイタアは死によつても分たるゝことなきこの驚くべき親睦のさまを見よ。」と云つて感嘆してゐるのである。

ルネサンスの曙光がそこにほの見えてゐるこのフランスの物語に於ても、ペイタアはそのギリシヤ的愛を强調して止まなかつた。

その他、『ミケランヂェロの詩』の章でもペイタアはこの藝術家について、かく云つてゐる。

「われらは彼の靑年明代については、殆ど知らない。併し一切の事情は、當年の彼の激情が、甚だ猛烈であつたことを信ぜしめる。彼のソネットのプラトオ的の靜けさの下には肉の形と色とに對する深甚な悅びがかくれてゐる。ソネット及びなほすぐれてマドリガルのうちには、彼はずつと落着きのない愛情を屢々云ひあらはしてゐる。併し、そのうちの或ものは、あたかも故鄕に歸るさすらひの人から聞くやうな悔悛の色を帶びてひゞく。想像の世界に於ける裸形の人體の至上權について、あのや

うに斷乎として言ひ切つた彼は、必ずしもわれらが考へる樣に、いつも純然たるプラトオ的の戀愛をする人ではなかつた。彼の戀愛は、曖昧で我儘なものであつたかも知れない。併しこの戀愛は、彼の性質の有する力を分有してゐた。」云々と。

ミケランヂェロの同性愛については、ペイタアは、J・A・シモンズ程鮮明に示してはゐないが、此のルネサンヌ人の特性に注意を拂つてゐることは同樣である。それから、『レオナルド・ダ・ヴィンチ』の章に於ても、この美術家のモデルとなつた美青年アンドレア・サライーノ（Andrea Salaino）について言及してゐる。ダ・ヴィンチはフロイドの分析に依つてその本性を明かにした如く同性愛者であつた。

以上の如くウォルター・ペイタアはその著『ルネサンス』中の各所に於て、ギリシヤ的愛に關する情熱を示してゐるのである。ギリシヤ的愛はペイタアの天才に潛在してゐた。

私は彼の同性愛美的情熱をすくひ上げて讀者の前にならべて見たに過ぎない。その個人生活に言及して心理分析しなかつた事を謝する。（完）

（五三頁末から續く）

要するに、夢を分析して、吉凶禍福までを占ふことはできないと思ひますが、これに依つて各自の生活を反省することは可能であります。さうして反省は、各自の生活を健全ならしめる道であると信じます。これを以て終りといたします。

（昭和十年一月十日、中央放送局より放送草稿）

時評

時言數題

大槻憲二

一、帝國美術院改革を契機として

筆者は先號に『天皇機關說を契機として』學問の自立性を說いたが、こゝにまた目下世間を騷がせてゐる帝國美術院改革問題を契機として學藝と爲政との關係を論じて見たい。

今次の改組は只今のところどうなり行くか逆睹すべからざる狀態にあるが、私をして云はしむれば、これは要するに×××の×××仕事に過ぎず、これに動かされた美術家連の利己主義振りを暴露したゞけで、別に何等改正にはなつてをらぬと云はれても仕方がなからうと思ふ。勿論、如何なる制度も因襲久しきに亘る時は幾多の弊害を生ずるものであつて、舊態の美術院に幾多の病弊の存した事は誰しも否むことは出來ない。それ故に、これに荒療治を施すことそれ自身には何人も（公平に見る限り）別に異議のないところであらう。帝國美術院はその名の大に拘らず、わが國美術界の一部を擁護するに過ぎなかつた實狀は、何人もその不徹底を認めざるを得ない。殊に日本畫部は私設の日本美術院に比して或る點から見ても實力の却つて低いことは、誠に帝國美術院そのものゝ權威に關することであつた。その缺陷を無くしようとした××の努力は多とするが、その處置には幾多の矛盾、不徹底、不合理、不正、不親切があつて、只今の如く美術界全般を一大混亂の渦中に投じてしまつたことに就いては、××××××××××××××に於いて××の責を免れることは出來ないであらう。

私をして云はしむれば、旣に先號に於いて論じたやうに、政府が學藝の直接的擁護、又はそれに關する何らかの組織の經營に當ると云ふことは、寧ろ利益よりも弊害の方が大きいのであるから、美術院の如きは思ひ切つて解散して了つて、從來の所謂帝展作家たちの團體は、これを一私設團體として、二科、院展、その他と平等の位置に立たしめて、政府は離れた位置からこれ等に一樣の公平なる、第三者的庇護を與へるやうにすべきであつた。前號に於いて云つたやうに、學藝は平民的、在野的であるべき筈のものである。これを官設的にすることは墮落の第一步である。野にあつて平民として、實力を以て自

由競爭をなさしむべきである。現に帝展系の作家たちは本來もつと平民的な作風の素質を有する人々さへもが、妙に官學的な上品振り、サロン的臭味を示して面白くないと常々私は主張してゐるのである。

私は先號に於いて、帝國美術院や帝國學士院などゝ云ふものには元來あまり好感を持たないと云つたところ、端なくも美術院今日の一大革命を見るに至つたが、學士院の方はなほ平穏無事である。學士院の組織や性質は美術院のそれとは非常に異り、官學派古手教授連の祠り込み場所に過ぎないのであらうが、それにしても學士院會員であるべき美濃部達吉博士の起訴は愈々確實の事となつたと新聞紙は執導してゐる。

美濃部博士が三十年來、機關說を官學講壇に說いて來て無事であつたに拘らず、今日に至つて罪過を構成するものと認められるとは誠に××××と申さねばならぬ。私は博士の學說の內容如何はともかく、今日に至つて斯くの如き××××を受けねばならぬその心境を察して誠に同情を禁じ得ざるものがある。それにしても官學派の諸教授連が、宛も他人事として冷淡に博士の境遇を看過してゐるのは、何と云ふ不人情、何と云ふ不甲斐なさ、何と云ふ利己的な態度であらう。大學內部にも博士に同情し、××××××してゐる向きも多いと云ふことであるに拘らず、全く沈默を守つてゐるのは、今日の官學界一人の氣骨の士のないことを示してゐる。その節操と氣力とに於いて勞働者にさへ劣つてゐると云はれても仕方がないのではなからうか。

併し、そんなことは、實は我々にはどちらでもよい。たゞ、政府が學藝に對する態度はこれは直營にせず、第三者として公平に庇護を與へると云ふ方針をとるのが最も正當な態度であると云ふことを主張したいのだ。直營にすると、どうしてもその事自身が不公平を意味するやうになる。偶然、政府の庇護範圍に這入つて來なかつた英才等は、その自由競爭に於いて甚だハンディキャップを附けられることになる。

そんな事はまアどうでもいゝとしても、政府は民間學徒や民間教育家が如何に國民指導のために匿れた大きな功績を擧げてゐるかと云ふ事を時々は考へ、それに對してせめて謝辭位は呈するのは禮であると思ふ。政府にとつては國民は子であると、國定教科書にも說いてあるが、その子が世話になれば親としては禮を云はねばならぬ位の事は、眼に一丁字のない者でも心得てゐる。併し政府は民間教育家に對してさう云ふ禮儀は殆ど盡してはゐない。例へば、私が只今倉卒に想起するだけでも、藤森良三氏の考へ方、今井信之氏の英語通信社、井上十吉氏の

英語通信學校、石丸梧平氏の「人生創造」などの十年、二十年に亘る努力は甚だ大きく、その恩義を謝してゐる青年の多くを現に私は知つてゐる。氏等は勿論、事業それ自身を樂んで政府の褒賞を期待するやうな人々ではないが、それにしても後藤靜香氏に綠綬褒章を贈つた程の政府がこれ等の人々の功績を無視してゐるのは奇怪な話であると思ふ。

要するに政府が學藝奬勵のための何等かの組織を直接經營することは弊害がある事を、少くともあまり大きな成果を擧げ得ない云ふことを悟つて貰へばいゝのだ。それよりも屢々繰返すやうに、離れた立場から第三者として學藝家たちの自由競爭を眺めてゐて、なるべく公平に、一般的に援助すると云ふ態度をとる方がよい。學藝家の方でも政府の中へ入れて貰はうと云ふやうな幼兒的なことはやめにした方がよい。勅任待遇と云つたやうな好餌で釣れば、政治家や實業家でなくたつて、どうせ足の裏に飯粒のついてゐる人間として利害に完全に超越出來るものなんか絕對にないのだから（あれば人格崇高と云ふよりは神經症的なんだ）、誰だつて（二科會員のみならず）友人を裏切つてゞも喰付いて行かうと云ふやうな、淺間しい一面を見せることになる。そんな事をさせるのは、する者よりもさせる者の方が却つて惡い。その意味で××××今度の措置は道德的にも批難を免れない。×××××××××仕事だと私が云ふのはその意味でだ。

今日（六月五日）の新聞を見ると、他方また帝國文藝院なるものが出來るやうだ。これも文藝家をその內部に入れて會員（官吏）にすると云ふやうなことをせず、たゞ著作權を擁護すると云ふやうな事だけに止まるならば結構だが、文藝家も勅任待遇にありつかうと云ふやうな淺墓な了見からならやめた方がよい。實は私は、美術界に美術院あり、學界に學士院があるのに、文壇に文藝院のないのは、流石にお前にだけは幇間根性がないためだと、心ひそかにほめてゐたのだが、私の折角の信賴を裏切らないやうにして貰ひたいものだ。（六月六日、朝日新聞夕刊を見ると、無鑑査組の人々が官展無用論を聲明してゐるやうであるが、私の論文は旣にその前日に書上げてあつたのだ。併しそれ程の名案があるなら彼等は何故もつと早く發表しなかつたか。只今云ふのは時機が惡かつた。俺もとらないんだからお前もとるなと云ふやうに聞こえて少し悲慘だ。）

二、橫山美知子に與ふ

橫山美智子が朝日新聞に連載してゐる懸賞當選長篇小說『綠の地平線』を讀んで、女の仕事の規模の小さい所

以をつく〴〵と感ぜしめられた。あの小說の主題は要するに女性一般の男性一般への嫉妬とそれに基く復讐心とが根柢になつてゐるのだが、その嫉妬なるものゝ本質は何であらうか。作者は、主人公の一人奈津子をして、彼女がその處女時代に叔父だが養父だかにその貞操を奪はれむとしたことが男性への反抗の動機であると意識させてゐるが、同じやうな經驗を持つてゐても、さう云ふ反感を持たない女も澤山ゐるのであるから、さうしてまた一叔父の所業を以て男性一般に反感を擴充すると云ふことも論理の通らぬ話であるから、主人公（を代表としての作者）に於いて、特別に男性一般を嫉視反目すべき理由があつて、それが偶然叔父を契機として勃發したのだと解せざるを得ない。ではその男性一般への反感の源因は何であらうか。それは作者の個人生活を幼兒時代から細かく分析研究しなければ窮極の斷定は下せないが、あの作品中の露骨にして極端なる同性愛的傾向から見て、その根源が察知されないでもない。精神分析學が永年の研究結果に依つて、絕對的確信を以て斷定を下してゐるペニス・ナイドにこれを歸することは極めて至當であると思ふ。

「すべての女の人たちをつよくし、女の人の生活に根ざす不幸をのぞくために働く道を生きていきませうね」と云つて作中二人の女性は互に手を握り合つて感激してゐるのだが、「女の人の生活に根ざす不幸をのぞくために働く道」つてどんな道なんだか、我々には分らない。

結局、これは女性階級イデオロギーの僻み根性の文學だと云はれても仕方がなからう。丁度、所謂プロレタリヤ文學が勞働階級イデオロギーの僻み根性文學であると云はれて仕方がないのと同じに。このやうな僻みとしての階級意識だけは卒業せんければ、文明史的意義と指導性を持つことは出來ない。結局、規模の小さい文學としてやがて所謂プロ文學同樣に自滅して了ふだらう。併しペニス・ナイドの强い作者が多くの男性作家を後へに瞠若たらしめて、一人懸賞當選の榮冠を得たことは、たしかに作者の「復讐」慾を滿足させたに違ひない。お芽出たう。

三、高良富子の答辯振り

これから每號、各新聞雜誌の相談答辯振りを批評して行つて見ようと思ふ。第一に高良富子女史を鉾玉に擧げる。女史は日々新聞のを擔任して居るが、私は同紙を購讀してゐないので、偶然眼にふれた分だけに就いて云ふのだ。四月十八日の同紙に『たつた一人の弟と仲が好すぎる惱み』と題した相談が出て居た。

問――十九歳の乙女です、二人姉弟で今年中學へ上つた弟が一人あります、弟は私に非常に親しんでをりましたが、この頃は大人になりかけてをります、今までのやうに、一緒に寢たりお風呂に入つたりする事は弟のために良くないでせうか、今までずつと一緒になんでもして來たのに、急に別々にすると何んだか變ではないでせうか、私が弟に冷くする事は、兄弟の少い弟は悲しく思ふでせう、弟は男女の事については、何も知りません、どうして離れたら良いかと思ひます、私の態度が冷くなつたのでせうか、弟はこの頃少し淋しさうです、私からあまり離れすぎて何も打ち明けずに何んでもかくしたりすると、私はとても淋しいのです、私は世界中に、弟が一番好きなのです、弟を立派な正しい人間にするには、どうしたらよろしいでせうか、今頃が最も教育の大切な時だと聞きます、そして父母は弟の教育を私にまかせてをります、大人になると、變な疑問を持つと思ひます、そんな時どんな風に教へたらよろしいでせう。(あけみ)

答――あなた方ぐらゐの年の姉弟は仲のよいものです、けれどもどうしても、弟さんを一人前の立派な純潔な青年に仕立てるためにあなたはしつかりして、弟さんを勇氣づけねばなりません、甘やかしては害があります、「あなたは男なんだから、しつかり友達と遊びなさい」といつて、今からお風呂にも先に入れ背中ぐらゐこすつてやつてもいゝから、一緒に入るのはおよしなさい、寢るのも先へねせ勉强時間を別にして「中學生になつたのだから甘つたれると笑はれる」といつて、一緒にねてはいけません、あなたが第一强くならなくてはなりません、あなたが淋しがつたりして弟さんを可愛がるのは、あなたのおもちやにすることで、すまないことです、何か別にあなたの氣をひく手仕事を見つけてあなたも立派な一人前の婦人になり、幸福な結婚へ進むのが一番より姉としての務めであり、弟への教育です。

この答辯ならば、私は大體に於いて滿足する。流石に御自身教育學者であり、夫君に精神病學者を持つ女史だけのことはある。科學的智識のない、時代遲れの道德一點張りの答辯の横行する間にこれは珍しい。

勿論、高良女史の答辯とて煮え切つてはゐない。この程度の答辯で問者が弟に對する態度を一變し得るとは、絕對に信ぜられない。答辯者もそんな確信はなからう。問者は二種の道德に板挾みになつてゐるのだ。弟への近親姦的性慾(分析學の所謂姉弟コムプレクス)が道德の假面(自己欺瞞)を被つて彼女の良心に臨んでゐる他方に、彼女の社會的現實的根據に立つ別の道德が彼女の自我に弟から離れよと命じてゐるのだ。この二種の道德の相克に解決を與へない以上、千萬言の答辯も何の役にも立たない。併し、新聞などの上での答辯でそれを要求することは、要求する方が無理だ。新聞はサロンだ。そこ

では「抑壓」が必然の法則であるから、ウソをついてもいゝ上品なことを云つてゐなくてはならない。如何に本當の事でも下品に亘ることはいけないのだから仕方がない。して見れば一體、何のために紙上相談などに應ずるかと云ふことが問題になる。ないよりは或はマシかも知れない。併し借問す、女史はこのやうな質問に接し、このやうな答辭を與へるだけで滿足してゐられるのであらうか。何かなもつと徹底的な處置を講ずべき方策を考へてはゐられないのであらうか。女史を信じて敢へて問ふ次第だ。(完)

レヴィユの現代性

北垣隆一

「レヴィユは必ず衰へる」と言ふ數年前からの聲にも拘らず、カジノフォリー、ムーランルージュはさて置き、寶塚、松竹兩少女歌劇がいよ〳〵繁榮を誇るのは何うした事だ? それをいさゝか、分析的に考へて見たい。でこの題名もレヴィユの現代性と言ふより、少女歌劇の現代性と言ふべきかもしれない。

レヴィユとは元來、「時評」又は「分列式」等の意で、フランスに始まり、日本へ輸入されたのは昭和初頭と記憶するが、その要素としては、裸女の亂舞、豪華な舞臺裝置、ジャズ(耳へ叩き込む無形式音樂)、ナンセンシカルなギャグと童話的大甘テーマ、舞臺轉換のスピーディなること、初期浮世繪にも似た線の太さ、大まかさ、運動性、特に藥にしたい程の哲學味、文學性もないこと、リズムに乘つてゆらめく脛の白、衣裳の赤、階段の青など、ひたすらに強烈極まる原色と原音と、動きを追ふ感覺中心主義などが數へられる。で、睡眠中の心理退行の爲に夢が全てを繪畫的に表はす事からして、「レヴィユは現代人の夢なり」と解するのも必ずしも不當であるまい。

文明の壓迫に、さいなまれ乍ら、精神分析によつて之を自覺する術も知らず、文學其他に昇華するにも餘りに疲れてゐる中產階級は、遂に視覺第一の現世夢「レヴィユ」に耽溺するといふ、精神的退行を示してゐるのである。(と言つて、筆者は決してレヴィユその物を一概に無意味無價値とするのではない。それが色々の意味で將來の演劇への道を開いてゐる事を充分認めるのだ。) さうした社會的傾向がレヴィユを支持する外に、觀客の六十パーセントを占める處の、若い女の物としてのレヴィ

ユ、特にその同性愛的意味を次に述べたい。

我國の女性解放も漸く實社會に具現せられ、都會の職業戰線上、女性の活躍は相當の物となつて來つゝあると男たちは見るのであるが、彼女達自身の聲を聞けば、それはむしろ女性の社會的劣等を切實に見せつけられる事になると云ふのだ。

「雜用が多くて、月給が安くて、その上何より癪に觸るのは、男の全部が眞底から女を馬鹿にする事です」といふ。そこに、幼時からのペニス・ナイドより發する全ての女の根本的劣等感、男性蔑視が見えないでもない。その具體的な證明は只今これをなす暇はないが。この「男になりたい、ペニスがほしい」といふ慾望、及びその補償としてのナルチスムスが娘達をレヴィユに熱狂させるのだと云へないことはない。少くともその理由の一つと數へなければならない場合が多いのである。

實際、近頃のレヴィユ・ガールの人氣はすばらしい。樂屋へ寄宿舍へと押寄せるファンの山、贈物の洪水、愛人の出張公演の度に西へ東へと、つき纏ふ令孃達の浪。特にこの一月、京都での水ノ江瀧子の人氣は革命的で、凡そ彼女のある所、全て女學生包圍軍又包圍軍。某女學校の數クラスはストライキを決行して彼女を追ひ、彼女の訪問した某家は、その飲殘しの茶を獲得しようとする娘子軍の土足で踏込まれ、また彼女が齒痛の爲に拔いた齒を齒醫者から數十金で讓り受け、七重八重の錦に包んで手箱に祕藏してゐた娘があると云ふ、崇物症患者が出現するに及んで、つゝましい京娘の信用は一擧にして地に墮ち、狼狽した教育界は憤然として松竹に喰つて掛つた、と言ふのである。しかし水ノ江の外、津坂折枝、寶塚の芦原邦子、小夜福子等に何んな個人的魅力があるかは、この場合重大でない。

やつとレヴィユを見るだけの自由を得た娘達は「絢爛たる舞臺で（そこには胎内空想的、その他物凄い象徵物の甚しく多い事よ！）露はの肢體をさも愉快げに振舞はす、女性の集團的示威運動」を如何に願望充足的に見るであらう。裸になりたいと言ふ女の露出慾（これに對應する男の偷視慾）特に日頃の鍛練空からず、隆々彫刻的に發達した筋金入の足――或人は巧にも上等の土佐節にたとへた――それがペニスの代償と見られないだらうか。（現に筆者の如き、それに對して、明かに恐怖乃至畏敬を起さゞるを得ないので、この心理を自己分析して右の斷定を下すのだ。）

況んや、颯爽たるタキシードに英雄的振舞を盡す芦原や水ノ江等男形を、男になり得る偉大な女性として敬愛するのは全く當然である。世間では彼女等を追ふ令孃達

の心理を、一概に異性愛への中間段階として、男性的同性を愛する物と解するが、同性愛はさう簡單な物でない。

由來、女性が幼時に最も強く持つた父への愛が極端に禁斷されると、その反動として全ての男に背き、復讐として同性のみに愛を注ぐといふナルチスムスが同性愛の原形である。（「分析戀愛論」一五〇頁參照）

それ故、同性愛は父、（母）コンプレクスへの禁斷が强い程（娘を父親から遠ざける事に始まる）、所謂男女間の道德がむやみに强調される所に發生するのであつて、レヴィユ・ファンの大部分が所屬する中產階級が現在、不必要に、神經症的にまで道德的であり、若い男女を不自然に離反させるのを教育的とする事が、同性愛やレヴィユ・マニイを發生せしむる根源の一つであると云はねばならぬ。最近、男女間の禁斷が社會的には多少緩和されたに拘らず、既にナルチスムスに固まつてゐる若い女性たちは、異性に愛を注ぐをいさぎよしとせず、ターキー、芦原等の男形同性を熱愛して、「本當の男より、芦原さんの男裝の方がづゝと男らしい。」と叫ぶのであつて、其處に彼女等の父母に對する復讐と妥協——芦原、ターキーが女である點で父に背き、（母との妥協）男裝者である點で母に背く、（父との妥協）——が露出してゐる。一般の家庭でも、「女の子のやる芝居なら、愛を語り、戀を唄つても、教育上差支ない。」と默許する父兄の心理的根據も此處に存する。

又、舞臺ではあらゆる愛嬌を振舞き乍ら、私人としては近づき難い水ノ江等が、昔は愛してくれた事のある現在の競爭者、「恐ろしき母」の代償として特殊の魅力があるのではなからうかと云ふ事も考へ合はされる。例の大阪の富豪、增田某令孃と、西條エリ子との關係にもこれに近いのでなからうか。何故、不感症的にまで冷淡な西條を彼女が追ひ廻はしたかも之によつて說明されるやうに思はれる。

要するに、男形女優への愛は、極端な同性愛の樣に結婚の障害となる程、非妥協的ではないらしいから、レヴィユ・マニイの令孃を持つ嚴父、嚴母諸君は徒にレヴィユ見物を禁斷せず、第一に自らの家庭教育事情を歷史的に分析反省せられむ事を、希望して置く。（完）

『未完成交響曲』の結末に就いて

北垣照雄

映畫『未完成交響曲』を評して、或る人が「最後の場

面にアベ・マリアの祠を出した事は無意味ではないか。」と云ふ意味の事を述べてゐた。

これは一應尤もな主張だが、しかしあの場面がアベ・マリアの歌を賣る目的を持つ事は勿論であらう。しかもあの場面の存在理由は未だ外にもありさうだ。

シューベルトは、得らるべくもない貴族の娘カロリーネを想ふが、彼女はコケトリを盡して彼を惱殺した擧句あつさり彼を裏切つてしまふ。あだかも小さな男の子を氣の向く時にのみ優しく愛する氣儘な母親の樣に。

思ひ出深いハンガリーの野を悄然と步み行く彼の前に現れたのはアベ・マリアの祠である。求めようとして焦れば焦る程、次第に遠ざかり行く母の面影を彼は最後に全人類の母なるマリアに止めようとする。しかし此の不感症的な母は慰めては吳れない。

「優しい母は何所へ行つた。自分は永久に母を求め得ないのだらうか――。」と、恐らくシューベルトは、じつとマリアの像を見て考へつゝ、しかし心の底では泣き笑ひしてゐたやうだ。そこに云ひ知れぬ哀愁が漂ふ。

我々は無意識の中でハタと横手を打つ。そしてシューベルトは母の面影を追ふ人なのだと覺る。つまり質屋の娘も、カロリーネも、アベ・マリアも結局、母の代償なのだ。

からなると歌を賣る以外に、ストーリーの美しい結末として、やはり此の場面が必要になつて來る。（マリアの祠に蠟燭の燈つてゐた事も注目して良い。）

もし、あの場面を意識的に用ひたのならば監督ウィリー・フォルストは偉い。もし無意識的に用ひたにしても――やつぱり偉い。とにかく意圖的に用ゐたに相違なからうから・・・。

一體「天上の音樂」と批評されてゐる『未完成交響曲』（殊に第二樂章）は、卽ち「胎内憧憬の音樂」であり、結局最も痛切なる「母への思慕」だと云ふ事は、私の一寸した思ひ付であるが諸兄の御意見は如何であらうか。

（完）

白衣退治物語

倉橋久雄

今年の五月十五日の『報知』に、この大見出で次の記事が載つてゐた。小見出は『靑年團員が通行人にポンプで墨汁の洗禮』、その傍に、『憤死した老儒者』、とあり、京城特電にて、本文は、

「文化朝鮮」を建設するため迷蒙を打破せんと總督府當局では絶えざる啓導を續けてゐるが、その一つに「白衣退治」がある。これは色服奬勵とも云ふ、朝鮮人は曾て自ら白衣族と稱し、老幼男女ともに四時を通じて白衣を好んで着る。白衣はよごれ易く洗濯に追はれ、從つて地質を損ずること多大で不經濟極まる。各導當局では白衣の弊害を民衆に說き色服奬勵に大わらはとなつてゐるが、永年の慣習でなか／＼改まらない、京城府で先月府內通行者について、色服着用調査を行つたところ、色服着用が七割六分（大人六割八分、子供九割九分）で白衣着用が二割四分（大人三割二分、子供一分）であつた。京城など色服奬勵が最も徹底してゐるところで、他方では白衣の慣習が牢固として根強い、各部落で染色講習會を催し、白衣を染めるのを奬勵したり、また道路で白衣着用の通行人には青年團など墨汁をポンプで浴せたりして、誤つて內地人のお孃さんの晴れ衣を墨汁でめちや／＼にしたといふ話もある。昨年のことであるが、ある田舍で頑固な老儒者が、どうしても白衣を改めないので部落の生活改善會員がくだんの儒者の背中に懲しめに墨で大書したところ、儒者は宇垣總督宛に遺書を殘して憤死したといふ珍事もあつて、問題になつたこともある。民衆も白衣の弊害は認めてゐるのだから改善の實は年月と共にあがりつゝあるが早急にはゆかない。—以上。

アナトオル・フランスは「習慣は屢々法律より力強い」と言つてゐるが、それはその筈だ。習慣は民衆一般の無意識的願望からされたものであり、法律は爲政者は民衆代表の意識的統制であるからだ。本能は理性よりも強いと云ふ言葉に置かへてもよいわけだ。此の場合は單なる習慣上の問題だけではなささうだ。筆者は朝鮮に就いての智識は皆無だが、たとひあつた所で筆者の關與すべき問題でもないが、たゞこの中から「白色」と朝鮮人との關係を就中興味を持つて見るものである。白色は純潔、高貴、死などの諸觀念の象徵であるから、これ等の觀念が、或は本能が、卽ち退行願望が、殊に朝鮮民族に強いと云ふことは出來るかと思ふ。朝鮮出身の分析者の自國民分析を俟つ。その白衣に墨汁を吹掛けると云ふことにはサディズムがあることは云ふまでもない。內地人の令孃の美衣を汚したことにも、性的サディズムがなかつたことは云へない。儒者の憤死には白色に象徵せられてゐる彼のナルチスムスの粉碎を意味したからであらう。いつか日本での白色と關聯しての傳說など調べて見たいと思つてゐる。新聞の性質上、大分本誌の讀者には目にふれてゐないと思ふので、あへて轉載した次第である。

文藝と昇華

―丹羽文雄氏の作品について―

大槻岐美

『作品』七月號の丹羽文雄氏作『達者な役者』を讀んでこれは恐ろしく（遠慮なしに感じたまゝを云ふと）恥さらしな文學だと思つた。氏は特異な素質を持つ新進作家として近頃大分アチコチに筆を執つてゐられるが、私が見たのはこれも入れて二三の作に過ぎない。どれも主人公は作者自身の分身、否殆ど全身を現はしてゐるやうだ、此の作もそのやうである。然し此の作品が此の場合作者の空想の所産であるか否かは問題にしてゐないことを特に斷つて置く。それが空想の所産であつた處にしても、現實生活そのまゝであつたにした處、作者の心理的傾向に違ひはないからである。

「主人公の生活を保障してゐる酒場のマダムである」ところの妻が、他の男と逢引きしてゐる。而もアパートの彼の室の前の室でゝある。目と鼻の先きでさう云ふ事をしてゐる光景を彼は覗き見する。一寸凡人には我慢のならぬ心境を氣持ちが悪くなるまで粘りこく書いてある。先づ變態と云へば變態で、讀む方で作者の强靭な神經に參つて了ふ位である。

然し、これが恥さらしの文學であらうと無からうと、私が興味を持つたのは、この作に見られる徹底したマゾヒズムであり、折々反撥するサディズムである。題材そのものが既にマゾヒスティッシュなものであるが、女に對する主人公の心理の動きたるやマゾヒストの見本と云つてもいゝ位常道を行つてゐる。逢引最中の女を自分の室に連れもどして、彼は自分の肉體的慾望を無理矢理に滿足させる。そこに少しも征服感も勝利感も無く、只あるのは淋しさと汚はしさの感じ丈けである。自分を責め下劣な人間だと厭がる。事毎に自分を評價し、痛め付け、傷口を我と押し開いて痛快を感じる。一時的には女へ對する復讐的なサディズムへ走るが結局はマゾヒズムの下に目を瞑るのである。

由來文學は作家のコムプレクスを發散させるはけ口であり、人間生活にとつてそれが重大な意義を持つてゐる事は私も知つてゐる。共に讀者も自己のコムプレクスを發散させて息抜きをすることが出來るからだ。それ故に私も文學の意義を「此處に價値あり」と認めてゐるのだが問題は作家の態度である。

丹羽氏の此の作に見えるマゾヒズムはあまりにもなまであり、昇華されてゐない。科學ならばこれも結構であらうが、このまゝで文藝は如何であらうか。私が、恥さらしの文學と感じるのはその爲めであらう。多分これは氏の作品中上位の出來では無いかも知れぬ。けれ共、出來不出來はさておいて作者の感情の昇華が無い。如何なる文學にも昇華がなければ、讀む者の感情を高めるものではないのである。さうで無ければ文學としての美（快感）が無いではないか、美が無ければ藝術で無いではないか。同じやうにマゾヒズムの文學であるドストイエフスキーの各作品、殊に、「虐げられし人々」と思ひ較べて見ると（と云つてもこれは無理だが）それこそ大した違ひである。あれもこれもマゾヒズムの文學でありながら。（完）

前號正誤表

頁	行	誤	正
本文一一	一六	るいた	おいた
同　一九	六	鐵嶺	銀嶺
同三二上	二一	野靏	野檪
同三三下	二二	あいても	あつても
同三四下	一六	數に數に	數に
同三八上	一二	死の本能に由來する願望の抑壓と	（同文句重複一方削除）
同五一下	二一	みな高く	ヲは高く
同五二下	一四	八百比久尼	八百比丘尼
同五三下	二	てんぜう	そんぜう
同　同	一三	咄し者	咄しの者
同五四上	一五	織姫	織女
同五五上	一八	雲女	雪女
同五六上	一〇	青白い顚	青白い額
同　下	一一	属々	屢々
同　同	一九	名のこされ	名のらされ
同五七上	一二	ハナのちまた	八十のちまた
同五四上	一九	白鳥の	白鳥の
同六七上	九	エデッポス	エディポス
同七五上	四及七	Kiss	Kiss
同七六上	九	ダブー	タブー
同七八上	一六	實續	實績
同八〇上	一六	宗敎數	宗敎家
同八一下	一〇	があり	であり
同八二下	一〇	被岸	彼岸
同九六下	一九	小杉長幸	小杉長平

資料

陰間に就いて

高水力太郎

わが國の男色の歴史を尋ねれば相當古いものであらうが、（現に萬葉集には大伴家持が美少年藤原朝臣久須麿に與へた歌が澤山に載つてゐる。）德川時代の貞享以前から元祿、享保の頃が最も盛んであつたのではなからうか。その時代には男娼さへ行はれた。尤も現代でも一部には存在してゐるといふが、德川時代には匹敵すべくもあるまい。

當時、男娼の事を陰間（かげま）、若衆（わかしゆ）、野郎、夜郎、冶郎、或はまた戀童、孌童（れんどう）とも云つたらしい。さうしてこの道のことを若道又は衆道と云つたらしい。何故に「陰間」と呼んだのであらうか。こんなことはどんな辭書を索いたつて書いてはない。何となれば、從來の言語學や心理學では解決のつかない問題だからだ。ところで、間は女××の象徵となる事は、從來も屢々本誌上で論證せられて來た。吉原で遊女屋のことを、「貸座敷」又は「貸席」と云つたのは、この語そのものゝ實に巧妙な象徵的表現である。して見れば、女娼は云はゞ前（陽）の間であり、男娼は後（陰）の間であると云ふわけになつて來る。但し、「後室」だの「後家」だのは、「後」備に編入せられたる家又は室であるとの意であらう。話が脇道にそれたが、さて男娼とは男子にして藝者又は女郎と全く同じ仕事又は役目を勤めたものである。三味線を彈いたり、舞ひを舞つたりした。髮は前髮をとり、衣服は伊達模樣の振袖を着てゐる。時々は上着だけ男らしい唐木綿の袷だが、下には絹の小袖を着てゐるのが、非常になまめかしい。そのくせ優美な刀などさしてゐる。その前髮が女らし過ぎると云ふので、當局でそこを男のやうに剃らせたところが、それでは曲がないと云ふので、紫や赤の美しい、所謂「野郎頭巾」を被るやうになつたので、却つて愈々優美になつたと云ふことである。何でも抑壓の結果は、大抵の場合はかうなるのである。

男娼を最も多く相手にした者は、武家であつたやうだが、僧侶もなかなか相當なものであつたらしい。彼等には女人が禁制になつてゐたから、自然こちらにはけ口を求めたのであらう。併し或は時代的に女人禁制又は嫌惡

の風潮があつたかも知れない。井原西鶴の『男色大鑑』には「我れ生を享けてその時今の智慧あらば、女の乳は吸むまじ。摺粉あま物にて人間育ちたる例數多なり」とあるのは、西鶴個人のコムプレクスに因るのか、或は時代的抑壓の雰圍氣に因るのか、何れにもせよ西鶴の同性愛讃美は熱烈を極めてゐる。西鶴についても當代社會一般の風潮についてもあまりよく知らない私にとつては何とも判斷のしようがない。が、誰かも少し當代の事情に精通した人が社會分析してくれるといゝと思ふ。とにかく當時に於いて男色が上下各階級の間に流行してゐたことは事實だ。大名は小姓をおき、それに倣つて町人も小姓をおいたものがあつたらしく、承應元年四月に、これを禁止する町觸れが發布せられてゐる。併し武家に對しては大目に見てあつたらしい。

　寶暦から安永、文明の時代には、江戸市内に於ける男娼の數は二百三十餘人で、その巣窟は江戸に於いては、木挽町、湯島天神、麴町天神、塗師町、神田花房町、芝神明その他七ヶ所であつたと云ふ。西鶴の『置土産』の中の男娼は實在人物ではなかつたさうだが、彼等專門の男娼も俳優兼業者の如く、何かしら藝を持たないでは、酒間の興を助けることが出來なかつたものと思はれる。幸田露伴氏校訂の『日本文學叢書』中の西鶴作に、次のやうに男娼の名が擧げてある。

一、花山藤之助（年十四）色白にして目付よく、嘉太夫節語り申候。

一、岩瀧猪三郎（年十六）踊上手投節謡ひ申候、風儀そのまゝ、女のやうに柔にうまれつき申候。

一、夢川大六（年十五）酒振幾人様の御相手にも成申候。文作の三味線能くひき申候、旅子間では衣裳天晴着き申候。

一、松風琴之丞（年十七）影人形よく使ひ申候、此外口から水を吹出し、壁に文字をうつし申候。品玉、鹽、長次郎まさりに候。

一、深草勘九郎（年十七）物いひ此以前の鈴木平八生寫に候、何も藝はなくとも×達者に候。

一、雪山松之助（年十九）野良なり、座に付きたる所本子に取違へる程に候。

　男娼は天保十三年の風俗改革によつてその跡を絶つたが、然し女形役者なるものがあつて、これに代つたゐた。

　幕末から明治の初期の女形澤村田之助は、上野明王院の住職の寵を受け、莫大な金を搾り取り、後にその住職が寺を追はれて田之助の家へ尋ねて來た時、これを足蹴

にしたといふ話も殘つてゐるさうである。（守田氏『同性愛の研究』）田之助の行爲を輕薄とばかりは云へまい。金のために身を許してゐた彼に於いて、住職に對する如何なる反感が抑壓されてゐたか分らない。藝者が金のある内はチヤラ〳〵し、金がなくなれば切れたがると云つて批難するけれども、そんな事はいや〳〵乍ら金で身を賣つてゐた藝者としては當然である。正妻にだつて、さう云ふ心理はないことはない。男にだつてないことはない。藝者でも、本當に惚れゝば意氣と張りとを示す。道德なんて實に形式的で得手勝手なものだ。少くとも得手勝手なことに利用されることが屡々だ。

藝者の男裝や男名が喜ばれるのは、男性愛的傾向が顧客にあるためであらう。女にして男娼たらんとするものだらう。女裝（異性裝）では禁制せられたコムプレクス（例へば母親への定着に伴ふ禁制的感情）に觸れるが、男裝してゐればその禁制には觸れないで、ひそかに男性愛を滿喫することが出來ると云ふ機制によるのだらう。

（右は高橋氏稿と重複する點もあるが、また相補ふ點もあると思つて、一時は廢棄しようかとも思つたが、特に寄稿することにした。）

自己分析記錄鈔

奥本島田

現象の裏面を探らうとすることは、自分の記憶してゐる範圍内に於いて、幼兒時代に時計を叮寧に分解したことにその始めがある。（本誌第二卷第三號「時計をこはす」に書いておいた通り。）世の中の現象は凡て自分には始めからわかつてはゐない、さぐらなければならないものだ。辭典を求めたり、動物を解剖したり、生理學を研究したり、時々氣付いたことを調べやうとする行爲は、幼兒時代に於ける時計とこの宇宙とが同一化されてゐるのだらう。時計の動くのも知りたかつたであらう。それよりも動くものの奥を追うてたどつて行きたかつたのだらう。對外的の現象をあやつることを始めて意識したのは、この時計分解であつたであらう。宇宙の現象を解剖的に知りたいと願望的行爲をなしたのは、時計を分解した當時から始められて、所謂反復的の行動となつて日常くりかへされてゐるのだらう。まだそれははつきりしないが、性格となつてゐるのだらう。

辭册は澤山購入してゐたが、今思ひ出されるのは「大言海」、「醫學大辭典」、「家庭百科事彙」等である。「國民百科辭典」が出る様になつてから「大言海」と「醫學大辭典」は手放してしまつた。宇宙全體がくわしくわかる大辭典がほしい。それは宇宙と辭典の包括してゐることとは同一化されてゐる。現象といふ點では小さく時計との同一化である。

何故に時計から宇宙現象へ發展して行つたか？ それは恐らくは、時計の動くのをなぶることは生後對他的の現象をなぶる興味の最初のものであつたにちがひない。時計の動く現象から次に他のものが動く現象を次第に知覺して行つた。それと同時に時計をなぶつた様な行爲を反復したにちがひない。又、動くといふ現象は時計の動くのとコムプレクスされてゐるのであらう。

相當金錢に不自由でも、又他の本は求めなくとも、辭典の買入は止めたことはなかつた。醫學大辭典の如きは四年餘りかかつた。今の百科辭典も二年程かかるのだ。

精神分析を研究してゐることも時計分解の反復であらうことは以前に述べたが、今や生物分析の方に心は向つてゐる。本誌第二卷第七號と八號とに出たフェレンチーの生物分析の論文はむづかしかつた。生物學の參考書をもつて幾回か讀みかへした。（九・一〇・二五）

×

本誌第二卷第八號の分析語彙欄に偸視慾の解釋がしてあつた。私はこのことに就いては他の處で見たのであつたが、今この記事によつて自分の性格がわかつたのだ！分析技法の難點の一つ、分析解釋を被分析者に敎へるに如何なる時を選ぶかはコツであるとフロイド全集にあつたが、自己分析で自分自身に解釋を受ける時は何時だらうかと私はこれまでにひそかに考へてゐた。併し、それは今やうやくわかつた。フロイド全集を讀んでゐることと自己の感想なり聯想なり夢等を記錄しつつあるうちに自ら其の時があるのだ、と。

さて右に擧げておいた感想（十月二十五日）に就いて分析的解釋を下さう。

先づ全體を通じて見ると、物を知らうとすることを反復してゐることがわかる。又、物をなぶりたいといふことも表はれてゐる。物を知りたいといふ願望はなぶりたいといふ願望から出發してゐると云ふのが、正しい觀察らしい。それは最幼兒期の行爲だから。動く物をなぶつて破壞することはサディズムの行爲である。實際、私にはサディズム的の行爲がこれまでにあつた。感想に述べてゐる、生物分析の方に向つてゐるといふのは、サディズム的のものである。少年時代に鼠やかへるを殺して解

剖したことなどは、サディズム的行爲であるが、學術的研究の端緒でもある。又、サディズムに對するマソヒズムの行爲や心理も多分に保有してゐることを氣附いてゐるが、私は今あまり思ひ出せない。眞面目にやるといふ、卽ち服從的心理がマゾヒズム的のものであると思ふ。惡く言へば糞眞面目、馬鹿正直である方だ。これが學術研究となると理論的傾向となつて表はれるのだらうか？　私のサディズムは大きな智識慾に昇華されてゐることはあまりにも明らかにわかる。なぜさうなつたかは私にはわからない。

マゾヒスムスの昇華としては技術を美しくしようとすることとなつてゐることだと思つてゐる。私は美しくして人に見てもらひたいといふ氣分はたしかにある。他人の技術のまづいのを見ては、なぜもつと美くしくまじめになさないのかなアと歎聲をもらす時がある。兎に角、私は以上の解釋をすることによつてサディズムとマゾヒスムスの性格があることを意識した。

×

フロイド全集でマゾヒズムス論を始めて讀んだ時はどうもむづかしいと感じた。が、今又それを讀んで見るとわかり易い。書いてあることが合點がいく。かういふ風に自己分析をなしつつ再び讀んで行かなければほんとうにわかりにくいし、又其の理論は受入れにくい。夢の自己分析をする様になつてから、夢の註釋は次第にわかる樣になつたのも同樣であつた。

×

昇華とは、他人から見れば本人の性格となつてゐるもので、精神分析的に探究すれば性的リビドーが性目的を達し得られない外的のものに向つて働らく場合になされるものにして、現實により多く適應する傾向であるが、そこには多く罪障感がつきまとうてゐる。

性格的傾向の内でも現實社會に受入れられにくいものは本人にとつて苦痛である。それは抑壓のために又他より抑壓されるために。如何にして性格となるか。卽ち、如何なる發達史をたどつて性格となり得るか。それは私にははつきりわからない。だが、次の樣な考へもある。

幼兒時代から他のものに對する關係のうちで、言語未發達のために意識されないで存續してゐるものがある。其後自己が外的事情にさらされてゐる間は常にその無意識は意識されずして外的の事物に關渉してゐるものである。これが知覺されて言語によつて表現されると（言語と結合されると）性格の傾向が意識されるやうになる。

初めて心的外傷を受けた當時には意識されずして其れ以後存續してゐる定着は、其の外傷をはじめて受けた當

時までかへつて（追憶的に、そこに伴つてゐた感情をも諸共に）其當時の外傷を受けた無意識狀態を意識すれば「神經症」としての病的苦痛は治癒され、自己が社會的に生存する爲に不適當な性格は改造されて適當な昇華の道をたどるのだ。而かしかういふ恢復力のない時、又は力のなくなつてゐる人に於いては不可能であるのはいふまでもない。

×

數學も少しわかりかけると問題を自己で解いてから解法を見る。又、定理なども自分で證明を考へて於いてから次に書いてあることを見る。それが誤つてゐるゐないは別問題として、誤つてゐない場合はうれしい感じがする。先哲の說についても、自己が今述べて來たのと同じことが云へる、卽ち、同一化としての願望成就の喜びであることはいふまでもない。

私は今、精神分析の學習にこの方法を採つてゐることに氣附くのである。かういふ感想を述べるやうになつた以前には、フロイド全集をも素讀的に讀んでゐたのだ。近頃はかういふ感想を持ちつつ、それ〴〵の項に關する處を硏究するのである。これは數學や物理學を學習する態度と同一である。時々は數學的な式を書いて學習してゐるのも、その表れであつたのだ。

今後はどういふ方法で學習するか私には今わからないが、精神分析學の記事は自分の夢や性格を少しでもよいから分析してゐないと、理解し得られないことははつきりとわかり出して來た。フロイドの療法論にある「自己を分析せなければ完全なる分析者としての資格はない」といふ言葉の意味は、恐らく自己分析をした人でなければ正しく受入れられないことであらう。（完）

同性愛關係文獻鈔

▼『同性愛の硏究』守田有秋著、昭和六年十二月、人生創造社發行（本卷末廣告參照。）

▼『近代詩人と同性愛』守田有秋稿。昭和六年九月十八日以降五日間、都新聞文藝欄に連載。內には本誌に宮田齊氏の詳しく紹介してゐる『淋しさの泉』に就いても簡略ながら言及してある。

▼『同性愛（女性の異常心理）』小酒井不木稿。春陽堂『新小說』大正十五年三月號所載。

▼『婦人同性愛の心理的起源』高水力太郎稿、本誌昭和九年二月號所載。ドイチ女史の硏究の紹介。

講座

同性愛の心理に就いて

高水力太郎

一、同性愛に對する道徳的批判の可否

昨年の夏頃、東京驛附近の喫茶店八重洲園の女給さん達の間に三角關係的同性愛の問題が起き、死ぬの生きるのゝ騒ぎが持上がり、隨分世間の耳目を聳動したことであつたが、同性愛と云ふものは、決してさう特殊な人々の間に起る特殊な事柄ではなく、極めて普遍的現象であつて、何人もある意味では同性愛者である。少くとも或る時期には同性愛者となるものである。

他方また、同性愛は女性ばかりに起るものではなく、男性の間にも起き得るものである。前記八重洲園女給問題に關して某婦人雜誌にその批判を寄せてゐた某教育家は、同性愛は男子間には殆どないやうなことを云つてゐましたが、どういたしまして、男子とてもその道にかけては相當なものである。たゞ女性の方に同性愛者が多いと云ふことは云へよう。それには理由のあることである。そしてその理由に就いては大槻氏が論じてゐられる。

×

性交は、生物學的に云ふと、卵子と精子との結合に依り子孫を造る（性細胞の永久存在を期する）ことを目的とするもので、その目的に直接に添はない行動は變質的（變態的）だとせられる。同性間の結合は、それが男性間のものでも、女性間のものでも、當然この目的に添はない行動であるから、生物學的に云へば、確に變質的行動であるが、併し心理學的に云へば、それは必ずしも常に變質的であるとは云へない。勿論、變態的である場合もあるが…。現に、同性愛者の中には精神的には不健全と云ふことの出來ない（精神的機能及び能力に於いて凡人に超ゆる）優秀な人物が却々多勢ゐるからである。イタリー文藝復興期の大天才ミケルアンヂェロやレオナルド・ダ・ギンチ、ドイツの哲學者ニイチェ、英國の文豪オスカア・ワイルド等は、何れも史上有名な同性愛者である。

×

近世に於いては同性愛を概して不徳や罪惡と見倣して來たが、西洋古代の或るところでは放任してあつたやう

である。日本でも九州地方の如き一昔前までは女色を卑み、男色を一層高等な愛情と見做してゐたやうである。ギリシア古代には、有名な女詩人サフォーの詩や哲學者プラトーンの有名な對話篇『饗宴』の如き、同性愛讃美の文獻が多々ある。『饗宴』の中には、若きアルキビアデスがソクラテースを「誘惑」しようと試みた話が、極めて卒直に語られてあるのだ。テラと云ふ聖島には、エラストスとクライノスとの二青年の「結婚」の碑文が殘つてゐる。當時に於いてはまた、純粹に性的であるところの同性愛と、性的にして同時に知的であるところの同性愛との區別さへも確立せられてあつた。男同志の「結婚」でその愛情が末永く續き、相互に貞節を盡した人々の名前も多く記錄されてゐる。それ等の人々の間には所謂鷄姦も行はれたらしく、また現にギリシアの神々が、殊に神々の御大であるところのツォイス神が、それを行つてをる。

男はこのやうに同性愛を比較的自由に享受することが許されてゐたのに、婦人の方は知的開發も同性愛も、自由に與へられてゐなかつた。ギリシヤに於いては婦人の社會的地位が低かつたゝめであらう。人間に於いてさうであつたばかりでなく、女神の間に於いてもさうで、男神等は自由に同性愛を享受したのに、女神等の間にはその例がないやうである。神が人間を創つたのではなく、人間が神が創つたのであることは、これに依つても明かだと思ふ。神を人間生活の天上への反映に過ぎない。紀元二世紀頃に生きてゐたギリシアの諷刺詩人ルーシァンの文に依ると、當時の人々が女の同性愛を嫌惡してゐたことは、丁度現代の人々が一般に男性間の同性愛を一種いやらしいものとして解してゐるのと同じやうであつたことが分る。

新聞の相談欄にも時々同性愛に關する問題が出てゐるが、それに對する答辯者の解答は、多くはやはりこの一般的の考へ方を出てゐない。八月三十日の朝日新聞の同欄に『同性愛に生きる夫』と題して「夫は私に愛情がなく、同性の愛人のみを愛します。そしてその愛人のためなら死も恐れないと申し、君と別れるなら僕は自殺するからと、判斷に苦しむやうなことを」云つてゐる夫に就いての苦悶を打明けてゐた廿四歳の人妻があつた。それに對する山田わか女史の答辯は「同じ良からぬことをしてゐても、それが惡いことだと知つてゐる、――つまり良心の閃きが幾分でもあるなら、その弱い良心にそばから力を添へて、悔悟する日の一日も早く來るやうに努力する張合ひがあります。しかしお手紙の上だけで判斷した處では、あなたの良人にはその良心の閃きがありませ

ん。ですからその愛人との熱がさめても、また外に變なことを仕出かす人であるやうです。」と云ふ調子で、全く道德一點張りの見方である。併し、同性愛と云ふものを道德論のみでかたづけてよいだらうか。云はゞ一種の病氣みたやうなもので、良いだの惡いだのと云つたところで、本人としては仕方がないことである。病院へ行つて「貴方はどうして肺病になつたか、家族の者に迷惑ぢやないか」と叱りつけて見たところで、本人だとて好きこのんで病氣になつてゐるわけではあるまい。病氣にたとへるのが惡ければ、趣味みたやうなものだと云つてもよい。お芋が好きだ、魚が嫌いだからつて、道德論をふりまはして見ても始まらぬことだ。と云つたからとて、私は同性愛者ではないし、同性愛は趣味としては好まないが、同性愛者の心持の已むを得ないことだけはよく理解してゐるつもりだ。また夫の同性愛に困りぬいてゐる妻君の心持ちにも十分同情は持つ。たゞそれを道德的に批難するのが見當違ひであることをよく承知してゐるだけだ。

併し日本などはまだ〱穩かなので、英國などはもつと〱極端のやうだ。英國十九世紀の小說家オスカー・ワイルドが同性愛事件のために下獄した事情の如きは、よくその極端さを示してゐると思ふ。ワイルドの下獄の契機となつたのはアルフレッド・ダグラスと云ふ美少年であつたが、その他にも二三その相手があつた。ワイルドが同性愛者であつたことは事實であるが、そのために二年間の禁錮に處せられ、社會的に葬られて了つたと云ふことは如何にも酷であり極端であつたと申さねばならぬ。ハリスと云ふ人も云つてゐる通り、一體「英國の法廷は、普通平凡な商賈上のことで訴訟を提出する、平凡な人間に對しては至極結構な法廷であるが、藝術上の問題や藝術家の道德問題などに就いては、全然不適當な法廷である。さう云ふ問題について少しでも傾聽すべき意見を持つてゐる判事は一人もなく、陪審判事に至つては判事よりも思想が遙かに後れてゐる。藝術や道德の問題については、この點で英國法廷は世界文明國中の最惡の法廷である。」

オースタリの學者エルンスト・ベンツも、このハリスの意見に讃し、その證據としてワイルド事件を擧げて批評を下して曰く。「此時の判事や陪審判事がすべて公平な判斷を下すには餘りに偏見に充ちてをり、且つワイルドのやうな文學者に對する反感を抱いてゐたことは、さまざまな場合におのづから現れてゐる。クンスベリイ侯爵(美少年ダグラスの父)に好都合な判決が下された瞬間、法廷は侯を祝して騒ぎ立てた時、從來の習慣に依ると、

判事はそれを鎭壓すべきにかゝはらず、見て見ぬ振りをしてゐたのもその一つである。從來は社會的に知名な人や重要な地位にある人が偶々破廉恥罪を侵した場合には、社會風敎への影響を慮つて官憲が故意に彼等に外國に逃げて行くやうに仕向けてゐたのであるが、ワイルドの場合は從來の習慣を破り、直ちに逮捕するといふ擧に出たこともその一つである。ワイルドのやうな場合は寧ろ申告罪であるべき筈であり、被害者の告訴を待つて改めて拘引狀が發せらるべきであるのを、その手續きを取らず、直ちに拘引狀を發したのもその一つである。ボオ街の違警罪裁判所での第一の審問後、官憲が當然ワイルドに許すべき保釋を拒否したのもその一つである。事件に關係のない「文學上の證據調べ」をしたのもその一つである。更に又最後の審判に當つて、ワイルド側の辯護士がワイルドの判決を他の關係上、少くもワイルドに少年を紹介したテエラアのそれが確立するまで待つやうにとの歎願を却下して、二人に同時に同罪の判決を下したこともその一つである。このことに就いては如何なる辯解があるにしても、テエラアを先に罪にすることは、この男に誘惑されたといふ先入見を陪審判事等が抱くことに依つて、ワイルドの罪を輕くする恐れがあると當局が考へたことは疑ふべくもない。以上の外に、この審判において最も不當なことは、判決そのものが酷に失してゐることである。判決は法律の許す最大限度の刑罰である。判事は宣告を宣する時、ワイルドを以て「社會に彌漫しつゝある最も醜惡な墮落の中心人物であることは疑ふ餘地がない」としてゐるが、證人の證據調べを見ても、これに就いて何等の根據もなく、從つてワイルドがこれについて責任を負ふべき何等の理由もない。つまりは判事のワイルドに對する偏見と反感とが如上の判決を下さしめたのである。」（本間久雄氏譯）

裁判は事實を最も客觀的に見、然る後、法に照して處斷すべきであるのに、「反感と偏見」とを以て判決すると云ふは、法律家として最も恥ずべき態度である。法律家ばかりでなく、我々一般人もまた人間の性心理を最も客觀的に科學的に見ることを學ばなければならない。道德的判斷は然る後に下されなければならないのだ。

二、同性愛とはどんなものか

同性愛と云へばそれだけで非常に判然してゐるやうに人々は思ふであらうが、同性愛と異性愛とはどう違ふかと云つて訊かれると、常識だけでは一寸說明がつきかねるのである。何故ならば、我々の性そのものが頗るはつきりしないものだからである。科學的に調べて見ると、

人間と云ふものは、肉體的にも精神的にも、男女兩性具有的なものであるからである。ヒルシュフェルドと云ふ性慾學者は、母胎內の胎兒は懷妊後八週間は男女何れとも性が判然定まらないと云つて、これを「性的中間段階」と名付けてゐるが、それ以後とても全然別物とはならない。現に女子の陰核は男子の陰莖に相當するもので云はゞそれの發達の中途で止まつたものであることは如何なる學者もこれを認めざるを得ない。

人間はどうせ男女の共同製作品であると共に、また將來、男女何れをも製作し得べき可能性の貯藏體であるから、元來兩性具有的のものでなければならないわけだ。常識的に見ても、如何なる人も或る點では男性的であるが、また別の點では女性的なところがあるものである。その兩性具有的な人間が別の兩性具有者を愛するのですから、幸にして形の上で異性を愛してゐる人でも、その異性に於ける同性的な點を愛してゐると云ふ事もあり得るわけであると共に、また同性に就いてその異性的な點を愛してゐると云ふこともあり得る筈である。これは何人にも容易に首肯出來ることゝ思ふ。その意味に於いて如何なる同性愛も(形の上ではともかく實質的には)異性愛であると云つて差支へない。現に、如何なる所謂同性愛的關係を見ても、必ず、その一方が男の役目を果し、他方が女の役割を演じてゐるものであることが分る。それが極端な場合(例へばヒステリー)になると、一人で男女二役を演ずることがある。ヒステリー患者はその發作中に於いて、一方の手は男として自分の着物を引剝がさうとし、他方の手は女としてその着物を固く抑へようとしてゐる如きである。

實例を擧げてお話ししよう。昭和七年七月十日の『週間朝日』に『男藝者・女藝者。同性愛の果の心中』と云ふ題で次のやうな話が出てゐた。

「……東九州の大分縣佐伯町に、四月二十二日の朝、なまめかしい藝者同性心中の噂が傳へられた。しかも心中の主が、五十人あまりある佐伯檢藝者の組合長をしてゐる男まさりの房次と、一人は大分の檢番で美人との噂高い人丸であると聞いて、かりそめにも折花攀柳の巷に足を踏み入れるほどの者は、その極端な對照に齊しく呆氣にとられたのであつた。あの、男を思はせるやうな怒り肩の、聲といつても底力のあるバスで、相手に一種の壓迫を感ぜしめる分別顏の房次が、誰か若い妓たちの身投げでも見つけて引止めたとでも云ふのなら受取れるが、變態的戀愛の極地を辿つて若い美しい藝妓をかき抱きながら甘つたるい戀に死んだとは……」「……二人の年齡

がひどくかけ離れてゐて、友達同志の同情から生れた愛ではなく、恰も男と女との關係に見るやうな硬軟兩性の結合とでもいふべき、極端と極端との性質が仲よくなつた點である。」

以上の引用を見たゞけでも、この同性愛に於いて如何に房次が男役であり、人丸が女役であるかゞ、呶々説明を弄するまでもないであらう。同誌には二人の寫眞も載つてゐたが、寫眞を見ても如何にも男性的な女と女らしい女とである。

始めに言及した八重洲園の女給さんたちの間の三角關係の同性愛などもやはりそれで、あの内佐久間秀佳と云ふのが純粋の男役で、彼女は頭髮、服裝、行動など總て男性的である。嘗て新橋で藝者を買つたことがあるとか未だ曾て男を好きと思つたことはなく、自分より年下の女の子を見ると、何かいたづらをして見たくなるなどと云つてゐる。

男子間の同性愛とても同樣で、例へばあのオスカア・ワイルドの場合の如きは、勿論ワイルドが男役で、ダグラスが女役である。（完）

精神分析語彙（十八）

一、ヒステリー——以前にはヒステリーは婦人にのみ固有の病氣で、婦人の内部性殖器の異常に起因すると信ぜられ、その原名ヒステリーは子宮の義のギリシア語から由來してゐる。これに「臟躁」なる譯語をあてたのは吳秀三博士であるが、これは「金匱要略」に用ゐてあるのに從つたのであると云ふことである。その本態を簡單に定義することは困難であるが精神分析よりの定義に就いて前號本欄末にフロイドの語を擧げておいたが、こゝになほメービウス氏の説を擧げておくならば、「本病は生來性變質性精神異常にして、所謂ヒステリー性症候なるものは、凡てその原因を或る觀念又は精神作用（患者は之を自覺することなしと雖も）に歸せしむることを得るものなり。即ち、本病者は外界又は自己内部よりの刺戟（暗示）に對し甚だしく影響せられ易き素質を爲するものなりとすべし」（杉田直樹氏に依る）と。

一、ヒステリー症候——は本能感情的に強調されてゐるところの、而も他面、意識化し得る心的活動に依つて息ぬきされる道が特殊の心的過程（抑壓）に依つて塞がれてゐるところの、一聯の心的過程、願望並びに慾望などの代償——云はゞ被轉嫁物——であるとの假定の下に、精神分析はこれ等徴候を取除くのである。このやうに無意識狀態に拘束されてゐる思想形態は、それ〳〵の感情價値に應じた表現を、はけ口を求め

てゐる。さらしてそのやうなはけ口を、ヒステリーの場合に於いては肉體現象への轉嫁の過程――つまりヒステリー徴候――となつて見出すのである。で、もし適當の技術の力を借りて、方法よろしきを得たる還元を徴候に加へ、これを意識的な、感動の纒綿せる思想となすならば、我々はこれ等の、以前には無意識的形態であつたもの丶本性と由來とを最も精細に知ることが出來るのである。（フロイド「性說三論文」）

一、ヒステリー球狀形 Hysterischer Globus――ヒステリー患者に於いて球狀形のものが食道より喉頭につき上げ來るを言ふ。フロイドの研究によれば、か丶る症候を示す患者の多くは、幼時に盛んに指しやぶりをした者等であつた。

一、ヒステリー弓――背反弓に同じ。同條參照。

一、ヒステリー帶域――「しやぶりの場合と全く同樣に、身體の他の如何なる部分も性器としての亢奮を與へられることがあり得るし、また性的帶域となり得るのである。性的帶域とヒステリー帶域とは同一物質を示してゐる。更に考へを集め觀察を續けてみる内に、私は性的の性質を身體のあらゆる部分に、また内臟の器官に歸するやうになつた。」（フロイド「性說三論文」）

一、ヒポコンドリー Hypochondrie――語原的には「軟骨下」を意味す。ドイツ語にては Schwermut（氣重）、又は Krankheitsfurcht（恐病）と譯し、吳秀三氏は「心氣症」と譯してゐる。「ヒポコンドリーは身體的の病氣と同じやうに肉體上の苦痛を示し、リビドー配分の效果に於いては、これと全く一致してゐる。ヒポコンドリー患者は、興味をもリビドーをも――殊に後者を――外界對家から引揚げて、それを自分の目下注意を拂つてゐる機關へと集注する。ヒポコンドリーと身體的病氣との區別は、今や明かとなつた。後者に於いては苦痛の感覺が成程と肯かせる變化によつて基礎づけられてゐるが、前者に於いてはそれがない。併しヒポコンドリーも出鱈目ではない、身體的變化もそこに缺けてゐるわけではないと決然我々が云つたとしても、神經症的現象に對する我々のこれまでの考へと全然一致するであらう。（フロイド「ナルチスムス概論」）

一、晝間の殘物――夢の思想の内で理解せられ、承知せられるもの、前日の覺醒生活の殘物である。

一、美――「肉體を被ひ隱すことは文化と共に進步して、愈々性的好奇心を誘發し、隱れたる部分を引剝がすことに依つて性的對象を全的に見ようと努めるやうになつた。併しこの好奇心は、人間がその興味を性器から離して肉體全體に移すことが出來るやうになれば、美術的なものに誘導（昇華）せられるのだ。「美」の概念が性的亢奮の土壤に根ざすものあり、元來性的魅惑を意味したことは、私には疑ふ餘地がないやうに思はれる。それを眺めることが最も強く性的亢奮を呼覺ますところの性器それ自身は、元來決して「美しい」と認められないと云ふことは、右に述べたこと丶關係がある。」（フロイド「性說」）「美學は美の感受せらるべき條件を研究するが、美の本性並びに由來に就いては何らの說明を下すことが

出來ない。それの無駄骨折りであることは、朗々たる無内容の言葉の蔭に匿されてゐる。遺憾ながら精神分析にも美は最も苦手で殆ど何事をも語ることが出來ない。まづ間違ひのないことは、美が性的感覺の分野から出て來たらしいことだ。美の愛は目的を禁斷されてゐる感情の定全なる實例だ。「美」と「魅惑」とは、性的對象の第一の特性である。注意すべことは、性器はそれを眺めることに依つて常に亢奮を得るのに、それ自體に美とは殆ど考へられてゐないことだ。それに反して、美の特質は何らかの第二次的の性的特質に附隨するものゝ如くである。（フロイド「文明と不滿」）

一、病氣の利得 Krankheitsgewinn ——總て神經症的症候の存在し得るのは、それが妥協となつて現れてゐるがためであると云ふことを、精神分析は夙に認識してゐた。それ故に、抑壓をなすところの自我の要求を、症狀は何らかの程度に就いて容認したければはならないのだ。それに優先權を與へ、有效に利用して貰はなければならないのだ。でなければ、症候も、本來的に發生して拒否せられた本能亢奮それ自身と同じ運命に陷らなければならないのだ。病氣の利得と云ふ術語はかゝる方法を云ひ表はしたものなのだ。（フロイド「精神分析運動史」）

——未完——

（九七頁末より續く。）

と十九日の朝日新聞に掲げてあつたがこゝに擧げてある諸條が原因とはをかしくないか。生活樣式が洋風化したらどうして少女が男性化するのか。洋風は男性的、和風は女性的と考へてゐる人々の心理にこそコムプレクスがありさうだ。それではそれほど女性的であつた和風生活樣式時代にどうして日本男子は女性化しなかつたのかと尋ねられたら返答が出來まい。座談會にどんなお歷々が出席したのか知らないが、誠に以て驚き果てたる非常識でないか。レビューの影響と云ふがぢやあレビューを廢止したら男性化はなくなると云ふのか。試みにやつて見よ。併しそんなことは不可能だらう。何となればレビューを榮えしむるその同じ原因が別方面に働いて少女の男性化を來たさしめてゐるのだからだ。社會分析しなくては駄目だ。（完）

アブフウブ

同性愛の昇華

不老泉院主人

ドイツの温泉地ウヰスバーデンに或る同性愛者がゐた。彼は或る青年と腕を組んで夜中森林の中を散歩するだけを以て性の滿足を感じた。斯くの如きは一種の「詩的同性愛」と稱すべきものだと、或る性慾學者は云つてゐる。「詩的」には相違ないが、かゝる名稱は常識的であつて學術的でない。凡そ愛慾にして「詩的」ならざるものありや。それが直接性目的から離れ（超越し昇華し）てゐればゐるほど詩的であるが、それが直接の目的を達するやうになればなるほど詩的ではなくなる。その故に、一切の詩美を性的なものに還元する精神分析の考へ方は、そこに感情の干渉がない以上は當然の事となつて來るのだ。こゝに「詩的」と性慾學者が常識的に呼んでゐるものを、分析學者は「昇華せられたる」と呼ぶのである。

甘さと辛さ

甘いものは女や子供に好まれ、男子や年長者には概して云へば（嫌はれないまでも）好まれないものであることは誰しも知る通りである。その反對に、辛いものや刺戟の強いものは、大人や男子に好まれて女子や子供には、概して好まれないものである。この味覺的事實はその心理に於いて性的事實と關係のあることは何としても否定出來ない。

甘い文學、甘い言葉、甘い聲などは、婦人、子供等に適當したものであり、辛い、苦い、強い言葉、文學、思想などは男子や成人に適當する。それ故に、大人になつても幼兒的な人間はその味覺に於いてもその思想に於いても共に、甘黨として殘留してゐると云ふことは動かせない事實である。

言葉の共通は觀念の共通を新味し、觀念の共通は感覺の共通を意味し、感覺の共通はその本能的感動に於いて同一根抵に發することを意味してゐる。言葉の無意識表現力は、誠にあらたかなものと云はねばならない。

では、男子にして菓子好きの男は、自分を女子と見立てゝの同性愛者であるかと問はれるであらう。左樣、まづ概してその傾向が多少ともあると云つて差支へはなからうと思ふ。もしこの見方をあまり公式的にさへ適用しないならば……。

私の知る或る若い女に非常に辛いもの好きなのがある。彼女は、私の分析觀察したところに依ると、強烈な父コムプレクスを持つてゐた。さうして父親型の男を愛したが、性格はどちらかと云へばマゾヒストであつた。露出慾も強かつたがとにかく強烈な功撃力を歡迎する傾向が強かつた。この女が飛上る程辛いものゝ好きなのは、彼女の男性コムプレクスのためではなく、そのマゾヒズムのためであらうと解釋せられる。かうなつて來ると、甘さ辛さの解釋適用も、公式的であつては困ると云ふことが明かになつて來る。

裏切りの微笑

岩倉氏譯のロレンス作『ほゝえみ』には笑ふべからざる場合に笑はずにゐられない強迫神經症的の心理機制が描かれてあるが、同じやうな心理を示した或る同性愛者の場合が、守田有秋氏の『同性愛の研究』の中にヒルシュフェルド氏の書中から引例してある。

「或る同性愛者は、或る不幸に對して悼みの言葉を述べられたところ、却つて笑ひ出してしまつたさうである。此の男はその不幸な友人の葬儀に列した時、親戚の人の肩に寄り掛つて、自分の顔を匿してゐた。それは悲哀の情を隱すためではなくして、壓へ難い笑の爆發を隱してゐたのである。卽ち悲哀の感情の絕頂から哄笑の爆發を起したのである。」と。

ヒルシュフェルドはかゝる自己裏切り的な哄笑を以て何か同性愛に關係があるやうに考へてゐるのであらうか。守田氏の紹介文は簡單でそこまではよく分らないが、私はそこに何の關係もなく、たゞ強迫神經症と云ふべきものだと思ふ。私の知つてゐる某名家の老夫人も、かう云ふ傾向が強く、私が訪問した時に喜んで出て來られたのであるが、理由なくホホホと笑ひ出すのであつた。私は別に氣にとめなかつたが、その夫人の愛孃が母は病氣のために、眞面目でゐなければならないと思ふ場合には餘計に笑はずにはゐられなくなるのだから氣にしないやうにしてくれと辯解せられたので、ハ、アでは強迫神經症の傾向もあるのだな（ヒステリーの強いことは前々から聞いて知つてゐたが）と思ひ當つたのであつた。

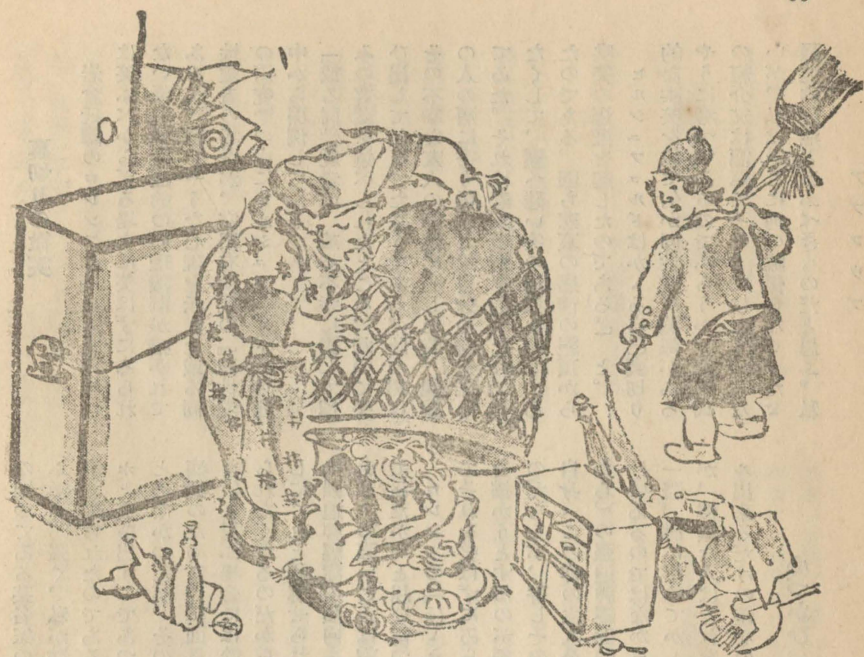
ロレンスの『ほゝえみ』も悲哀に際してそれを笑はずにゐられない矛盾の心理を描かうとするのが創作の意圖であつたのだらうが、併しその反面に、ロレンス自身（この作の主人公は勿論作者の影だから）の強迫神經症的傾向もそれを裏付けてゐるのではなからうかと思はれる。一體、誰にだつてかゝる心理はあるのだが、健康な人はそれを容易にコントロール出來るだけの差なのだ。

アプフウブ

心づかひ（漫畫分析）

この畫の一番の面白味は、非常に無關係な（寧ろ相反的な）ものゝ間に關係と相似とを見出してゐることである。お婆さんとバタ容れ、これ等二者は全く北極と南極と程に飛離れてゐる。お婆さんは舊式、純日本式と云ふことを直ちに聯想させるに對し、バタ容れは西洋式、ハイカラ、モダンを聯想させる。一方は脂ぎつた青春、活力を聯想させるに對し、他方は老衰、死を聯想さる。これほど對蹠的でありながら、而も他方にこれ等二者が「どれもゴミがかゝつちやわるい」點に於いて共通してゐる。意外な點に共通性がある。

も一つは鷄とお婆さんとである。お婆さんは家長たるお父さんの尊敬してゐる人で、家の中では最も尊い存在であり、鷄は殺しても喰つても一向差支へのない家の中の生物の間では最も尊敬せられざる存在である。この飛離れた二者が、同樣に取扱はれてゐる。

さうしてこれ等二種のものに對する二種の考へ方を、主婦とみよ子の兩人がそれ〲に代表してゐる。みよ子は子供で

★心づかひ・・・・　岡本一平

主婦「マアー　おばあさまとバタ入れへ鳥籠を冠せといたのはダアレ?」

みよ子「ハア、あたしよ。どれもゴミがかゝつちやわるいと思つて——」

あるから、常識（社會一般のセンス）がない。たゞ單純な理窟だけで考へる。理窟からだけで云へば、お婆さんもバタ容れも、ほこりの掛つて悪いと云ふ點では同じである。この理窟は正しい。さうして埃をさけるためには鷄籠などは最も適當なものである。併し常識から云へば、お婆さんを鷄籠で伏せると云ふのは家中の最尊族親を鷄と同格に扱つたことを意味し、由々しき不敬である。主婦は大いに狼狽したが、少女は平氣である。併し主婦の狼狽した心理の中にはお婆さんを伏せて了ひたいと云ふエディポス的な願望とその抑壓とがないとは云へない。岡本夫人かの子女史とその姑さんとは××××××さうだが、こゝらにもその家庭生活の一面が出てゐるのではなからうか。

　この畫の面白味は、主婦と少女との考へ方のチグハグからばかり來てゐるのではない。バタ入れと云ふ小さなものと、お婆さんと云ふ大きなものと、バタと云ふ新しいものと、お婆さんと云ふ舊いものと、鷄と云ふ卑しいものとお婆さんと

云ふ尊いものと、これ等の對比に於いて観者の観念支出が非常に齟齬して來るのだ。お婆さんを考へるに百の観念エネギーの支出をしなければならないとすれば、鷄やバタにはせいせい五か六でよい。つまりその間九十四、五の剩餘が生ずる。その九十五だけが笑ひとなつて爆發されるわけだが、それがさう全部爆發されず、そこに一種の哀感（パセチック・ユウモア）をたゝえしめるものは、お婆さんが實際に於いてバタ容れや鷄と同様に全く靜的な、受動的な存在し化し去つて了つてゐると云ふことを、認めざるを得ないからである。卽ち、センスの上では主婦の感ずる通りであるべきだが、理性の上からはみよ子の所置に十分の妥當性を認めざるを得ないのである。（挿圖參照。五月十二日朝日新聞から轉載。）

糞と味噌

「糞も味噌も一緒にする」と云ふ言葉の妙味は右の漫畫分析と同じやり方で分析出來る。讀者の內でどなたか分析して考察を書いて送つて下さい。

アプフウブ

利己家の良心

諸君が何か或る團體を構成してゐて、その團體に所屬する一人が、その團體の行動の極めて些末なる——例へば、相談會の通知が遅れたとか、日付が忘れてあつたとか云ふ如き——に就いて甚だ口やかましくなつて來たならば、その人はその團體に對して誠意がなくなつて來たものと見て差支へがない。（普通には、誠意があればこそ喧しく云ふのだと云ふが、それはこのやうな場合には當てはまらない。）何となれば、日付がなければ問合せればよいのだが、それを仕ようともしないのだから。結局、自分の良心の咎め（自分が團體に對して誠意がなくなつてゐると云ふ點についての）を自分になくするためには、罪過が團體の方にあつて自分の方にはないと云ふことを證明しようとの努力の現れなのだ。さうしてそのために、つとめて團體の行動の中に缺陥を捜さうとする。さうして少しでも缺陥があると、それを大袈裟にとりたてると云ふことになる。併し彼を憎むなかれ、彼はそれほど良心的なのだから。

お嬢さんの男性化

四月十七日築地本願寺で催された日本少年保護協會の座談會は、主として少年保護に關する成功談、失敗談、苦心談等が話題になつたが、そのうちから注目すべき問題を拾つて見ると……最近少年審判所に現れたいはゆる不良少女の傾向として著るしくなつて來たことは、少女の男性化といふ問題で、男裝せんがために男の洋服を盗んで着用し、堂々と銀座をねり歩くといふ少女も現れたとのことである。さうして此少女の男性化といふ傾向は、女學性などの言葉使ひや生活にも現れて、一流の女學校生徒でもタバコを喫むものがあるし「君」「僕」「何いつてやがるんだい」位は、何恥かしくもなく朝飯前にいつてのける有様だといふ。この原因としては、生活様式の洋風化その他があげられてゐるが、何より大きな原因としては、レビューの影響にあるらしく、當夜の注意の的となつた。」

（九三頁下段へ）

一、『兒童指導診療所に於ける兩親取扱の特殊法』カサリン・ムーア稿。
一、『ニグローとその教會』R・A・ビリングズ稿。
一、その他、新刊圖書雜誌批評紹介等。

『精神分析教育雜誌』昨年度第六號

一、『兒童教育に於ける兩親の無意識』プラーグのS・ボルンシタイン稿。
一、『非社會的兒童及び青年の分析的取扱に就いて』ロンドンのメリッタ・シミイデベルグ稿。
一、『思春期に於ける自慰惡習の矯正法』ブダペストのミカエル・バリント稿。
一、『アメリカに於ける兒童分析の狀態に就いて』アルバニーのC・P・マッコード稿。
一、『わが兒童觀察』ギインのリヒャード・ステルバ稿。
一、『禁制と慾求（兒童觀察斷片）』ギインのエディタ・ステルバ稿。
一、報告（一九三四年度に於けるアムステルダム、バーゼル、ブダペスト、コペンハーゲン、ロンドン、ルウツェルン、オスロ、ストックホルム、等に於ける分析的教育の實際報告）

內外彙報

『精神分析評論』昨年十月號

アメリカの分析學雜誌、第二十卷第四號の內容如左。

一、『ベリニの譬喩への脚註』ロンドンのP・L・ゴイテイン稿——フロイドのレオナルド論に於いて二人の母の存在がレオナルドの作品に特質的に反映せることに對し、ユングがその獨自の立場より人類に於ける二人の神話的母の存在論よりフロイド說を批評せるに、更に稿者が第三者として該問題に側光を投ずるためにイタリーの畫家ベリニの作品に就いてその譬喩を硏究せる興味深き論文。
一、『錯覺に關する精神分析說』ボストンのコリアット稿——錯覺に關する學說は從來三段の史的變遷を閱せりとなし、その第三段として精神分析の動的見解を、從來の記述的見解に對比して論究す。この稿者コリアットの論文『ワイルドの作品サロメの分析』は本誌昨年九・十月號に紹介せり。
一、『鳥類の本能的情緖生活』ハーバート・フリイドマン稿——前號よりの續稿。
一、『轉換症候として勃發せる激甚なる喘息の患者に就いての報告』G・W・キルスン稿。

一、新刊圖書及び雜誌批評紹介。

歐米分析學者よりの來翰

本研究所關係者古澤平作博士が、本誌第三卷第二號（同氏稿宗教論所載號）を海外の諸分析學者に寄贈せられたところ、それに對して、左の如き反響があつた。

「拜啓、東京精神分析學雜誌御惠送被下、誠に厚く御禮申上げます。ドイツ語又は英語に譯して論文を掲載せられることは、誠に結構なお考へで御座います。お蔭で日本語を知らない者にも讀むことが出來ます。

別便にて小誌精神分析學季報の兒童分析號（一九三五年一月號）並びに報告二三を御送り申上げました故、御笑納下さい。

東京精神分析學雜誌と我等の精神分析學季報と雜誌並びに廣告の交換をして頂ければ誠に幸甚であります。さうすれば御互に誌面に廣告し合ひ、雜誌も互に見合ふことが出來ると思ひますが、この提案は如何でせうか。

貴誌の三・四月號の內容を小誌の精神分析文獻時報欄にお載せいたしておきます。で、今後も繼續してさうして行きたいと思ひます。さうすれば編輯上での提携も成立つわけで御座います。ニウヨーク編輯主任ドリアン・ファイゲンバウム拜。四月廿五日。」

「謹啓、當方研究報告に對するが言葉誠に厚く存じました。お仰せの精神分析書拜讀の事、樂みをります。また日本に於ける精神分析發達に關する御稿は誠に興味深く拜見いたしました。敬具。シカゴにてフランツ・アレクザンダ、四月廿六日。」

「謹啓、罪惡感に關する興味深き貴論御惠送にあづかり、心より御禮申上げます。雜誌は遺憾ながら拜讀出來ませんが、目次を一覽いたしますと、如何にも面白さうであります。小生は頗る多忙で、且つ門弟も多勢で御座いますが、それでも夢の分析に關する待望の一書は既に完成いたしました。また時々お便り下さいますやう、待上げます。敬具。ヸインにてヰルヘルム・ステーケル、五月十六日。」

ファイゲンバウムとアレクザンダとの論文は本誌上でまだ紹介した事はないが、ステーケルの論文は岩倉具榮氏（第一夢の研究號）と伊東豐夫氏（心理療法研究號）とが飜譯紹介した。

最近國內事實

▼第三十四回日本神經學會記事（精神分析學に關する討論經過）

——於新潟醫科大學精神科病室傍講堂、四月二十八、九兩日

（但、この記事は二十九日午前中の事）

プログラム拔萃——

（七八番）、胃アトニー症の成因……古閑義之（慈惠醫大精神科）

（七九番）、不眠の實驗的觀察……堀田紫樹（〃）

（八〇番）、パロキシマーレ・タヒカルヂーの療法……………………森田正馬（〃）

(八一番)、森田氏の神經學說の性格………佐藤幸治(第三高等學校心理學教室)

(八二番)、フロイドの「不安神經症」の吟味
………早坂長一郎(東北帝大精神科)

(八三番)、「分析醫との同一視」現象
………山村道雄(〃)

討論經過——七九番堀田氏の演說終るや、早坂氏立ち「實は八〇番が終つてからまとめて質問追加すべき所、唯今八〇番缺席との報に接したのでこゝでお伺ひする次第であるが、七八番の方に答へて頂きたい」と冒頭し「森田氏說に於ては素質の成因をどう考へてゐるか」と質問する。之に對し古閑氏「先天的のものと考へてゐるが、後天的のもの、卽ち環境の影響といふことも除外しない」と答へ、早坂氏「精神分析學に於ては素質の成因を先天的のもの卽ち體質と、後天的のもの卽ち幼時の體驗との和であると考へてゐる。唯今お伺ひしたことによつて、森田說でもこの點に關しては精神分析學說と同一である」と追加す。八〇番は缺席の爲、跳んで八一番に入り、佐藤氏(舊京都帝大精神科)、精神分析學と森田氏說とを氏一個の解釋に從つて模型化せる圖表を揭げて登壇、神經症の成因と療法とに關する兩學說を紹介して之に批判を加へ「私の考へ方はその根本に於ては森田氏說と同じであるが、尙森田氏說にも吟味、發展の餘地があると考へる」とて森田氏說が表面的事實だけに捉はれて深く進まうとしない點を改むべし(例へば症狀の意味といふやうなことにももつと注意すべし)と言つたやうな點を擧げて演說を終れば、早坂氏再び立つて「私も永年精神分析學の本を讀んだが唯今佐藤氏御紹介の精神分析學なるものは私には少しも理解されなかつた。こと程左樣に唯今紹介された精神分析學說は我々の考へてゐるそれと異ふものである」と追加すれば、佐藤氏壇上から「今日は森田氏說を主として論じようとしたので分析學の方の說明は大ザッパにしたから、或は理解が困難であつたかも知れない。しかし私とて分析學の大綱は心得て居るつもりである」と答ふ。この時京城帝大教授久保喜代二氏立つて「私も精神分析學に興味を有ち、自分でもやつてみたが、深く進まうとすればする程シックリ自分のものといふ氣がして來ない。之に反し森田氏說は日本人たる私にとつて非常に解り易い。之は民族性の相違から來るのではあるまいかと思はれる」との感想を述べれば、佐藤氏「フロイドはユダヤ人でれるがユダヤ人以外の民族、例へばドイツ人にも分析學の信奉者が多數居る」とて民族性の相違による理解の難易につき久保氏と反對の意見を述べ、ミッテンツワイの說を持ち出せば聽衆の間に笑聲起る。早坂氏はフロイドの言葉を引用して「分析學は一つの心理學として獨立して存するもので、治療に寄與する所にその一つの應用方面に過ぎないものであり、森田氏說は治療だけを目標にして立てられた學說であるから、兩者の間にはその立場に根本的な差がある」とて暗に分析學

が醫師の間に理解されることが少いのも止むを得ない旨を諷示すれば、佐藤氏「早坂氏は分析學は一つの心理學として獨自の立場を有つと言はれたが、だからこそ私はいつも分析學を學ばんとする人は一般心理學をも顧慮して欲しいと言つてるんだ」とムキになつて言へば再び聽衆の間に笑聲起る。この時山村氏立つてフロイドの高弟アブラハムの例を引き「分析學の理解が困難だといふのは、分析學で謂ふ抵抗が働く爲ではないか」と久保氏に對へば、久保氏「さういふ言葉は分析學者が反對論者に對する時の常用語であるが、先にも言つた通り、私は分析學に反對を唱へてゐるのではない。私の感想を述べてゐるに過ぎない。分析學への理解を進めるには充分自己分析を行つてコンプレクスを解決しなければならぬとは私も感じてゐる所である」と縷々反對ではないが理解が困難な旨を反覆すれば、座長早尾教授「この後にも好演題が溜つてゐるからこの邊で討論を打切りたい」と述べ、次の演説に移る。

から書いて來ると大激論が交へられたかの如き印象が與へられるかも知れないが、當座の空氣は頗る和かなもので、お互に腹藏無く意見の交換をしてゐると云つたやうな調子であつた。尙注目すべきは、分析學と森田氏説とが議論の中心になつてゐるのに、森田氏に關係の深い慈惠大や根岸病院の側からは、答辯の爲に一人立つたのみで他には誰一人發言しなかつたことである。又神經學會に「民族性」が持ち出されたことは「時世なるかな」の感を深くせしめた。

▼早稻田大學精神分析學研究會創立――學生有志等の盡力に依り、今般同名の會同大學內に成立。會長は實驗心理學教室內赤松保羅教授、講義、圖書閱覽、見學などを目的とす。會員は同學大學部及び學院の學生に限り、希望者は赤松教授宛申込まれたしと。

六月十五日午後發會式を催したが、次第は次の如くであつた。

開會の辭……………………………………北垣照雄
挨拶……………………………………赤松保羅
精神分析研究者に……………………………長谷川誠也
分析學より見たる食慾と性慾…………………大槻憲二
坪內博士と精神分析…………………………平塚義角
日常生活と分析學……………………………北垣隆一

▼『ミニヨンの精神分析』平塚義角氏談――五月七日夜、早稻田大學獨逸文學會研究例會（於演劇博物館）

▼『文學の象徵主義的研究法』大槻憲二氏談――六月一日、午後、於早稻田大學英文學會六月例會。

▼『人生創造と人生見學』大槻憲二氏談――六月一日夜、人生創造第十一周年紀念會にて。

▼『男根統裁期前性的編成』山村道雄氏稿――廣島文理科大學內應用心理學會編『應用心理研究』特輯號（四月十日發行）所載。

▼『我國に於ける應用心理學書目錄』岸本惣吉氏編――『應用

心理研究』右同特輯號所載（內に精神分析關係書類も殆ど全部收載。」

▼『文學の革命』C・D・リウヰス稿（原文註釋付）――『カレント・オヴ・ザ・ワールド』誌六月號所載。（その要領解說の一部に曰く「フロイドの精神分析は學界の一大革命だ。この感化を蒙る文學は著く內省的となつた。彼等は更に進んで、フロイドの高調する個人主義から出發して政治的リベラリズムの復興を圖るかも知れない。或はサイコアナリシスに於ける人間動機の再認識から人間靈性の本質に新しい概念と說明とを與へることにより現代の要求する新しい宗教を生み出すかも知れない」云々と。）

▼『幼兒の性感と精神分析』大槻憲二氏稿――（刀江書院發行『兒童』五月號所載）

▼『兩親學講座』無署名――第一講「父と母と子の歷史」はカルヴァートンとシュマールハウゼン、共編の『新時代』の序言の紹介、第二講「兩親のサディズム」はフリッツ・ギッテルス稿の紹介。――『兒童』五月號の內。

▼『本能の政治に於けるウォーラスの見解を顧る(一)』戸澤鐵彥氏稿――『國家學雜誌』五月號內に精神分析學說への言及多し。

▼『汝は馬鹿だと云はれたものゝ精神分析』山田案山子稿――東京生氣倶樂部發行『生氣倶樂部』四月號。

▼『精神分析雜稿に就いて』大槻憲二氏――紀伊國屋發行『レツェンゾ』五月號所載。

▼『精神分析圓滿社會生活法』同氏稿――『人生創造』六月號。

▼『田植どき分析』同氏稿――『新演劇』六月號。

▼『現代唯物論と社會分析』同氏稿――『都新聞』文藝欄、六月四――六日連載。

▼『近代文學と精神分析』同氏稿――研究社『英語研究』七月號。

▼本誌前號內容に關しては卷末廣告欄參照。

本研究所研究會例會

五月例會は五月廿日夜、神田愛光舍階上に於いて催された。始めての會場で、隣室に某大學々生の集會があつて相當賑かで閉口した。食前、司會者より本誌前號所載語彙に就いての講義があつた。

食後、大槻憲二氏立つて『同性愛の心理』に就き研究發表があつた。本號卷頭の論文はその推敲せられたものである。こゝには載つてゐないが、同氏少年時代の同性愛的傾向などに就いての告白などもあつた。

續いて北垣隆一氏立つて『レビューの現代性』に就いて研究談があつた。本號所載の時評はその一部分である。

それから座談に入つたが、中心話題は大體において女性心理のペニス・ナイド（男性器羨望）に就いてゞあつた。それから

更に男女性心理の別に入り、長崎文治氏のホルモンの話など佳境に入らうとしたが、時刻の制限があつて、中斷せねばならなかつたのは遺憾であつた。

出席者は右言及諸氏の他に、土屋喜一、高橋鐵、同春子、福間光子、北垣照雄、大久保眞太郎、立川玄一郎、皆川郁夫、大槻岐美、伊藤芳子、宮田齊、佐藤基、平塚義角、小杉長平、小松德等の諸氏であつた。新來者は長崎氏紹介の盈進學園長丸山鋭雄氏であつた。

なほ、缺席挨拶のあつたのは長谷川誠也、岩倉具榮氏夫妻、中村建人、狩野儀三郎の諸氏であつた。

×

六月例會は十七日夜、久しぶりで神田驛前アメリカン・ベーカリ階上で催された。

食前、司會者より講義があつた。講義終つて新來者の紹介と、映畫鑑賞會及び公開講演會の相談及び廣告に關する報告があつた。

食後、駒澤大學教授富田義介氏が愛慾力慾二元説をリビドー單元説に對立せしめたいとの主張を座談的にせられたので、大槻憲二氏次いで立つて、『精神分析の科學性』に就いて研究談をせられ、富田説の心理哲學的である所以を説かれた。兩氏相峙して併しなごやかな空氣の中に、暫く理論的討議がなされたが、やがて、北垣隆一氏立つて『家族内に於ける兒童の愛情發展の過程』に就いて、大體フリウゲル説に依りつゝ、研究を發表せられた。

その後、夢の自己分析が諸氏から發表せられて、誠に他種の會合では絶對に見られぬ打ちとけた會談となつた、夢の發表をせられたのは、北垣隆一氏、同照雄氏の妹コムプレクス關係の夢、大槻岐美氏の夫君に對する願望充足的の夢、小杉長平氏の分析學習後の夢など、その他幼兒時代の種々な經驗に就いて、小野田幸雄、富田義介、高橋鐵氏等が話された。

出席者は右言及諸氏の他に、長崎文治、平野市郎、宮田齊、高橋春子、狩野儀三郎、福間光子、小松德の諸氏であつた。缺席挨拶のあつたのは、皆川郁夫、大久保眞太郎兩氏であつた。

本研究所講習會例會

五月例會は六日夜研究所に於いて催す。フロイド『精神分析總論』の内『精神分析要領』第二章『抑壓説と性慾説』に就いて精讀討議す。その後、高橋鐵氏「地獄極樂地理學」てふ興味ある隨筆を一讀せられた。次いで今秋催さんとする講演映畫會などの相談をなし、また雜誌の特輯題目たる同性愛問題に就いて種々討議するところがあつた。出席者は北垣隆一、同照雄、倉橋久雄、狩野儀三郎、土屋喜一、塚崎茂明、高橋鐵、大槻憲二、同岐美の諸氏であつた。

×

六月例會は三日夜、同所に於いて催す。

「精神分析要領」の第三章、「精神分析の理論的及び社會的擴充」に就いて精讀討議す。當夜は駒澤大學教授富田義介氏出席せられてその間に自己の夢の分析など發表せられて誠に活氣を呈した。出席者はその他、土屋喜一、塚崎茂明、狩野儀三郎、倉橋久雄、北垣隆一、同照雄、高橋鐵、大槻憲二、同岐美の諸氏であつた。當夜は六月例會とて、懇親會を兼ねて夕食を共にし、甚だ樂しい一夕であつた。

相談

結婚忌避の三人姉妹

問——私には今年廿三歳、廿歳、十八歳と三人の娘がございます。三人共年頃なので私は氣が氣でなく、それに夫でも生きてゐて吳れゝば兎に角、女手で三人もの娘のかたをつけるのは重荷です。けれどもそんな事云つてゐられるものでもないので、早くも姉娘から緣づけたいと親戚や知人にお願ひするものですから、それ相當の話を方々から持つて來て吳れるのですが、當の娘は平氣なもので、見合ひの寫眞を撮る樣にと云つてもなかなか撮らないし、見合ひだと云つても馬鹿にしきつて結婚をまるで遊びの樣に思つて私を手古摺らせます。過日も或劇場で見合ひする事になりましたが、本人にそれを云へば旋毛を曲げて行きさうもないので、只の觀劇だと云つて連れて行きました所、それが後になつてわかつてからは一週間程もすねてゐました。それが妹達にも影響して、結婚なんてをかしくつてと云つて私を途方にくれさせます。若い元氣でわけのわからない事を考へる娘達をどう導けばよいでせうか。口うるさい世間はお高くとまつてゐるの、より好みをしてゐるの、お母さんがむづかしいのだらうのと、とり〲に噂されるので私の氣持はたとへやうもありません。母として子供の指導も出來ないと云ふのはお恥かしい事でございますが、何卒よい方法をお敎へ下さい。

（牛込、惱む母）

答——『若草物語』そつくりですね。映畫を御覽になりましたか。三人姉妹の內、どなたか（恐らくは長女）が男役を勸め、他の二人が女役を勸めて、平和な同性愛的雰圍氣を樂んでゐられるのだと思ひます。少くとも『若草物語』の場合を參照すれば……。御主人はいつ頃お亡くなりになつたのか知りませんが、貴女の女手一つでお育てになつたことが、大部分の原因であつたらうと思ひます。それは併し、貴女の御家庭では必然の事であつたのですから、誠にお氣の毒です。併し、貴女も意識面では娘さんたちの拒婚同盟を困つてゐられるが、無意識面では祕かにそれを喜んでゐられると云ふやうなことはありませんか。もしさうでなかつたら貴女に對して甚だ失禮ですが、併し世間の大部分の母親方は（殊にその人が夫と夙く死別れて一人で子

供を育てゝ來た場合の如きは）自分の子供の結婚に一種の嫉妬を感ずるものであります。で、娘さんたちは女親の無意識の本音を察して故意に「結婚なんてをかしくつて」と云つてゐられるのではないでせうか。その邊の心理は私が遠くから想像してゐるのでは問題になりません。貴女に分析眼があるならば、よく觀察して御覽なさい。何よりもまづ貴女の自己分析が必要です。次に娘さんたちの分析にと進まねばなりません。さうして務めて男性との交際の機會をお作りになることです。三人の内一人が陷落すればアトはもう大丈夫です。次々に落城することは、『若草物語』の場合と同じです。尤も、こんなことを私が云つてゐるのを本人に見つかつたら、またどんな風に抵抗を起して「旋毛を曲げ」られるかも知れませんが……。

以上は同性愛的契機と、母親への氣兼ねとを擧げて見たのですが、なほもう一つナルチスムスを擧げねばなりますまい。少女は一體に自己戀愛的で相手は要らぬと云ふ氣持の強いものです。それに對する處置法は一寸一口には云ひきれません。分析的方法でぼつ〳〵說得するより外はありますまい。（記者）

ヴィナスは處女か

林芙美子は都新聞（六月八日）に隨筆を寄せて、ギリシアの女神ヴィナスは處女か非處女か半處女かを疑問にしてゐたが、彼女は貝殼の中から生れ出た瞬間から既に一人前の女として、否、母としての威嚴を具へてゐる、不思議な觀念的生物であるから、分析學から云へば、林女史の擧げた三つの假定が何れも妥當すると云つて差支へないのだ。古代の英雄聖者はみな處女なる母から生れたとされてゐるが、ヴィナスもまた一種の處女なる母の觀念の具象化であることは疑ふ餘地がない。たゞ、こゝに面白いのは、ヴィナスは（ペイタアも云つてゐるやうに）マドンナの如く子供を抱いてゐないと云ふことだ。何故だらうか、これは研究して見なければならない。（R）

（編輯後記補遺）　霜田氏のボーヅアン紹介論は前號にて一先づ終りとしておきたいとの事です。長谷川氏は久しぶりの執筆で讀者は喜ばれることゝ存じます。平塚氏のトルストイ論は筆者の都合により今號は臨時休載であります。

研究所事業案内

一、分析部

・神經症治療（ヒステリー、强迫症、恐怖症、妄想症、その他）

・性格改造（惡癖、奇習など現實生活に不適當なる性向にして無意識病根に基くもの）

・客員の診察（分析的又は醫術的）希望の方には、紹介の勞をとるべし

二、通信分析部

・分析法は每日、患者が分析者の許に通ひて、處置を受けるが正當なれど、遠隔の地に居られたり、その他、經濟上、健康上、それの出來にくい人々のために、この部を設く。

・希望者は、その姓名、年齡、病歷、手記、感想、夢の記述などに、料金（十圓）を添へて當研究所にお送り下され度。分析診斷明細書を相當期日の後に送る。手記その他は絕對に他に洩らすことはなし。文字は明瞭に書かれたし。

・擔當者は研究所に御一任ありたし。それぞれ適當の人々にふり向ける。

三、敎育部

・當研究所主催の講演會、公開講習會、演劇、その他。

・所員並に客員に對して他より依賴の講演又は講習會。

四、出版部

精神分析に關する雜誌及び圖書の出版。

五、研究會

・研究の發表とその討議を目的とす。每月一回、第三月曜夕、日比谷美松五階貴賓室にて開催その都度通知、出席希望者に對しては別に資格制限を設けず。會費は食費、會場費、通信費とも出席の都度、六十錢。（但し誌代を申受く。雜誌購讀は會員の義務とす。）

・雜誌のみに依りて研究の發表又は諸般の事業に參與せんと欲する向は特別誌友（直接購讀者）となるべし。

六、講習會

每月一回、第一月曜夜、於研究所開催。當分主としてフロイド著書の精讀。會費二十錢。

次號內容豫告

家庭紛爭と家族心理

諸新聞雜誌の相談欄なるものが今日の隆昌を來してをります原因は、家庭に於ける種々な問題が錯綜してゐるためでありますが、普通の新聞雜誌は大衆向きでありますが故に、どうしてもサロンとしてのお上品ぶりを餘儀なくされ、本當の事に觸れて論究することが許されません。みんな問題の表皮を無難に撫でゝゐるだけであります。本誌編輯部が、人々を泥沼のやうな惱みから救ふために敢へて立たんとする所以であります。

嫁と姑との心理的關係の問題…………

家庭に於ける兒童心理發達の過程………

母子關係の心理に就いて…………

女中と主人夫婦との三角關係…………

道德的サディズムと井戸端會議…………

今度も故意に執筆者名を發表しませんでしたが、いつも本誌は豫告以上の內容を以て讀者に接してゐると信じてゐます。なほ特輯題目外に諸論文、隨筆、飜譯、小說、時評、雜話、などの滿載せらるべきは申すまでもありません。

フロイド先生 額面用肖像頒布

昭和八年春にフロイド喜壽祝祭劇を當研究所が公演しました際に、フロイド博士から本研究所に寄贈せられました大肖像畫を縮寫して、讀者諸賢にお頒ちします。その銳い眼光と、高邁な額と、力强い鼻梁とに於いて、よく碩學の性格とその學風とが象徵されてゐます。

品　種——寫眞（シュムツァー原作畫。立派なものであることを信じて下さい）

用　紙——上質寫眞用紙

大きさ——縱九寸五分、橫七寸五分

代　價——一圓五十錢（送料共）但し特別誌友には一割引いたします。

注　意——額に入れる際、裏面に新聞紙を挿入しますと印刷インキがしみて黃色くなります御注意下さい。

編輯後記

本號も相當充實した内容を具へて讀者諸氏にまみゆることが出來まして、編輯委員一同のひそかに滿足に思ふところであります。出來るだけ多數の讀者に興味を以て讀んで頂けるやうにと心掛けて編輯してゐますが、同時にあくまで良心的であることを心掛けてるつもりです。

×

例により、新執筆者を御紹介いたします。

宮田齊氏は早稻田大學文學部英文學科昭和六年度卒業の英才でありまして、成女學校長宮田修先生の御令息であります。目下同校に教鞭を執りつゝ、父君の後繼者として校長學の修得中と遠察してゐます。修先生もよい後嗣を持たれてお芽出たい。分析教育學の無盡藏の畑は今後の氏の研鑽を待つてゐます。

北垣照雄氏は既に本誌上で讀者諸氏にお馴染の同苗隆一氏の令弟でありまして早稻田大學史學科在學中、兄弟揃つてよい才能の持主でありまして、からした人材の發見こそは我々苦難の道を辿り來るものゝ實に唯一の逸樂でなければなりません。

×

大槻氏著『精神分析概論』は增製の暇なく品切になり、御注文下さつた方に對して送本が遲れまして誠に申譯ありませんでした。丁度、同氏の『精神分析雜稿』その他著述の編纂が重なり合ひ、非常に多忙でありまして、誠に相濟まぬことであつたと著者は云つてゐられます。その代り今度の增訂版は面目を一新し、著者に於いてやゝ會心のものとなつたさうであります。

×

フロイドは機智的なものに興味を持つてゐるやうでありますが、漫畫分析の如きは從來まだ何人も試みなかつた新分野。不老泉院主先生に囑して今後每號續けて頂きます。漫畫家自身でさへもかくも深遠な意味が自作にあらうとは恐らく意識してゐないだらうと思ひます。

昭和十年六月二十五日印刷
昭和十年七月一日發行
（隔月刊）定價五十錢（郵稅四錢）

東京市本鄕區駒込動坂町三二七
編輯及發行　大槻憲二
東京市牛込區改代町廿四
印刷所　理想社印刷所

定價一部　五拾錢（郵稅四錢）
半年分　一圓五十錢（送料共）
一年分　三圓（送料共）

御注文規定

・本誌の御注文は一切前金に御願ひ致します。
・御送金はなるべく安全至便なる振替を御利用下され度く、振替口座東京七八八一七番へ御拂込み下さい。
・郵券代用の場合は一割增に願ひます。
・本誌廣告に關しては、御照會次第本部員を伺はせます。

東京市本鄕區駒込動坂町三二七
發行所　東京精神分析學研究所
振替口座東京七八八一七番

大賣捌所　東京堂・東海堂　大東館・北陸館

(合本)「精神分析」

第一卷・上(五月創刊號から八月號まで)

第一卷・下(九月號から十二月號まで)

第二卷・上(九年一月號から四月號まで)

第二卷・下(九年五月號から十一・十二月まで)

總布裝美本　各冊(二圓五十錢 送料ナシ)

單册は——携帶に、書入れに、素讀に………

合本は——書齋に、精讀に、保存に………

總目錄は毎卷最終册尾に附けます。

バックナンバー單册も多少あり。
(創刊號六十錢、その他各五十錢)

讀者諸氏に告ぐ

創刊號が賣切れて了ひましたので、從つて合本の「第一卷・上」は增加製本不可能となり、これまた品切となつてしまひました。御註文をお斷した方もありまして、誠にすみませんでした。

第一卷の二號以下は、まだ單册でも揃ひます。併し、第一卷第五號の「第一兒童心理研究號」は殆どなくなりさうになりました。困つてゐます。

創刊號と第一兒童心理研究號とは當研究所にて相當價格で買戻したいと思ひますから、御不用の方は當方へお賣り下さい。

(研究所出版部)

長谷川誠也著

文藝と心理分析

定價二圓七十錢
送料十六錢

本書の四大特色

一、精神分析各派を綜織的に研究せること、
一、英文學界に於ける斯學影響の研究に詳しきこと、
一、文明批評的見地をとれること、
一、參考資料に精しきこと、

主要目次

一、心理分析の文學
二、文明に對するアムビバレント心理
三、內省と自我
四、リビトオ說と心理タイプ
五、無意識の意義
六、フロイドの無意識說
七、アドラーの優越慾說
八、ユングの集合無意識說
九、夢と象徵
十、白日夢と文藝
十一、心理的タイプと美學說
十二、溯源的研究の危路……(その他)

日本橋區通三丁目八
振替東京一六一七番　春陽堂

昭和八年七月七日 第三種郵便物認可
昭和十年六月廿五日印刷納本
昭和十年七月一日發行
隔月一回一日發行
精神分析 七・八月號
定價金五十錢 郵稅四錢

III. Jahrgang, Heft 4, Juli-Aug., 1935. Erscheint zweimonatlich.

ZEITSCHRIFT FÜR PSYCHOANALYSE

Herausgegeben vom „Tokio Institut für Psychoanalyse."

(Sonderheft für Homo-und Hetrosexualität)

Inhalt

Preis des Einzelheftes, 50 Sen

Tokio Psychoanalytischer Verlag
327, Dozakacho, Hongo-ku Tokio Nippon.